未来を創る女性首長たち

未来のリーダーへ贈るメッセージ

女性活躍の輪
Women in Action

女性首長による
びじょんネットワーク

はじめに

日本には1,700を超える自治体がありますが、2025年３月現在、女性首長（知事、市区町村長）は約70名で、全体の数パーセントに過ぎません。意思決定層における女性の少なさは深刻な問題です。これは、歴史的背景や職場環境、制度、無意識のバイアスなどが原因とされていますが、ロールモデルの少なさもその一つです。女性のロールモデルは、キャリアや人生の目標を設定する上で非常に重要です。

本書は、その一助となるよう「女性首長によるびじょんネットワーク」が制作しました。「女性首長によるびじょんネットワーク」は、令和元年に小池東京都知事と吉村山形県知事が立ち上げ、全国すべての女性首長が参画しています。毎年、女性首長が集まり、駐日女性大使や女性経営者と共に、女性の視点を取り入れた組織運営や地域活性化策について意見交換を行い、女性が輝く社会の実現を目指して取り組んでいくことを宣言しています。

この本は、現在リーダーとして活躍している女性首長の様々な経験談を集めたものです。首長を目指した

きっかけ、自分らしく仕事とプライベートを両立する姿も紹介しています。これほど多くの女性リーダーの体験談をまとめた冊子は他にはありません。

今回の制作にあたり、ご寄稿いただいた全国の女性首長、メキシコ駐日大使、女性経営者、東京商工会議所の皆様に心から感謝申し上げます。

本書を通じて、女性リーダーたちが培ってきた経験やノウハウを共有することで、あなたのロールモデルとなることを願っています。そして、女性活躍の輪を一緒に広げていきましょう。

女性活躍の輪
Women in Action
×
女性首長による
びじょんネットワーク

女性首長によるびじょんネットワークは、女性活躍の輪を日本全体に広げるプロジェクト「Women in Action」とともに、気運醸成を進め、男性も女性も分け隔てなく活躍する調和のとれた社会を広げてまいります。

Contents 目次

はじめに 2

【座長挨拶】
Women in Action
今こそゲームチェンジを起こす
東京都知事 小池百合子 12

【座長挨拶】
互いを認め合い、共に助け合い、
誰もが希望する生き方で輝ける社会に
山形県知事 吉村美栄子 14

01 女性ならではの強みを活かして
より働きやすく、活躍できる社会をつくる
茨城県土浦市長 安藤 真理子 18

02 70代、人生これから！
自分に熱いエールを！
千葉県勝浦市長 照川 由美子 22

03 地元に対する熱い思いを
大切に、丁寧に形にしていく
新潟県中魚沼郡津南町長 桑原 悠 26

04 親子2代で地域に貢献。
〝まさか〟の坂を乗り越える
福岡県宗像市長 伊豆 美沙子 30

05 より多くの女性が意思決定に携わり
区民の笑顔が溢れる江東区に！
東京都江東区長 大久保 朋果 34

06 性別に縛られず〝私らしく〟
地域のために〝伸び伸び〟と働く
福井県大野市長
石山 志保
38

07 同じ悩みを抱える女性のために
学び、気付き、行動する
栃木県栃木市長
大川 秀子
42

08 豪雨災害の経験を踏まえ
防災意識の向上に取り組む
岡山県倉敷市長
伊東 香織
46

09 自分らしさを発揮し、
一歩を踏み出すチャレンジを！
千葉県香取郡多古町長
平山 富子
50

10 弁えるより行動を！
次世代に理想の社会を繋いでいこう
青森県東津軽郡外ヶ浜町長
山﨑 ゆいこ
54

11 政治の力で
市民の命と生活を守る！
千葉県柏市長
太田 和美
58

12 地方自治の現場から民主主義を取り戻し
成熟された市民社会を確立する
東京都杉並区長
岸本 聡子
62

13 女性は政治家に向いている！
常に前向きさを忘れないで
埼玉県秩父郡長瀞町長
大澤 タキ江
66

14 もっと良い環境をつくるために
地道に着実に歩みを進める
大阪府池田市長
瀧澤 智子
70

15 強い志を持てば、共感の輪が広がり
想いは必ず成し遂げられる
千葉県君津市長
石井 宏子
74

16 性別は個性の一部
自分らしくしなやかに人生を楽しむ
東京都東大和市長
和地 仁美
78

17 地域に合った地生えの政策で
男女ともに活躍できるまちに
栃木県下都賀郡野木町長
真瀬 宏子
82

18 性差によるアンコンシャスバイアスを
なくすため自ら古い慣習を打ち破る
長野県諏訪市長
金子 ゆかり
86

19 地域から社会を変えていく
東京都品川区長
森澤 恭子
90

20 すべての人がそれぞれの人生で輝ける社会に
一緒に社会を変えましょう！
群馬県北群馬郡榛東村長
南 千晴
94

21 現状に危機感を持ち、行動を起こすことで
未来は変えることができる
新潟県加茂市長
藤田 明美
98

22 一つひとつの物事に丁寧に向き合い
次世代へ希望のバトンを繋いでいく
東京都西多摩郡日の出町長
田村 みさ子
102

23 笠岡に新しい風を吹かせたい！
市民目線の政策で古い慣習に挑む
岡山県笠岡市長
栗尾 典子
106

24 若い世代の声を大事に拾いあげ
フレッシュな区政に変えていく
東京都豊島区長
高際 みゆき
110

25 閉ざされた村政をオープンに
住民の声に耳を傾け、開かれた社会をつくる
北海道虻田郡留寿都村長
佐藤 ひさ子
114

26 「未来志向型の市政運営」へ
市民参加のまちづくりを推進
栃木県那須烏山市長
川俣 純子
118

27 大好きな酒田のまちを
「日本一」女性が働きやすいまちに
山形県酒田市長
矢口 明子
122

28 市民が主役「共創のまちづくり」を実現し、
子どもたちに誇れる座間市を残す
神奈川県座間市長
佐藤 弥斗
126

29 色々迷わずにまずは行動で
「市民参加のまちづくり」を目指す
群馬県前橋市長
小川 晶
130

30 生き生きと暮らしていける地域づくりを推進
高知県吾川郡いの町長 池田 牧子 134

31 性別によらず意欲ある人が活躍できる社会を目指す
愛知県長久手市長 佐藤 有美 138

32 町民の皆様に支えられ、自分で定めた道を切り拓く
山形県飽海郡遊佐町長 松永 裕美 142

33 多角的な視点や考え方で可能性は大きく広がる
和歌山県日高郡美浜町長 籔内 美和子 146

34 フットワーク軽く現場に出向き笑顔が続くまちづくりを進める
宮城県黒川郡大衡村長 小川 ひろみ 150

35 女性たちの可能性の扉を開く勇気と力になりたい
大阪府大東市長 逢坂 伸子 154

36 女性のつながりを強みに、「だれもが幸せなまち」を目指す
埼玉県草加市長 山川 百合子 158

37 女性の持つ個性や能力を育て地域の活力につなげていく
宮城県仙台市長 郡 和子 162

38 子育て世代を全力で支援
明和町を安心して暮らせる町に
三重県多気郡明和町長
下村 由美子
166

39 成功だけでなく失敗した経験も
地元の未来のために活かしていく
徳島県三好市長
高井 美穂
170

40 自分流のリーダーシップで
三宅島の未来をつくっていく
東京都三宅島三宅村長
山高 亜紀子
174

41 何事にも誠実に、
まっすぐに取り組む
千葉県鎌ケ谷市長
芝田 裕美
178

42 移り住んだまちを救うため
新しいチャレンジを重ねていく
神奈川県中郡二宮町長
村田 邦子
182

43 誰もが夢や希望を描ける
社会をつくると決意
愛知県碧南市長
小池 友妃子
186

44 女性が活躍できる社会を実現して
日本をリードしていく港区をつくりあげる
東京都港区長
清家 愛
190

45 町民の小さな声も大切に
貴重な意見を町政へ反映
福岡県鞍手郡小竹町長
井上 頼子
194

46 子どもたちの未来のために
あらゆる分野で女性の活躍を推進する
三重県鈴鹿市長
末松 則子
198

47 リーダーになり人生が充実
常に笑顔で前進あるのみ！
沖縄県中頭郡中城村長
比嘉 麻乃
202

48 様々な課題に対して危機感をもち
真摯に一つひとつ解決する
鳥取県東伯郡琴浦町長
福本 まり子
206

49 自身が行動を起こすことで
町民が〝変わる〟シンボルに
岐阜県羽島郡岐南町長
後藤 友紀
210

50 現場に足を運び意見を交わす
「双方向主義」を実践
東京都北区長
やまだ 加奈子
214

51 女性や子どもの権利を守るため
自分が置かれたこのまちで使命を果たす
兵庫県宝塚市長
山﨑 晴恵
218

52 支えてくれる人たちの思いに
熱い情熱と冷静な行動でこたえる
大分県日田市長
椋野 美智子
222

びじょんネットワークのあゆみ 227

【寄稿 1】
女性の参画が社会を変える
―メキシコと日本の挑戦
駐日メキシコ大使
メルバ・プリーア 246

【寄稿 2】
持続可能な社会に必要な力
元日本銀行 理事
株式会社豊田自動織機 取締役
株式会社EmEco 代表取締役社長
清水 季子 248

【寄稿 3】
自分らしく生きていくために
株式会社Mentor For 代表取締役CEO
池原 真佐子 250

むすびに
東京商工会議所 会頭
小林 健 252

Women in Action

今こそゲームチェンジを起こす

東京都知事

小池 百合子

KOIKE Yuriko

女性活躍の輪を日本全国へ

私は、日本の最大の未活用エネルギーは女性の力だと考えています。時代がめまぐるしく変化する中で、持続可能な社会、明るい未来を創り上げていくには多様性が欠かせません。その実現を左右する鍵が、女性の活躍です。「東京は、もっと輝けるはず」。その思いで、東京都知事に就任して以降、女性管理職を登用する企業への支援や男性育業取得率の向上、東京都の審議会へのクオータ制の導入などの施策を展開し、女性の活躍を後押ししてきました。

日本は、まだまだ世界から遅れをとっています。とりわけ、意思決定に関わる女性の少なさは深刻です。今こそ、ゲームチェンジの時。東京都は、女性活躍の輪を日本全体に広げるプロジェクト「Women in Action」、通称「WA（わ）」をスタートさせました。

このびじょんネットワークでは、企業の経営層や女性経営者、さらには各国の駐日女性大使の皆様と連携して、お互いの経験を活かし、伸ばしていきます。みんなで力を合わせ、日本中で女性活躍を力強く推し進めましょう。

未来をつくる女性の皆さんへ

本書では、それぞれの女性首長が、首長を目指したきっかけやこれまでの経験などを、次世代の女性リーダーに向けて綴っています。誰もが夢や希望を抱き、自己実現を追求できる社会を実現するために、私たちにできることは何か。読者の皆さんの勇気と希望を引き出し、高め、具体的な行動を応援していきたいと思います。

東京都知事　小池百合子

互いを認め合い、共に助け合い、誰もが希望する生き方で輝ける社会に

山形県知事

吉村 美栄子

YOSHIMURA Mieko

日本の元気、女性から

持続可能で活力ある社会を実現するためには、人口の半分を占める女性も、能力を十分に発揮して活躍することが不可欠です。女性の能力が存分に発揮されないのは、社会の大きな損失だと考えます。

誰もが輝き幸福を実感できる未来

私は、知事就任当初から、誰もが性別にかかわりなく個人として尊重され、その個性や能力を十分に発揮できるよう、先頭に立って男女共同参画の推進に取り組んでまいりました。全国知事会でも「男女共同参画プロジェクトチーム」のリーダーとして「ジェンダー平等の実現に向けた提言～一人ひとりが幸福を実感できる社会の実現に向けて～」をとりまとめ、政府に強く要請しています。

人口減少が急速に進む中、日本が活力を維持し、さらに発展していくためには、政策・方針決定過程や、地域・経済などあらゆる分野に女性も参画し活躍していくことが不可欠です。そのため本県では、これまで女性の参画が進んでいなかった防災や科学技術分野などへの参画拡大や、企業における女性登用の一層の促進に加え、男女共同参画の視点を持つ次世代の人材の育成にも取り組んでまいります。

皆さんの活躍で、誰もが輝ける社会を実現していきましょう！

女性首長のストーリー

全国から集まった52名のメッセージ

女性ならではの強みを活かして より働きやすく、活躍できる社会をつくる

01

茨城県
土浦市長

安藤 真理子

ANDO Mariko

1960年11月18日 茨城県土浦市生まれ
1982年 成城大学短期大学部　卒業
2006年4月 茨城県訪問介護協会副会長
2007年5月 土浦市議会議員
2015年1月 茨城県議会議員
2019年11月 土浦市長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は、5歳の頃から市議会議員の父を見てきました。正直に言えば、政治活動や選挙の大変さを見てきたので、自分は政治家にはならないとずっと思っていました。

大学卒業後は社会人として働き、結婚、出産を機に退職。専業主婦として生活していました。子どもが成長してきた頃、介護の仕事をしようと思ったのですが、小さい子どもがいるということで、なかなか再就職できませんでした。そこで、私と同じような境遇の女性がたくさんいるのではと考え、そういう人たちが働きやすい会社をつくろうと思い、起業しました。介護の仕事をしている中では、様々な課題があり、次第にその声を国に届けるにはどうしたらいいのだろうと考えるようになりました。ちょうどその頃、父の市議会議員引退がありました。父の引退というきっかけではありましたが、父の跡を継ぐというよりは、声を届けるための機会をもらったと思い、市議会議員になろうと決めました。

その後、市議会議員を経て県議会議員になり、茨城県の視点から土浦市を見たときに、昔は県南の中心地だった土浦市が、今はとても元気がなくなっていることが非常に悲しくなりました。また、議員として様々な地域を回っている中で、たくさんの方から「土浦市を変えてほしい」という声をお聞きしました。これはもう「私がなんとかしなければならない」と思い、令和元年の土浦市長選挙に挑戦をして、市長に就任させていただきました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

苦労というわけではないですが、女性市長ということで、何をしてくれるのかという期待と、単純に何をやるの？ という興味を持っていただいています。多分、男性市長と同じことをやったとしても注目されるので、その中で活動していくのは簡単ではありません。ただ、その点において、取材機会は多く、土浦市をPRできて大変ありがたく思っています。

私は、男性市長でなければできない、女性市長でなければできないことは、基本的にないと思っています。ただ、女性の目線でないと気付かないことがあると思うのです。例えば、私は女性で、母で、子どもがいて、女性として働いてきた経験があるからこそ気づくことがあります。災害時、男性目線だと、小さい子のお風呂や女性特有のニーズといったところは気づきにくいと思います。子育てに関しても、ただ制度をつくればよいのではなく、例えば子供連れのスペースをつくるとき、母親目線だと「もっと明るくなくちゃ、子どもが喜ぶものをここに置かなきゃ」と細かい点にも気づきます。

だからこそ、より良い社会をつくるためには、女性が活躍できる場所をつくっていかなければなりません。力があればどんどん仕事していきましょう、それこそ管理職や社長にもなりましょうと、そういう環境をつくっていくことが重要だと思っています。今でこそ女性も活躍できる環境が整ってきましたが、より女性が働きやすく、活躍できる環境をつくっていきたいと思います。

Evidence 取り組み実績

茨城県内唯一の女性首長として、土浦市における各審議会の女性委員が占める割合の向上に取り組んでまいりました。就任前と就任後を比較しますと、すべての分野において、女性の割合が上昇している状況です。また、「土浦市女性模擬議会」を開催し、市政の仕組み・議会活動などへの理解・関心を深め、政治分野における女性活動を推進しております。さらには、市役所職員に対しましても、女性管理職の積極的な登用や旧姓使用制度の導入など、女性職員が意欲を持ち、能力が発揮できる環境づくりを進めているところです。今後も、誰もが輝ける社会を実現できるよう、全力で取り組んでまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

夢は強く願えば必ず叶う。このことを皆さんに伝えたいです。私は常にそう信じてきましたし、実際にその通りになりました。なので、夢は強く持っていてほしいと思っています。

やりたいことがわからない方もいるかもしれません。私も、政治家になったのは45歳。それまで政治家になるとは全く思っていませんでした。わからないのは当たり前、まずは興味があることに一生懸命取り組んでみてください。やりたいことが必ず見つかります。

将来、政治家や社長になるかもしれませんし、全く予想していなかった仕事をしているかもしれません。皆さんは無限の可能性があります。一生懸命生き、全力で取り組めば、夢は必ず叶います。

⬅自治体ホームページはこちら

70代、人生これから！
自分に熱いエールを！

02

千葉県
勝浦市長

照川 由美子

TERUKAWA Yumiko

1952年8月23日 千葉県勝浦市出身
1973年3月 千葉敬愛短期大学初等教育科卒業
1973年4月 千葉県公立小学校教諭
2010年4月 いすみ市立古沢小学校長
2012年5月 夷隅地方教育研究所長
2015年5月 勝浦市議会議員（1期目）
2019年5月 勝浦市議会議員（2期目　～2022年8月）
2022年8月 勝浦市長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

退職後、母を看取ってから市議会議員となり、2期目の終盤のこと。突然の市長逝去により市長選挙を行うこととなり、市議会議員だった男性3名が出馬表明しました。女性も出馬するのが望ましいとも考えましたが、70歳を迎えようとしていた私は、体力・気力面で自分自身が市長をめざし活動することは厳しすぎると判断しました。

そのような折、今野由梨さんという女性経営者の講演を聴く機会を得ました。ダイヤル・サービス（赤ちゃん110番）の創業者であり、代表取締役の由梨さんは、80歳半ばには全く見えません。10センチのハイヒールで颯爽と登場し、2時間にわたり精力的に語ったテーマは、「80代、人生これから！」。そのパワーあふれるお姿に心が躍り、大きな勇気を頂きました。思い切って挑戦してみよう！講演会場を出る時には、「70代、人生これから！」と自分にエールを送っていました。

それから1ヶ月、怒濤の日々であった選挙活動を乗り切り、市長職を担うことになってまもなく2年半です。あの時の由梨さんの声、「準備してこの世に生まれた人はいない。人生、アドリブよ！悩まない。誰かのためにまず動くこと。衰えるのではなく、質が変わるのよ。この先私はどんな私になっていくのか。自分の変化を面白がりながら、この命、生き切るわ！」に、今も励まされています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

市長として2年半、「苦労している」という実感はあまりありませんが、女性首長としての「苦労らしき」ものを一つ挙げるなら、ほとんどが男性である首長・議員・組織の代表者等との「意見調整」です。女性を軽視する傾向は減ったと思われますが、差別的目線や発言をする人はまだ存在します。こちらの要望を良い方向に向かわせるためには、感情を抑え言葉を飲み込まなければ、先に進めない場合もありますが、ここは！と思う時は、ワンテンポ間を置き、改めて発言内容を示しながら毅然とした申し入れを行い、自覚を深めてもらえるよう努めています。

まもなく73歳になる私自身の課題は、「体調管理」です。40代最終、ストレスのかかる役職を担う中、気管と胃腸を痛めた私は、60代後半から咳き込むことが多くなり、おなかを壊すことが頻繁にありました。これは、ハードな日程をこなし動き回る首長にとっての命取りになります。まずは、症状・食物・環境等を自分なりに記録・考察し、原因となるものを洗い出し、特定の食物や環境変化等に気をつけるようにした結果、予想以上の改善が見られました。衰えてきた身体と真剣に向き合った後の喜び！　次は「運動不足」をどうしていくか、「減量」が重い課題です。

Evidence 取り組み実績

ここ5年間の勝浦市の出生人数は激減傾向にあり、少子化が最も切実な課題です。そこで、2025年4月より、「こども未来応援課」を新設し、将来を見据えたまちづくりを進めます。まずは、市民の心に響く「子育て応援宣言」を行い、未来へのビジョンを示したいと考えます。次に、これまで進めてきた「子育て経済支援」をさらに充実させ、切れ目のない支援を行うことにより、出生率アップと、定住の促進強化を図りたいと思います。子育て拠点との連携を図りながら、まち全体で子育てを応援する雰囲気をつくり、「涼しいまち勝浦」の次は、「ゆりかごのまち勝浦」と言われるよう努めてまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

首長としての楽しみがいくつかあります。そのひとつは、個性豊かな人々との出会いが毎日あることです。地域産業を盛り上げているメンバーや組織のリーダー、熱い情熱をもった起業家達…その中にキラキラ輝く女性の姿を見かけると、心が希望で満たされます。先人のご苦労とその思いを忘れずに、今やるべきことを皆と相談し、一丸となって取り組むことができるのも、喜びの一つです。「自分を縛らず、責めず、思ったままに動くことよ」という由梨さんの声が今も聞こえます。型にはまらず、性別にとらわれず、自分らしく、命輝かせてまいりましょう。ご一緒に！

⬅自治体ホームページはこちら

地元に対する熱い思いを大切に、丁寧に形にしていく

03

新潟県中魚沼郡
津南町長

桑原 悠

KUWABARA Haruka

1986年8月4日 新潟県生まれ
2009年3月 早稲田大学社会科学部卒業
2012年3月 東京大学公共政策大学院法政策コース終了
2011年11月～2018年3月 津南町議会議員（２期）
2015年11月～2018年3月 津南町議会副議長
2018年7月～ 津南町長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は、子供のころから都市と農村の地域差に関心があり、どのようにしたら政策や法律で是正できるかをずっと考えてきました。その思いを持ち続け、大学と大学院で学びを深める中、2011年、東日本大震災と長野県北部地震が発生しました。長野県北部地震では地元、津南町が被災し、テレビでその惨状を見て「これは一刻も早く帰って手伝わなくては」と思いUターンすることを決意しました。そして、その年の秋に津南町の町議会議員選挙があり、地元の復興に貢献したいという思いから、出馬を決意しました。その結果、当選することができました。

町議会議員として活動する間、私は結婚し、出産を経験しました。この身のまわりに起きた変化は、政治に対する私の考え方にも影響を与えました。母となったことで、「子供たちが大人になったときに良い形でこの町を受け継いでもらいたい」と強く思うようになり、私の町に対する熱意は次第に高まっていきました。そして、時代に即した改革でより良い津南町を実現するために、町長に挑戦することを決意しました。若くして女性の首長になることは、当時も今も珍しく、家族の反対もありましたが、町への熱意を丁寧に伝えることで家族の理解を得て出馬することができました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

仕事と家庭の両立には、日々奮闘しています。町長になってからは家事・育児に費やせる時間が減り、家族の協力が不可欠となりました。町長就任当時は、2人の子どもはまだ幼く、町長室に子供用のプレイスペースを置いて仕事をすることもありました。今は、夫や私の実家だけでなく舅や姑も含めてみんなで子育てをしています。家族はそれぞれ仕事を持っていますが、日頃から家族内で話し合いを行ったり、アプリでスケジュールを共有したりと、協力してやりくりをしています。このように、それぞれの仕事を尊重し、みんなで協力するということは大事だと考えています。

また、職場の環境を整えることも大事です。多様な人材が行政に携わることはとても大事なことですので、役所内でも性別に関係なく柔軟な働き方を推進し、女性職員が働きやすい環境を整えるための施策を進めています。ジェンダーギャップの解消に向けた取り組みは、都市と地方で差があり、地方での進展はまだまだなところがあるので、しっかりと進めていきたいと考えています。

青山フラワーマーケットが行っている全国各地の旬の花を新幹線で輸送・販売するプロジェクト「旅する花」に津南町特産のユリやシャクヤクが採用され、東京駅の構内での販売が開始されました。これをきっかけとして花の生産は順調に伸びています。このプロジェクトはシリーズ化されて生産者にとって大きな励みにもなっています。

また、冬に降った雪の冷気を利用して食品等を保存する“雪室”を観光資源としてアピールすることを検討中です。雪室は津南町の暮らしの一部でもあり、観光ルートの1つとなるのではないかと考えています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

「旅する花」のプロジェクトのときもそうでしたが、私がトップセールスとして企業さんに営業に行くこともよくあります。このような、リーダーの積極的な活動によって街は変わっていくと思います。

私も若手の女性リーダーのひとりですが、「若手だから」「女性だから」こそ、新しい取り組みにチャレンジしやすいという一面があると思います。ぜひ、あなたの思いを、街を良くする取り組みに昇華させていってください。

⬅自治体ホームページはこちら

親子2代で地域に貢献。〝まさか〟の坂を乗り越える

04

福岡県
宗像市長

伊豆 美沙子

IZU Misako

福岡県宗像市に生まれ育ち、宗像高校を卒業後、京都女子大学国文学科へ進学。 卒業後、会社員を経て、家業の酒造業、米食回帰と地産地消の講演活動やフードコラムニスト、クルーズコーディネーター、ラジオパーソナリティー、福岡大学非常勤講師など幅広く活動。 平成23年から福岡県議会議員を2期務め、平成30年5月に宗像市長就任。福岡県内初の女性市長となる。現在、2期目。

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私の実家は、創業300年を迎える造酒屋です。曽祖父は村長、父は福岡県県議会議員を7期・28年務めました。こう綴ると、政治家の家系のようですが、そうではありません。

曽祖父が家業が傾くほど政治に熱を入れ、それ以後、伊豆家の家訓に「政治家だけには、なるな」が追加されていました。その家訓に背いたのが父、伊豆善也。郷土の偉人である、出光佐三翁に「宗像の教育の充実とまちの発展のために」と強く推され、決断したと聞いています。

続いて、私。父が県議会議員を終えた12年後。当時私は、家業の造酒屋の営業をしながら、ラジオ番組に出たり、日本酒の講演活動をしたり、と自由気ままに暮らしていました。県議会議員推薦候補締め切り当日、地域の重鎮から「県議選、どうするとね。今日が締め切りバイ。今日、返事して」という厳しい声の電話。傍にいた弟から、毎日のように、多くの人が自宅に来ていたことを知らされ「社会や地域の人のために働くのは良いことだと思う。姉さん、チャレンジしたら」と背中を押され決断。父母に相談する間もなく「立候補します」と返事。私の事後報告を聞き、父は呆れていました。なにしろ親子2代で家訓に背くのですから…。

県議会議員を2期務め、宗像市長選挙に立候補。この時も、立候補締め切り間際、さらに家族の反対を押し切っての決断。父が出光佐三翁から託された「宗像の教育の充実とまちの発展」にもっと深く関わりたいとチャレンジしました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

首長に就任し、女性だからと苦労したことはありません。分からないことは、分からないと正直に伝え、担当職員の説明に耳を傾け、進むべき道を決めています。県議会議員と市長では、地方自治という活動する舞台は同じでも、政務内容や責任は全く異なります。首長は、時によっては即断、即決。スピードが求められます。

私が市長に就任し、初登庁から間もない平成30年7月6日、西日本豪雨が宗像市を襲いました。「ため池が決壊の恐れがある」との一報を受け、市として初めて避難指示（緊急）を発令。近隣住民に呼びかけ、避難していただきました。幸い被害は発生せず、皆さん無事に帰宅。市民の命と財産を守ることが最優先事項であると、強く心に刻んだ出来事でした。

市では「市民が主役のまちづくり」を掲げ、地域住民の自治によるコミュニティ施策と「市民参画」「協働」を基本理念にまちづくりを進めていますが、災害の危機を乗り越えられたのも、市民の皆さんの協力と連携があったからこそです。

災害後、直ちに市内全域のため池の点検と改良工事の見直しに着手。「ため池ハザードマップ」を作成し全戸に配布しました。この経験を機に情報の伝達の拡張や平時と緊急時双方で活躍するハイブリッド型の施設づくり、地域ごとの防災計画の作成などを進め、災害に強いまちづくりを加速。安全・安心なまちを目指し、誰一人取り残さない防災対策を市民協働で進めています。

Evidence 取り組み実績

親子2代で出光佐三翁から託された「宗像の教育の充実とまちの発展」に一貫して取り組んでいます。義務教育課程では、同じ中学校区にある小中学校を1つの学園とし、小中一貫で9年間の「縦のつながり」を、コミュニティ・スクールで地域や家庭との「横の連携」を強化。双方を一体的に推進し、教育施策や教育活動をより効果的に進めています。また、子どもの興味を深掘りし「志」へとつなげる「むなかた子ども大学」を開校。市内外の企業や大学、団体などの協力を得て、職場体験や講座を通し、興味関心から「志」へと変容させていくことを目指す取り組みです。社会や職業についての理解を深め、子どもたち自身が将来像を具体化するきっかけとなる教育施策として注目されています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

「人生には三つの坂あり、上り坂と下り坂、そして〝まさか〟の坂」。戦国の武将が残した言葉ですが、私の人生は〝まさか〟の連続。私は、リーダー（首長）を目標に日々、修練を積み重ねてきたわけではありません。弟の言葉で県議選出馬の覚悟を決め、父が出光佐三翁から託されたビジョンを現場で具体的に進めたいと市長選にチャレンジ。いずれも、〝まさか〟の坂に遭遇し、仲間を信じ、郷土を愛し、登った坂です。私の〝まさか〟の坂は1人では登れない坂。仲間の後押しがあって登る坂。未だ〝まさか〟の坂の途中です。

〝まさか〟の坂は自分を試す絶好の機会。自分と仲間を信じアタックして欲しいです。

⬅自治体ホームページはこちら

05

東京都
江東区長

大久保 朋果

OKUBO Tomoka

より多くの女性が意思決定に携わり区民の笑顔が溢れる江東区に！

1971年8月12日生まれ
1994年3月 早稲田大学卒業
1995年4月 東京都入都
2023年12月 江東区長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

女性政治家の秘書として、婦人参政権運動に心血を注いだ祖母。共働きで仕事と家事、育児を両立し、公立幼稚園の教諭から園長まで務め上げた母。二人を間近で見てきた私にとって、「女性が自分の希望や意欲に応じて活躍できる」という環境は、身近なものとして存在していました。一方、実際に自分が社会に出てみると、女性が働くことが社会的には当たり前ではないと感じることも多々あり、女性がチャレンジしていくことに貢献したいという気持ちを強く持っていました。

そして、都庁職員として約30年間にわたり、政策部門・福祉保健部門で都民一人ひとりのために働いてきた経験、また一人の働く女性としての子育てと介護の経験から、娘たち次世代に残したい未来のまちをつくるため、身近な自治体でまちづくりをしたいと考えるようになりました。

そんな中で、東部療育センターや豊洲市場、東京2020大会など、都庁人生においてこれまでも身近な存在であった江東区において、区長選挙の話がありました。区長不在の中、区政が停滞して区民一人ひとりが困っているのではないか…誰かが前に進めなければ、誰かが立ち上がらなければと考えた時に、自分の行政経験がすぐに活かせるのではないかとの思いから、江東区長を目指すことといたしました。

これまでの自分の人生と未来への思い、運命的なタイミング、そして背中を押し、応援してくださった方々、全てが重なり、今につながったものと思っています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

江東区長となって1年余、自分自身は「女性だから」という理由での苦労は感じたことはありません。ただ、区役所全体を見れば、これまで区の意思決定や施策を検討する段階で、必ずしも女性の視点が十分ではなかった点もあると思います。これは一つには、女性管理職比率が低く、意思決定の段階で女性の意見が反映されにくかったことが考えられます。

首長は、リーダーシップをとって、自治体運営に責任を持つことになりますが、その礎には住民の意見を丁寧に拾い上げ、政策に反映していくことが求められます。私も、区長として区民の声を直接伺い、区政運営の参考とするため、「江東未来ミーティング」を開催し、区民の皆さんの思いや抱える問題、要望についてフェイスtoフェイスで語り合っています。多様な意見を施策に反映することが、区の発展や区民の満足度向上につながります。区民の笑顔が増えること、溢れることは行政の大きな喜びです。

江東区において、もっと女性が政策の意思決定に携わることで、これまでとは異なる新たな視点により、施策や組織を活性化させていくことができると考えています。多様な価値観を尊重し、色々な立場・意見を持つ者同士が認め合い、連携することが、より魅力的なまちの発展につながっていきます。私は、区民の笑顔が輝く江東区の実現に向け、職員と力を合わせ、区民一人ひとりに寄り添った区政運営に努めていきたいと考えています。

Evidence 取り組み実績

女性活躍の取り組みとして、「プロジェクト・スマイル」を実施しています。これは、「女性活躍を進め、江東区の行政をより良いものにしたい」という私の強い想いから立ち上げたプロジェクトで、女性副区長をリーダーとして、入庁1～7年目までの女性職員16名で構成しています。このプロジェクトは、女性視点を通して、区の事業を点検し、行政サービスが使いやすくなることを目指しています。これまでミーティングを重ね、女性活躍の現状について認識を深めるとともに、政策立案の手法について学び、「施設整備」や「防災」などのテーマに沿って、事業の調査・分析を進めました。これにより女性ならではの視点での政策立案がなされ、事業の具体化や予算化を図っています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

日本の合計特殊出生率は1.2と最低水準に、東京では0.99と、ついに1を下回りました。深刻な少子高齢化への対応は、喫緊の課題であり、一人ひとりが我がこととして真剣に考える必要があります。

そうした時代を生き、未来を切り拓くためには、女性の視点を取り入れた取り組みが不可欠であり、様々な分野や場面で、女性のより一層の活躍が求められます。

次代を担う若い皆さんには、既存の枠組から飛び出す勇気とチャレンジ精神が内包されています。未知へのチャレンジには、不安や心配もあるかもしれませんが、皆が輝く明日に向け、未来志向とたくましさ、しなやかさで一緒に頑張りましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

性別に縛られず〝私らしく〟地域のために〝伸び伸び〟と働く

06

福井県
大野市長

石山 志保

ISHIYAMA Shiho

1974年6月29日 愛知県安城市生まれ
1997年 東京大学工学部卒業
1997年4月 環境庁入庁
2005年3月 環境省退職
2005年4月 大野市役所入庁
2018年2月 大野市役所退職
2018年7月7日 大野市長（第17代）に就任
2022年7月7日 大野市長（第18代）に就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私がまだ学生だったころ、自然豊かな地域に足を運び、地域の人々と触れ合う機会があり、その経験が自然環境行政を志すきっかけとなりました。卒業後は、国家公務員になって、人と自然に関わる地域づくりに携わることができました。

結婚を機に夫の故郷である大野市のことを知った時、山と自然がいっぱいと聞き喜んで移住を即決しました。実際に訪れた大野市には、山の緑がきらきらと輝き、ほっとさせてくれる盆地があり、人々が丁寧に生活するまちがあり、すぐに気に入りました。

移住後は、試験を受けて大野市職員になり、一職員として地域づくりに取り組みました。人口減少が進む社会にあって、世代、分野、地域を横断して大野市が抱える課題が新たに見えてきました。市民の皆様が大好きな大野を、もっとたくさんの人々に好きになってもらいたい、時代の変化に対応して、大野市を担う人々に引き継ぎたいと思いました。

大野市役所では主に企画部門、財政部門に携わりながら市勢の発展を身近に感じて過ごしておりました。そんな折、中部縦貫自動車道の延伸を牽引されてきた前大野市長が勇退を発表されました。中部縦貫自動車道が延伸する流れを止めるわけにはいかない、延伸によるチャンスを活かしていかなければいけない、これからの大野市の発展を考える時、私のような働く世代が頑張っていかなければいけないという思いから、市役所を退職し、政治家の道を歩み始めました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

初めての選挙の際、私の政策をお伝えするために市民との対話を重ねていく中で、「市長職は激務であり女性には務まらない」「女性なのにどうして出馬するのか」「家庭はどうするのか」という声をいただくことがありました。首長には屈強な男性が就くのが当たり前で、家事や育児に忙しく体の小さい女性が就くことに、不安を感じられた部分があったのだと思います。市長に就任してからこれまで、自身の健康管理に気を付け、家族や地域、周囲の方々に支えていただきながら、職務を全うできるよう努力をしています。二期目の選挙の際には同様の不安に思う声をいただかなかったことを有難く思います。

市長就任時には、北陸３県で初めての女性首長が誕生したということで、各方面から取材を受ける機会を多くいただきました。取材テーマをお伺いしてみると、女性としてのコメントを期待されていたように感じましたが、私は市民と約束したまちづくりをしっかりと進めていきたいということや大野市の特徴や魅力をお話しさせていただいてきました。

これまでも、これからも、男性だから、女性だからではなく、私らしく市政運営に携わっていくことを心がけていきます。

Evidence 取り組み実績

高速交通網が延伸（中部縦貫自動車道大野IC・九頭竜IC間が令和5年開通）を契機に地域経済の活性化に注力。令和3年に道の駅越前おおの荒島の郷を開駅し、年間平均約65万人が利用。令和5年には、南六呂師エリアにおいて、アーバンナイトスカイプレイス部門でアジア初の認定となる星空保護区認定を取得しました。ライフステージに応じ切れ目なく子育てを応援する「大野ですくすく子育て応援パッケージ」を令和2年度から推進中、令和7年に屋内型こどもの遊び場「おおの天空パークOSORA」をオープン。書かない窓口の導入や市公式LINEで市政情報を市民へ届けるなど、行政のデジタル化を推進。市役所の女性管理職比率は2割超を達成。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

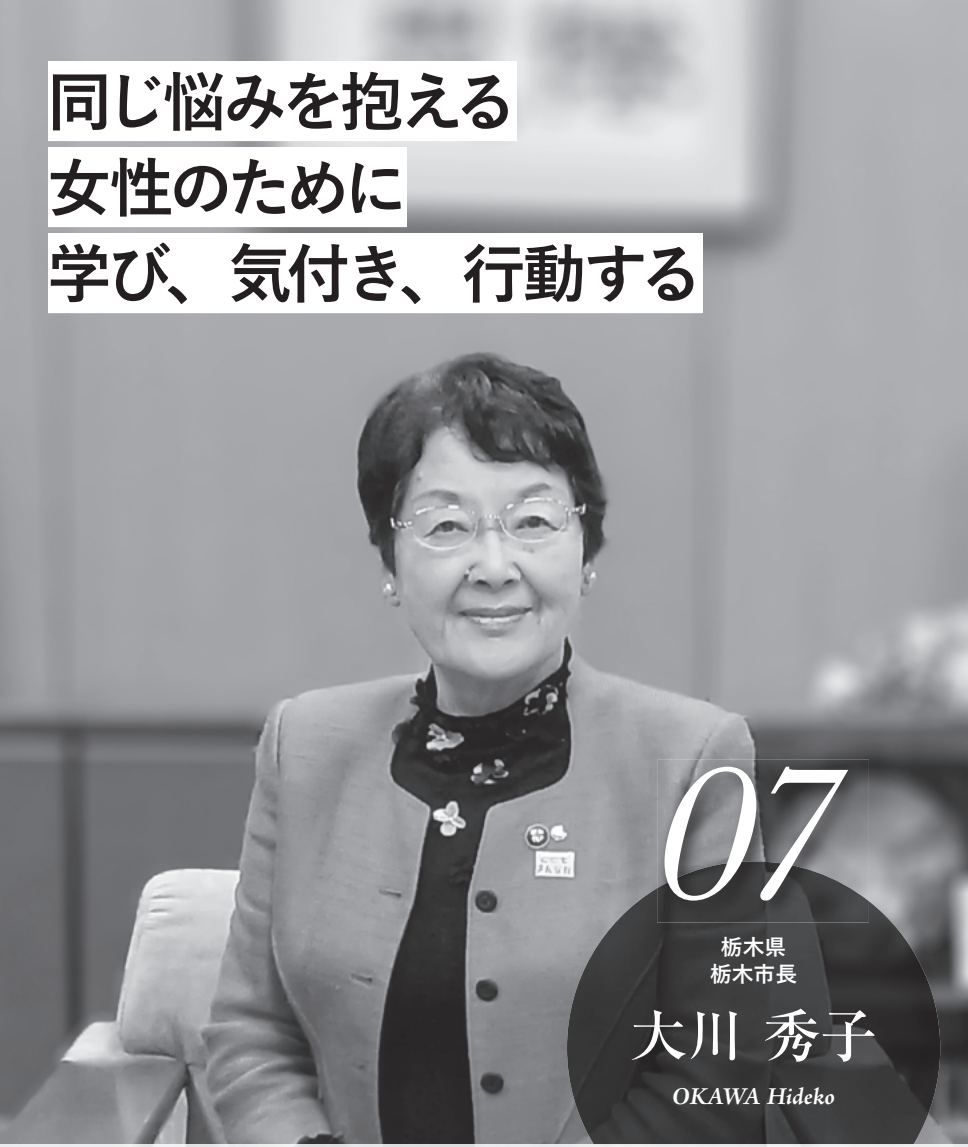
私は〝私らしい〟市政運営を心がけているものの、それが何であるか悩むこともあります。しなやかで力強く、きめ細かで優しいリーダーシップを目指して、奮闘する毎日を送っています。

日本全体で人口が減少し、担い手が不足して、女性活躍が言われるようになりました。インターネットが普及して、今の世代は若い頃から世界の情報とつながれるようになりました。地方部においてこそ、社会変化は顕著に表れ、対応の必要に迫られています。ジェンダーギャップが緩和され、国際化や多様化が一層進んでいく社会の中で、次世代のリーダーの方々はご活躍されることと思います。

どうぞ〝自分らしく〟〝伸び伸び〟とご活躍されますように！

⬅自治体ホームページはこちら

同じ悩みを抱える女性のために学び、気付き、行動する



07

栃木県
栃木市長

大川 秀子

OKAWA Hideko

1947年11月9日 栃木県栃木市生まれ
1966年 栃木県立栃木女子高等学校卒業
1999年 栃木市議会議員
1999年 栃木市農業委員
2000年～2001年 栃木県農村女性ビジョン策定委員
2007年～2009年 栃木市監査委員
2010年～2012年 栃木市議会議長
2018年4月 栃木市長　当選

Turning Point 首長を目指したきっかけ

「子を持つ母親が安心して働ける社会になって欲しい」。今振り返ると、これが私の政治を志した原点であったように思います。夫と家業の施設園芸を営む中、母を若くして亡くした私にとって、長女（1歳）と次女（0歳）の育児は容易でなく、思い悩む日々を過ごしました。保育園は当時、2歳児以上が入園の要件でしたが、間もなく2歳を迎えるという理由で、長女を受け入れて頂くことができ、救われる思いであったのを今でも鮮明に覚えています。

こうした経験を契機として、「同じ悩みを抱える女性の力になりたい」との思いが芽生えました。自分自身が我が事として悩みと対峙し、それが解消された時の幸せを実感したからこそ、その強い気持ちが生まれたものと思います。

その後、栃木市女性プランや栃木県女性農業ビジョンなど、自治体の計画策定委員の活動を通じて、女性の社会進出を取り巻く課題に取り組みながら、平成7年に中国北京で開催の第4回世界女性会議では、家庭内暴力（DV）や識字率など、当時の日本では想像も及ばない世界的な女性問題を学びました。当時は、学びの機会を見出しては、貪欲に参加していたことを思い出します。

こうした活動の中で偶然に出会い、ともに学んだ仲間達が、その学びの成果を行動へ移す代表者として、私を市議会議員、そして首長へとサポートしてくれました。この素晴らしい仲間達と出会えたからこそ、今の私があるものと思います。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

平成11年に市議会議員、平成30年に市長に初当選しましたが、その後の政治生活を振り返っても、私が女性であることによって、特別に苦労した記憶はないように思います。先輩や同僚の男性議員も女性活躍に理解のある方が多く、また、市長初当選の際には既に県内に2名の女性首長がおりましたので、物珍しい出来事ではなかったものと思います。周辺環境や時代思潮に恵まれていたのかもしれません。

一方、私の市長としての船出は、万事順調ではありませんでした。令和元年10月12日、東日本台風災害によって、市内を流れる巴波(うずま)川や永野川が決壊・溢水し、市内全世帯の13%に当たる約8千戸の住宅が床上・床下浸水の被害を被りました。自衛隊や周辺自治体、民間ボランティアの方々等の支援を得ながら、復旧・復興活動を推し進める中、翌年1月末には新型コロナウイルス感染症が全国的に蔓延し、社会経済活動が大きな制約を受けました。

明日の見えない今日を過ごす日々が続きましたが、こうした状況だからこそ再認識できた栃木市の強みがあります。それは、卓越した「市民力」です。自らも被災者でありながら、身の回りの方々や地域を思いやり、手を差し伸べる市民の雄姿を頼もしく感じました。「地域課題を他人任せにせず、できることは自分でやろう」とする姿を様々な場所で見ることができました。こうした魅力的な市民と一緒であれば、どんなに苦しい課題も乗り越えられると確信した出来事でした。

Evidence 取り組み実績

○子ども未来基金の創設…ふるさと納税や寄附金の受入先として創設し、子育て支援事業の財源を確保。
○子どもの居場所事業…多様かつ複合的な課題を抱える子ども達が生活習慣等を身に付ける施設を市内2ヶ所に設置。
○産前産後ヘルパー派遣事業…家事代行や育児支援のヘルパーを派遣し、妊産婦の日常生活を応援する市独自の事業であり、高い評価を得ている。
○こども誰でも通園制度（仮称）…試行的実施はもとより、こども家庭庁の「本格実施に向けた検討委員会」の委員として、私自身も制度設計に携わる。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

「学び、気付き、行動すること」私はこれを人生観としています。

日常生活の疑問や社会変化等から生まれる探求心を「学び」の意識へと繋ぎ、その学びから原因追及や課題解決の糸口に「気付く」こと。そして、その気付きをもとに、目標や理想の実現に向け熱意を持って「行動」し、その行動の過程や結果を「次の学び」の原動力に結び付けること。この好循環こそが人や社会を成長させ、人生を豊かにする方法であると信じています。

次世代の女性リーダーは是非、現場を良く知り、課題や悩みを仲間達と共有してください。何事も「我が事」と捉え考えることが、課題解決へのエネルギーを生み、好循環のスタートになると思います。

⬅自治体ホームページはこちら

豪雨災害の経験を踏まえ 防災意識の向上に取り組む

08

岡山県
倉敷市長

伊東 香織

ITO Kaori

平成2年3月 東京大学法学部卒業
平成2年4月 郵政省入省
平成5年6月 米国ハーバード大学ロースクール
(法律大学院)修士課程修了
平成7年6月 栃木県日光郵便局長
平成13年7月 総務省インターネット戦略企画室長補佐
平成15年4月 倉敷市総務局長
平成16年7月 倉敷市収入役
平成19年8月 総務省国際部多国間経済室長
平成20年5月 倉敷市長就任（現在5期目）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

学生時代に所属していた法律相談サークルで、住民の皆様からの様々なお話を伺うなかで、卒業後は人の役に立つ仕事に就きたいと考えるようになり、郵政省（現在は総務省）に入省しました。

その後、留学の機会もいただき、世界各国の留学生との交流を通じて、多様な歴史・文化・考え方などについての理解を深めることができました。また、郵便局長として務めたときには、当時、全国で初めて郵便局のホームページに観光情報を掲載して地域の魅力発信に取り組みました。総理府国際平和協力本部の業務を担当したときには、国際的な選挙監視活動等に従事し、国際的支援の大切さや、緊急事態への対処法などを実際の現場で学ぶ機会もいただきました。

そして、これらすべての経験は、現在の職務において、様々な立場や意見を尊重して相互理解を築いたり、災害に備えて危機管理に携わるうえでの礎となっています。

大きな転機は、平成15年に総務省から倉敷市に総務局長として出向したことでした。市民の皆様との交流や地域課題の解決に取り組むなかで、「今後の倉敷市の発展に貢献したい」という思いが育まれ、市民の皆様からの温かいご支援をいただいて平成20年に倉敷市長に就任し、現在5期目を迎えています。倉敷市が明るく希望に満ちたまちになっていくように市民の皆様と共に取り組んでまいります。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

平成20年に、全国最年少の女性市長として、そして、中四国地方では初めての女性市長として倉敷市長に就任しました。当時、女性首長は全国的にも少なく、二十数名だったと思います。

就任以来、倉敷市の発展のために邁進してきましたが、そのようななかで起きたのが平成30年7月の西日本豪雨災害でした。7月5日から降り続いた雨は、倉敷市に大きな被害をもたらし、特に真備地区は広範囲に浸水し、甚大な被害となりました。亡くなられた方々、ご遺族の方々、そして被災された全ての方々のことを思い、言葉にできないほどの悲しみと苦しみのなか、市長としての責務を果たすため、職員と力を合わせて災害への対応に全力を尽くし、被災者の方々に寄り添いながら、共に復興に向けて一歩ずつ歩んできました。被災直後の救助活動から復旧、そして復興段階へと進んでいくなかで、市長として、目の前で起こっている様々な事象への対応と、中長期的な住民生活とまちの復興の姿を見据えた対策を考えながら取り組んできました。多くの方々にご支援いただき、この困難を乗り越えてきたと思っています。

災害発生から6年が経過し、被災された方々の多くは元の生活を取り戻されつつありますが、市長として市民の生命と安全を守るため、今後も、災害の教訓を生かして、真備地区をはじめ倉敷市全体の防災力向上に取り組んでまいります。

Evidence 取り組み実績

豪雨災害の経験から、「災害に備えるまちづくり」を重点的に推進し、耐震性貯水槽や防災備蓄倉庫の整備など災害への備えを強化してきました。さらに、学校や企業など市民が一斉に参加する防災訓練の実施や避難行動要支援者の個別避難計画の作成を支援するなど、自助・共助・公助の考え方を持って取り組んでもらえるように努めています。また、就任以来、子育て支援に力を入れており、「子育てするなら倉敷でと言われるまちづくり」を進め、結婚から妊娠・出産、子育てまで切れ目ない支援に取り組むとともに、「温(ぬく)もりあふれる健康長寿のまちづくり」「世界に誇れる文化・産業のまちづくり」「みらいを見据えたまちづくり」の5つの持続可能なまちづくりを掲げて取り組んでいます。もちろん、女性が働きやすい環境整備も進めており、女性が活躍できる社会を目指しています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

女性の活躍の場は広がり、リーダーシップを発揮できる機会が増えています。若い女性の皆様、ぜひチャレンジ精神を持って、自分の夢を追求していただきたいと思います。

そのために、社会参加を通じて地域の人々をはじめ、幅広く交流することで視野が広がると思います。多様な文化や価値観と触れ合い、社会のために何ができるかを考えていく、そうした積み重ねが、より良い社会の実現に繋がっていくと考えます。

一人ひとりが輝くみらいのリーダーとして、ご活躍を願っています。

⬅自治体ホームページはこちら

自分らしさを発揮し、一歩を踏み出すチャレンジを！

09

千葉県
香取郡多古町長

平山 富子

HIRAYAMA Tomiko

1959年2月17日 千葉県多古町生まれ
1979年3月 青山学院女子短期大学国文学科　卒業
1979年4月 香取管内中学校勤務
2006年4月 銚子市立第八中学校　教頭
2013年4月 匝瑳市立豊和小学校　校長
2015年4月 多古第二小・多古第一小学校　校長
2019年3月 退職
2019年4月 千葉県教育委員会派遣職員、多古町教育委員会職員
2022年2月 多古町長　就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

教職の道から政治家への道へ。自分自身でも予想していなかった転身です。

3つの学校で校長を経験しましたが、常に「経営」ということを念頭に置いてきました。「人・もの・予算・情報」を最大限生かすことはもちろん、地域の方々や行政と連携して「子供たちが輝き、成長するために学校はどんな教育をしていくのか、それにより地域をどう元気にしていくのか」という視点で学校経営を進めてきました。また、「生まれ育った町を更によくしたい」という思いから、校長時代もボランティアとして移住コーディネーターや女性活躍を進める団体に参画し、地方創生や女性活躍推進に取り組んできました。

成田空港の東側に位置する多古町は、空港の機能強化（令和10年3本目の滑走路が供用開始予定）により町の一部が空港用地となり大きな変革の時を迎えています。そのような中、前町長が公職選挙法違反により辞職しました。町民から町政刷新の声が上がり、「リーダーシップを発揮し、町政を任せられるのはあなたしかいない」と強く出馬を打診されましたが、親族会議では誰もが大反対。私自身も本当に悩みましたが、「町をよくしていくのは私しかいない」と最後は自分一人で決断しました。町にとって、発展のための基盤づくりという大事な節目でもあり絶好のチャンスともいえるこの時に、町長になったことの重責を感じつつ日々職務に邁進しています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

今千葉県には私を含めて5人の女性首長がいますが、これまで、町村で女性首長が誕生したことはなく「千葉県町村会創立100年にしてはじめての女性首長」と言われています。しかし、教頭・校長時代も周りには女性がいない、あるいは少ないという経験はしてきましたので、今の状況を特別とは感じてはいません。

苦労とはいえませんが、「行政や政治（議員）の経験がなく首長」になったため、役場組織をどう動かしていくかということが重要でした。恵まれていたのは、校長としてこれまでも経営に取り組んできたことと、課長・係長という幹部・中堅職員に教え子が多く、意思疎通が図りやすかったことです。

また、町づくりは大きな財源や国・県の許認可が必要となることも多く、町単独で完結できるものではありません。国や県・近隣自治体との連携は丁寧に行うことを意識しています。特に多古町の7割は山林や農地で、町づくりを考える上では農地の転用が大きなハードルとなっています。成田空港隣接地の農地に民間事業者が国際航空物流施設の整備を表明することができたのも、千葉県が国に対して要望し、地域未来投資促進法の適用に関して農林水産省が支援措置の通知を出していただいたのが大変大きかったです。

Evidence 取り組み実績

○教育・子育て支援施策に力を入れています。

・官民連携による子育て支援住宅の整備（R6年度・日本子育て支援大賞受賞）

・町独自の保育士等修学貸付制度を開始（R7年度より）

・小中学校すべての普通教室・特別教室に電子黒板を整備

○成田空港との共生・共栄による町づくりを進めています。

・成田空港隣接地に国際航空物流施設の事業者の誘致

○安全・安心で住みよい町づくりを進めています。

・避難所となる町民体育館・小中学校体育館に空調整備

・DXの推進（多古町ライン支所等）

・盛り土規制条例の改正及び違法事業者の逮捕

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

「自分らしく自分の良さを発揮し、一歩を踏み出す」チャレンジをしてみてください。その「経験」は、「自信」という大きな力になります。また、人とのネットワークは自分を支えてくれ、「経験値」も上がります。今自分がいる場所（会社・学校や組織など）だけでなく、興味や関心があることで社外や学校外にネットワークを広げることが大切です。その中で、あなたを支えてくれ信頼できる人が現れます。私もあなたを支える一人です。

⬅自治体ホームページはこちら

弁（わきま）えるより行動を！
次世代に理想の社会を繋いでいこう

10

青森県
東津軽郡外ヶ浜町長

山﨑 ゆいこ

YAMAZAKI Yuiko

1981年6月21日 東京都生まれ
2004年3月 成城大学文芸学部卒業
2004年4月（株）フロンティアワークス入社
2006年4月 環境省自然環境局採用(非常勤)
2008年4月 〃
2011年10月（株）オカムラ食品工業入社（2017年2月 退社）
2017年3月 外ヶ浜町長当選（2017年4月24日 就任）
2021年4月 外ヶ浜町長当選（2期目）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

うちは曾祖父・祖父・父と青森県選出の国会議員で、母も政治家の家系なので、漠然と将来は兄（長男）が政治家を継ぐのかなと思っていました。そもそも東京生まれの東京育ちの私が青森県で首長になるなど、考えたこともありませんでした。

今思えばターニングポイントは20歳の時、父の参院選を手伝ったことです。これ以降、父の選挙のたびに青森に呼ばれ、代理の挨拶を任されるようになりました。結果的に29歳の選挙の後からは東京に戻らず、平日は青森の会社で働きながら、父の仕事を手伝うようになりました。

父の代理の用務が増えると要望を聞く回数も増え、「その旨父に伝えます」と言いながら、漠然と何が問題なのか、解決策について考えるようになっていました。その流れで青年会議所にも入って青森に慣れだした頃、父が4期目を前に落選し、政治家を引退したのでした。

お礼とお詫びの挨拶に行って「問題がまた先送りになる」と言われたのが外ヶ浜でした。何とかならないかと心苦しく思っていた時に「外ヶ浜町長選に出ないか」とある町民の方に言われました。住んだことも働いたこともなく、親戚もいない場所なので、かなり迷いましたが、様々な事情等を聞くうちに、自分がここで立つことが使命なのかもと腹をくくり、挑戦することにしました。

私が勝てた要因は、政治家の家系（4代目）で知名度の影響もありますが、現職の町長とすべて反対の属性を持っていたことが強みであったと認識しています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

選挙で「女性だから」苦労したことはあまりありませんが、就任後は、ベテランの現職に対抗して突如出馬した新人だったため、野党議員が与党議員の4倍も多い、議会の運営には苦労しました。例えば「よそ者には、地域の実情が理解出来ない」「小娘のくせに」「国会議員になるまでの腰掛けのつもりだろう」などと言われました。私が未婚で出産・子育てをしていないことを指摘されたこともありましたが、その高齢男性議員も配偶者に任せきりで経験値は私と大して変わらないと思ったので、気になりませんでした。一方でそういった女性蔑視の発言にめげて戦うことを止めてしまうと、「これだから女は」と言われ、次の世代にとって悪い見本になってしまうと思っていました。ここで耐えれば結果的に残るのは若い私の方だ、と気持ちでは負けないようにしていました。

また、この時代に懇親会の場で絶対手酌をしない人やコンパニオンがいることに驚きました。就任当時チークダンスに誘われ、「私は何でも動画に撮る」と強く宣言したためか、最近ではこういう言動は見なくなりました。価値観がアップデートされたのかもしれません。

その他、「今日のイベントでの挨拶で僕のことを見てたよね」や「結婚を前提に付き合おう」のようなDMが来たり、知り合いなどと勝手に男女の噂を捏造されたことがあります。地域、性別、年代による苦労の1つかもしれません。

Evidence 取り組み実績

外ヶ浜町では子育て支援策に力を入れており、以前から窓口負担が不要であった高校生までの医療費や出産祝金に加え、最近では、給食費無償化、保育料無償化、副食費の完全無償化、小中学校入学時の体操服・卒業アルバム支給、小学校の英語キャンプ・中学校の海外研修の全額負担、高校生通学定期1/3補助、新生活の準備のための卒業祝金等を実施しています。

また、妊娠期から出産後まで検診時の交通費補助や、新生児検診の負担、不妊治療の助成、チャイルドシート代補助、絵本プレゼント等のほか、出産後のお母さんに授乳ブラとチュニックかショーツを選べるカタログをプレゼントしており、好評です。

お子さんがいる家庭に限れば意外と子沢山が多い印象です。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

特に女性は、子どもの頃から弁(わきま)えることを善として教育され、それも素晴らしい美点ではありますが、これからの時代は、弁えるよりも行動する方が価値が高いと考え方を変える必要があります。誰かが変えてくれるとか、誰かが実現してくれたら良いのにとか、考えるだけでは何も変わりません。「自分がその誰かになる」か、「自分の代わりに行動してくれる人をつくる」しか改善方法はないのです。

私たちが今働けているのは、男女差別の厳しい時代に歯を食いしばって働いた先輩女性がいたから。では今自分に何ができるのか、考えたならとにかく動くことが大事です。次の世代で理想に近づけるかどうかは今の我々の行動によるのです。

⬅自治体ホームページはこちら

政治の力で市民の命と生活を守る！

11

千葉県
柏市長

太田 和美

OTA Kazumi

1979年8月28日 千葉県柏市生まれ
2005年3月 千葉県議会議員　1期目
2006年4月 衆議院議員　1期目
2009年8月 衆議院議員　2期目
2014年12月 衆議院議員　3期目
2021年11月 柏市長　就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

『コロナ禍で守れなかった小さな命』

私が柏市長選挙に立候補したのは2021年。コロナ禍真っ只中でした。

その思いに至ったきっかけは、同年8月に柏市で起こった悲劇にあります。新型コロナウイルスに罹患した妊婦さんが柏市の自宅で早産となり、小さな命が失われました。

女性は自宅で出産後、自ら救急要請を行い、赤ちゃんは病院に搬送されましたが、そのまま亡くなりました。自ら産んだ子をタオルに包み、たった一人、救急車を待つ間どんな思いだったか…。その気持ちは計り知れません。

早めの入院が必要だったのに、新型コロナウイルスに罹患していたために3日かけても受け入れ先の病院が見つからなかった末の悲劇でした。

政治はいったい何をやっているのかと強い義憤に駆られました。同時に「いったい私は何をしているんだろう」と、政治家としてのもどかしさを強く感じ、今の私に何ができるのかを改めて考えてみた時、この柏の行政を変えるチャンスがあるのであれば、私の全てをこのまちに捧げたいと思ったのです。

私は、政治の力で守れる命、守れる生活があると信じています。

これまでの県政・国政での経験を活かし、今こそ政治家として、自分の生まれ育ったこのまちで、私の「ふるさと」に恩返しがしたいと、柏市長選挙に立候補しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

『柏市初の女性市長として』

私は柏市初の女性市長となりました。就任当初は、リーダーシップを発揮する過程で直面した「性別に基づく偏見」や「伝統的な価値観」を打破することなど、組織運営における苦労が伴いました。

私が市長に就任し、特に幹部職員はかなり戸惑っていたように思います。長年にわたる男性中心の政治文化が根強く、「女性に市長は難しいのでは？」という声は少なからずあったのではないでしょうか。

それでも、私はそんな偏見には屈せず、自身の信念と能力で職員との信頼を築いてまいりました。

柏を良くしていきたいという思いは職員も同じであり、そのための政策を実行していくには、納得するまで対話や議論を重ね、結論までのプロセスを重視しながら課題解決に取り組んでいかなければなりません。

私の任期はコロナ禍でのスタートとなりましたが、「コロナ禍」という誰もが経験したことのない状況の中で、希望者への第3回目の速やかなワクチン接種の実現や医療・療養体制の構築など、毎日毎日、職員との対話や議論を重ねました。そうした日々の議論を通じ、私も市政への理解を深めることができ、そして何よりも、私の目指すビジョンを職員としっかりと共有できたことで、一体感や信頼感が醸成され、円滑な政策遂行の基盤を築く大きな力になったと思います。

Evidence 取り組み実績

『子育てしやすいまちを目指して』

ライフスタイルが多様化する中、子育てと仕事が両立できる環境や子どもの居場所づくりが大切であると考えています。

そのために、まずは多様で柔軟な発想を市政における意思決定に反映させたいと考え、市長就任当初に女性管理職を多く登用しました。

また、柏駅前には、乳幼児から中高生まで全ての世代の子どもたちが成長にあわせて利用できる、子ども・子育て支援複合施設「TeToTe」を開設しました。ぜひ多くの方にご利用いただき、子ども・子育て支援のシンボルとして、皆さんから愛される施設となれるよう運営してまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

『新たなチャレンジを応援しています』

不確実性が高まる社会経済情勢やデジタル技術が急速に進展する今の時代こそ、新しい挑戦ができる機会と捉えています。

女性の強みでもある〝きめ細かな気配りと共感力〟を活かし、誰に対しても寄り添う姿勢を常に意識することで、仲間との信頼を築き、共に成長できるのではないかと思います。

そして、これらの信頼を基にした〝対話〟や〝議論〟を通じて、新たなアイデアや課題解決策が絶え間なく生み出されるものと確信しています。

より高みを目指そうと情熱を抱く皆さんの挑戦を心より応援しています。

←自治体ホームページはこちら

地方自治の現場から民主主義を取り戻し成熟された市民社会を確立する

12

東京都
杉並区長

岸本 聡子

KISHIMOTO Satoko

1974年7月15日 東京都大田区生まれ
日本大学文理学部卒業
1993年 大学入学後、国際青年環境NGO A SEED JAPAN（アシード ジャパン）に参加
1997年 大学卒業後、同法人有給専従スタッフ
2001年 オランダに移住
2003年 国際政策シンクタンクNGOトランスナショナル研究所研究員
2008年 ベルギーに移住
2022年 4月 帰国、7月から杉並区長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

杉並区長を目指すことを決めたのは、市民の皆さんの声がきっかけです。私は2022年に日本に帰国するまでベルギーに住み、公共政策に関する調査や社会運動の支援などを行っていました。一方で日本の公共政策や地方自治にも関心があり、その中で杉並区の市民団体とのつながりを持っていました。最初は区長を目指すつもりは全くありませんでしたが、市民団体から「区長になってほしい」との要請を受け、私がこれまで持っていた問題意識や政策研究を行ってきた経験を活かすことで、新しい地域の未来像に貢献できるのではないかと思い至り、出馬を決意しました。

私が考える一番の地域課題は、行政と区民との距離が遠いことにあります。行政の先に政治がありますが、その政治に期待を持つことができない現状、どうせ自分たちは政治の中で力を持てないという無力感から興味が失われているのだと思います。また、区民が生活する中で課題に直面した時、当たり前に起こるべき議論を話し合う場所がないことも課題です。生活者にとって一番身近な存在であるはずなのにです。こうした状況を打破するためにも、地方自治の現場から民主主義を取り戻すことが私の目標です。

政治家や公務員に任せるのではなく、自分たちの税金を使ってどのように社会を創っていくかを考えることが重要だと信じています。地方自治の現場から行政と区民の信頼関係やコミュニケーションを確立していきたいと思っています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

当選結果は187票という僅差でした。今でも街中で多くの区民から「自分が一票を投じたことで『何かが変わる』という経験は初めてだった」「立候補者が自分と近い存在だと感じたのは初めてだった」と声をかけられます。「一票によって社会は変えられる」と勇気を与えられるのが、選挙本来の姿ではないでしょうか。一方、僅差ということは、反対票を投じた人がそれだけいるということです。区長に就任してからは、何か物事を進めようにも「全てが課題である」という毎日でした。さまざまな考え方の人と一緒にやっていくのは誰にとっても大変ですが、物事を進めていく上で、誠実な対応に妥協は許されないと思っています。

また、私は区議会議員の経験がなく、選挙前は区の行政情報を内部から見た上で政策を打ち出すことができませんでした。区長になって初めて「実はこんな課題があったのか」と分かったこともあります。まずは行政の内部を理解しながら政策を進めなければならず、困難がつきまといました。そうしたことから、子どもの居場所づくりを進めていく際には、職員と十分に議論した上で、学校関係者や地域社会、そして当事者である子どもと対話を重ね、7つの児童館の新設を含む新たな基本方針を定めました。政策が地域社会に染み込んで、実行されたときにその政策に「命」が宿ります。それを区民が育てていくことで参加型で共感できる政策として成長していきます。そのような成熟された市民社会を目指してまいります。

Evidence 取り組み実績

区長になってからの2年間で区民参加型予算、気候区民会議、国・私立を含む小中学校の給食費の無償化、パートナーシップ制度の導入、多文化共生基本方針の策定、高齢者の補聴器購入費の助成などを実施してきました。この他、区立学校や区役所本庁舎などに生理用品を配備するなどの「生理の貧困」対策にも取り組んでいます。

また、区民の区政参画を一層推進するため、区政に関する情報の積極的な提供を行っています。

区民の幸せを追求し、区民と対話した政策づくりをすることで今後も「共感を呼ぶ政策づくり」に注力してまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

日本社会では、今なお家庭でも会社組織の中でも女性に対するエンパワーメントが不足し、女性たちは栄養失調状態です。でも、その状態が「当たり前」だとは思わず、社会を変えるために挑戦してほしいと思います。

一人では大変でも、仲間とつらさや喜びを共有すると前向きな気持ちになっていきます。どれだけ人と共有できるかということは大切だと思います。ぜひそういったシスターフッドを大切にして、お互いに力をつけみんなで支えあっていきながら目標に向かって進んでいってください。

⬅自治体ホームページはこちら

女性は政治家に向いている！常に前向きさを忘れないで

13

埼玉県
秩父郡長瀞町長

大澤 タキ江

OSAWA Takie

1947年1月6日 埼玉県秩父郡皆野町生まれ
1999年4月 長瀞町議会議員
2005年5月 長瀞町赤十字奉仕団委員長
2007年11月 社会福祉法人長瀞福祉会理事
2013年7月 長瀞町長当選（1期目）
2017年7月 長瀞町長当選（2期目）
2021年7月 長瀞町長当選（3期目）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

自営業の家に生まれ「商人は政治の世界には顔を出してはいけない」との父の方針で政治とは無縁であった私ですが、嫁ぎ先の舅が政治好きで、その類いの人達が多く出入りする環境の中で、舅や夫の従兄弟の町議選、そして当時の町長、県議の選挙とそちらの世界に段々と引き込まれていきました。

1995年当時所属をしていた町婦人会の勉強会で「春の町議選にぜひ女性を出したい」との声が上がり、私が指名されたのです。当時は息子2人はまだ学生であり「嫁・妻・母」の立場でしたので無理だと固辞しました。しかしその4年後、今度は家人全員が説得されてしまい家族会議の結果、出馬の意思を固めました。当時リーダー格であった女性に選挙戦にあたり強くお願いしたのは「お金をかけさせないでください。落とさないでください」の2点でした。今考えてみると大変厚かましいお願いだったと思います。しかし応援してくださった皆さんは、私の言葉をしっかりと守ってくれました。おかげさまで町議選4回は責任者、運転手、遊説隊、食事づくりすべて女性のみで戦い勝ち抜きました。町議4期途中で前町長から後継者指名を受け、絶対に嫌だと言ったのですが、当時の議員10名中7名が「町長の意向なのだから受けてほしい。俺たちが一生懸命やる」と言ってくれましたので決意をした次第です。以来町長として3期、大勢の皆様に支えられて今日まで参りました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

私は兄3人弟1人姉1人の6人兄弟で育ち、実家の仕事もまわりは男性が多い上に子どもの頃から男気質で「この子が男だったらよかった」と父が常々言っていたほどでしたので、町議会に入ってもまったく違和感なく溶け込んでしまいました。町議1年生当時は13人の男性議員がおり酒の席も大変多かったのですが、私はカラオケもやりますし、お酒も飲みますので特別扱いされたこともなく楽しく過ごさせてもらいました。一つだけエピソードをお話ししますと、当時の宴会はコンパニオンが付きものでしたが、私が仲間入りした2年目のある日に「私が入ったんだから宴席にコンパニオンはいらないんじゃないの。ただ私はコンパニオンやりませんけどね」と提案をしたところ、「確かにそうだよな」という声が出てきて、それ以来、ほとんどの宴席のコンパニオンをカットしてしまいました。当時を振り返ってみた時「新人のくせに生意気だ」という声がなぜ出なかったのか不思議でなりません。

今日まで様々な事業に取り組んでまいりましたが、議会の審議が進まず寝られないような日々を過ごしたということはありません。これは常日頃議員と良好な関係を保っているからだと思います。当然、若干意見の合わない方もいますが、それはそれでよろしいのではないかと思っています。常に前向きでいたいというのが私のトップとしての矜持です。

Evidence 取り組み実績

当町は小さな町ですので、私の頭の中には町内だいたいの地図が入っています。その中で一番気になるのは町道整備です。限られた予算の中で毎年町道の整備を優先させています。また、少子化が進む中で、子育てしやすい環境づくりに力を入れています。自然豊かな町にも公園は必要と考え、公園づくりに力を入れました。さらに、子育て支援施設も建設し、子育てしやすい町づくりを行っています。今日までいろいろな事業を実施してきましたが、それは私の仕事であり特別に誇ることでもありません。仕事を与えていただいたことに感謝する次第です。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

政治家生活26年を顧みて思うのは、政治家は女性に向いているの一言です。男性は世間体、プライド、しがらみ、いろいろが絡んでなかなか本当の自分を出せない。女性は表裏がない、当然政治家ですから駆け引きはあります。でもそれが一個人の為ではなく、町民市民の為であれば、清いものです。

政治家志望の皆さん、まずはお友達、お仲間をたくさんつくりましょう。ありのままの自分を多くの皆さんに知ってもらいましょう。政治家になる為の第一歩はまずそこからです。

⬅自治体ホームページはこちら

もっと良い環境をつくるために
地道に着実に歩みを進める

14

大阪府
池田市長

瀧澤 智子

TAKIZAWA Tomoko

1981年6月10日生まれ
証券会社勤務
池田市議会議員秘書
池田市議会議員

Turning Point 首長を目指したきっかけ

大学卒業後、証券会社に勤めながら2人の娘を育てる日々を送っていました。仕事と育児の両立に奮闘する中で、子どもの成長に合わせて働き方を見直したいと考えるようになりました。そんな折に縁があり議員事務所で働く機会を得ました。この経験を通じて、地域の課題を間近で見るようになり、特に子育てや教育環境の改善が必要だと強く感じました。

母親として子どもを育てる中で「もっとこうすれば暮らしやすくなるのに」と感じることが多くありました。例えば保育園の待機児童問題や、子どもの医療と教育のサポート体制など、日々の生活の中で直面する課題は数えきれません。最初は個人の悩みとして受け止めていましたが、同じような思いを持つ保護者が多いことを知り、これは一人ひとりの努力だけでは解決できない社会の課題なのではないかと考えるようになりました。

「もっと良い環境をつくりたい」という思いが強くなり、市議会議員に立候補しました。議員として市民の声を聞き、政策を実現する仕事にやりがいを感じる一方で、行政の仕組みや議員としての限界を目の当たりにしました。より多くの市民の声を形にし、変革を進めるには、首長としてリーダーシップを発揮する必要があると考え、市長選に挑戦しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

首長としての仕事は、家族の協力なしに成り立ちません。特に女性がリーダーの立場に立つと、家庭や子育てとの両立について問われることが多く、自分自身悩むこともありました。ただ、すべてを完璧にこなそうと無理をすると、どこかにしわ寄せがきてしまいます。だからこそ、「できることをできるときに」というスタンスを大切にしてきました。

また、女性の首長はまだまだ少なく、政治の世界は長い間男性中心です。そのため、女性のリーダーが増えているとはいえ、経験や実績を積む前の段階では「前例がないから」「女性には難しいのでは」などといった先入観を持たれることが少なくありませんでした。

そのような状況の中で、市民の皆さんの信頼を得るために、私はとにかく現場に足を運ぶことを大切にしました。一人でも多くの方々と直接対話し、地域の課題を共有し、解決策を共に考えることを続けました。また、市役所職員とも何度も対話を重ね、「この市を良くしたい」という共通の想いを持つことで、少しずつ信頼関係を築いていきました。

こうした地道な努力を重ねることで、市民の皆さんや職員と共にまちづくりを進めることができており、大きなやりがいにつながっています。

Evidence 取り組み実績

池田市は「子どもと大人の未来を育てるまちづくり」を目指し、次の取り組みを進めていきます。

まず、誰もが安心して子育てができるよう「18歳までのこどもなんでも相談窓口」を開設し、相談・支援体制を強化するとともに、産後ケアサービス利用者の負担の軽減を図っていきます。また、プレコンセプションケアの啓発や卵子凍結費用の助成を通じて、将来の妊娠・出産に向けた選択肢を広げていきます。さらに、多胎妊産婦・多胎家庭への家事・育児ヘルパー利用助成を推進するほか、令和7年度上半期には、学校給食費の無償化により保護者の経済的負担を軽減していきます。思春期の子どもには、フェムケアとして、性や健康、ライフプランを考える機会となる啓発冊子を作成し、次世代の健やかな成長を支えていきます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

社会が多様化する中で、女性がリーダーの立場に立つ機会が増えています。しかし、まだまだ「女性だから」というアンコンシャス・バイアスという見えない壁を感じる場面があるかもしれません。それでも、性別に関係なく、「自分がこの地域や社会をより良くしたい」という想いこそが、最も大切な原動力になります。

私自身も、多くの挑戦と葛藤のなかでここまで歩んできました。完璧でなくてもいい。迷いながらも、一歩ずつ前に進むことで、道は必ず拓けます。

次世代を担う女性リーダーの方、目指している方には、自分らしいリーダーシップを発揮しながら、新しい価値を生み出していってほしいと思います。

⬅自治体ホームページはこちら

強い志を持てば、共感の輪が広がり想いは必ず成し遂げられる

15

千葉県
君津市長

石井 宏子

ISHII Hiroko

1964年10月26日 埼玉県生まれ
1983年3月 千葉県立木更津高等学校　卒業
1987年3月 上野学園大学音楽学部　卒業
2003年9月 君津市議会議員
2007年4月 千葉県議会議員　1期目
2011年4月 千葉県議会議員　2期目
2015年4月 千葉県議会議員　3期目
2018年11月 君津市長　就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は、「すべての子どもたちが幸せに暮らせる地域をつくりたい」という思いで市政に携わり、市議・県議を経て、より多くの課題を解決するために市長としての道を選びました。現在、2期目を務めています。

大学卒業後、中学校の音楽教諭として勤務していましたが、結婚後に生まれた子どもに障害があり、やむなく教員を辞め、子育てに専念しました。当時の障害福祉サービスは不十分で、保育や教育現場でも障害への理解が不足し、理不尽な状況を目の当たりにしました。「必要な支援がないなら自分でつくろう」と考えていた矢先、ある方から「行政の場で力を発揮してはどうか」と声をかけられ、市議選に挑戦しました。

市議時代は、こども家庭相談室や子育て支援センターの創設に尽力しましたが、市議会だけでは解決できない課題も多く、県議へと活動の場を広げました。約3期にわたり県政に携わる中で、「君津にはまだできることがある」「もっと元気なまちにしたい」という思いが強まりました。

私の政治信条は「対話」です。市民の皆さんの声を市政に反映させれば、誰もが幸せに暮らせるまちになると確信し、多くの支援を受け、平成30年に市長選へ初出馬し、当選。令和4年に再選され、現在2期目の市政を担っています。

子どもたちが安心して暮らせるまちは、すべての人にとって安心して暮らせるまちです。これからも「ひとが輝き幸せつなぐきみつ」をめざし、全力を尽くします。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

市長に就任して1年も経たないうちに、過去最大級規模となった令和元年房総半島台風が直撃し、市内の様々なインフラをはじめ、多くの施設、家屋等に甚大な被害をもたらしました。9月上旬のひどい暑さの中、長期にわたる断水と停電が市民の皆さんを苦しめ、本市の基幹産業である農業者や、多くの中小企業の方々の生業にも深刻な影響を与えました。

市をあげて復旧に取り組み、復興への道筋が見え始めた矢先、今度は新型コロナウイルス感染症の爆発的流行という未曽有の非常事態に見舞われ、1期目は任期のほとんどを「市民の暮らしと命を守る」という行政の責務に向き合い、邁進してまいりました。

そのような中で、職員、市民の皆さん、企業・団体・国・県・他市の方々、たくさんの方々との出会いが、私を支え、君津市を共に支えてくださいました。

強い志を持てば、それに共感する人が増えていきます。そして、その共感の輪がだんだんと広がり、その思いは必ず成し遂げられると思っています。大切なのは、強い意志を持つこと、本質を見失わないこと。自分は何を実現したいのか、何のためにそれをやりたいのか、ということだけ見失わなければ、性別を問わず必ず道は拓けてくる、と私は信じています。

Evidence 取り組み実績

君津市の将来都市像「ひとが輝き　幸せつなぐ　きみつ」の実現に向け、未来への投資を進めてきた結果、本市人口の「社会増減」は令和5年に30年ぶりにプラスに転じ、「消滅可能性自治体」からも脱却するなど、明るい兆しが見え始めています。しかし少子高齢化の進行に伴う社会課題は山積し、今こそ、強い覚悟で立ち向かい、新たな未来を切り拓くときであり、経営改革を徹底しつつ、君津の未来に必要な施策には、果敢にチャレンジすることが大切だと考えています。「改革」と「チャレンジ」を市政推進の両輪とし、変化を恐れず、挑戦を続けることで、「住み続けたいまち、訪れたくなるまち君津」を市民・事業者・行政「オール君津」で実現してまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

女性活躍の推進について議論される際、よく「ロールモデル」という言葉がでてきます。ロールモデルとは、目指したいと思う模範となる存在であり、そのスキルや具体的な行動を学んだり模倣したりする対象となる人です。それでも実際には、一人ひとり状況が異なり、完全に自分に合致する「ロールモデル」にはそうそう出会えないものですから、最後は自らの手で、自身が進む道を切り拓いていくよりほかにありません。

次世代の女性リーダーの皆さん、これから女性リーダーを目指す皆さん。どうか強い志をもち、失敗を恐れず果敢にチャレンジして、自分が成し遂げたいものに向かい道を拓いていってください。私も、応援しています。

⬅自治体ホームページはこちら

性別は個性の一部
自分らしくしなやかに
人生を楽しむ

16

東京都
東大和市長

和地 仁美

WACHI Hitomi

1970年9月27日生まれ
1989年 埼玉県立本庄高等学校卒業
1993年 武蔵野音楽大学 音楽学部 声楽学科卒業
2006年 Ashton College (Canada) Human resources Management Diploma Course 修了

東大和市議会議員（3期）
東大和市長（現在1期目）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

長年、民間企業で働いていたのですが、40歳を目前に知人からお声がけをいただき、市議会議員に挑戦することとなりました。大学を卒業後、様々な人との出会い、貴重な経験を重ねたことでキャリアを積むことができ、まさに「社会に育てていただいた」と感じていたため、いつか社会に恩返ししたい、貢献したいという気持ちが芽生えている時期でした。そのような時のお声がけだったこともあり、市民生活に一番身近な市議会議員は社会への恩返しのためにふさわしい職だと思いました。

市議会議員は市民の代弁者ではありますが、実際に様々な施策を実現するのは行政執行を行う市長です。民間企業での経験から、私は組織をマネジメントし、現場で自らも汗をかいて施策を実現していくことの方が向いていると感じていたこともあり、市議会議員に挑戦した時から、いつかは市長になることを目標に、議員活動を行っていました。

市政を市民目線で捉え、レポートをほぼ毎週作成し、早朝から駅頭で配布。2期目ごろから、レポートで私の考えなどをご理解くださった多くの市民の方から「女性初の市長に挑戦してほしい」との声も頂戴できるようになってきました。

私と同じ時期に市長に初当選した前市長が、3期で引退を表明。私自身も市議会議員としての経験を3期積んだ、まさしく機が熟したタイミングだったので、目標としていた市長選に挑戦することとしました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

首長として苦労したことはありますが、〝女性首長〟として苦労したことはあまり思い当たりません。私は仕事が面白く夢中になってしまっていたため、結婚経験もない独身で子育て経験もありません。市長選に出馬した当時は、「妊娠経験もないのに…」、「母になったことがないのに…」といった声が市民の中にあることを耳にしました。男性で独身だった場合には、このような声は聞きませんが、そういう思いのある市民の方とも、面と向かって話をさせていただくことで、私の考えなどについてご理解いただけることを実感できる機会がたくさんありました。正直、マイナスイメージからのスタートの方が、大きな信頼につながっている感じがしています。

一方、「女性市長だからわかってくれるはず」と、バイアスを持たれている方がいることも事実です。私自身は未来につながる施策として子育て支援、子どもの教育を重要施策としていますが、市政運営はバランスも必要で、高齢者、障がい者、現役世代の方々など、市民全体の福祉を向上させることが目標です。「女性だからわかってくれる」という気持ちで、今まで声にしてこなかったご要望を伝えてくださることも多くありますが、すぐに実現できない旨を伝えると、がっかりされてしまうこともあります。しかし、市の実情と考えについて丁寧にお話しさせていただくことで、このバイアスも乗り越えています。

Evidence 取り組み実績

首長として実現したいことは様々ありますが、全てを自分自身で行うことはできません。また、市のレベルは職員のレベルと比例するとも言われています。よって、首長に就任してすぐに職員約460人との1on1の面談を行い職員を把握し、新たな研修の実施、働き方改革の取り組み、評価制度の見直し等、「ヒト」に関する取り組みに力を入れています。また、都内自治体初の「女性の再就職応援宣言」を行い、新しい方法で採用を実施したところ、全国から300名以上のご応募を頂き、様々なキャリアをもった新たな仲間を採用することができました。これらの取り組みの成果も現れてきており、組織の風通しもよくなり様々なチャレンジが見られるようになっています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

私は、自身の性別の前に私、個人があると考えています。言い換えると、私という個人の個性の1つが性別というだけだと思っています。よって「女性だから不可能…」という風に自身の性別をネガティブに捉えず、むしろ長所とすべきとも思っています。一概には言えませんが、女性の中には女性であることを言い訳にする方もいて、女性自身が性別の呪縛にはまっているように感じることがあるのも事実です。性別がハードルになることもありますが、それを楽しむくらいの勢いで、自分自身を信じて、しなやかに様々なことにチャレンジし、人生を楽しむこと。それが、道を開いていく秘訣だと思います。

⬅自治体ホームページはこちら

地域に合った地生（じば）えの政策で男女ともに活躍できるまちに

17

栃木県
下都賀郡野木町長

真瀬 宏子

MASE Hiroko

1946年1月12日 栃木県生まれ
1968年 東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
同年 安宅賞受賞
1974年 同大学大学院修士課程修了
1975年～ 画家、高校美術教師
2001年～2008年3月 野木町公民館長
2008年～ 野木町長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私はもともと洋画家であり、高校の美術科講師を数校兼務で務めていました。また、野木町の公民館長を依頼され、町内のイベントに時々参加していました。思い返せば、公民館長として色々な行事で町の各地を訪問することで、多くの知り合いと地域の思いを知る機会を得ていたのだと思います。当時の自分としては絵の世界を極めようと、毎年各地で個展を開催し、画家として研鑽を積みあげることが大きな目的でした。

そんな折、野木町では、前町長が色々な事情が重なった末に、辞任する事態となっていました。私は、他自治体の複数の高校に勤務していたこともあり、町民の一人として新聞等で知る程度でしたので、気に留めることもありませんでしたが、町の評判がだんだん悪い方に傾いていくことに、心を痛めていたことも事実です。1学期も終わる頃から夏休みの個展最中まで、何人もの人が入れ替わりに町長に出馬するようすすめてきましたが、私としては、行政も議員も未経験でしたので固辞していました。しかし最後は、町の状況を改善し良い方向に向けるために少しでも自分が役に立てるのなら、と立候補を決意しました。また、皆さんが、私の未経験なところをむしろ「クリーンな政治に変える」重要ポイントと考えていた事が、わかったので、期待に応えるために、未知なる世界へ挑戦する次第となりました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

女性首長だからといって、特に苦労したと意識しないまま、現在5期目に達しています。政治的に全くの初心者から入っていますので、日々が全力投球、毎日が新鮮な一日の積み重ねです。多くの人のやさしい思いに支えられて今日の自分があるとつくづく思います。ただ、私は嫁いだ夫の郷里で首長をさせていただいているので、当初は自分がたどってきた自治体との相違、優劣を考えてしまいがちで5期目となった現在、野木町の地に足の着いた政策の芽生えをやっとつかみかけられるような気がしています。地域に合った地生えの施策を大切にしようと思っています。

就任当初には町営墓地建設について、町長への立候補を推薦いただいた議員の方達から反対の特別委員会を立ちあげられて苦労しました。これまで各地にある地域霊園や寺院の墓地等を圧迫するというのが理由でした。しかし、多くの移住者のためにも町営墓地の必要性をずっと訴え続け、実行に移せました。それらの過程は、非常に勉強になりました。反対の特別委員会は、「慎重に進め！用心深く」ということを伝えるための指導的措置だったのだと述懐します。また、国指定重要文化財「野木町煉瓦窯」の保存修復の工事、基金立ち上げ等には議会全員の賛成で道が開かれたことは、その後発生した東日本大震災を思えば、良い時期に耐震、改修工事をしたので壊れずに守られたと思っています。

Evidence 取り組み実績

野木町は「男女ともいきいき活躍できるまち」を将来像に掲げ、意識啓発や周知に取り組んでおります。男女共同参画映画会やワーク・ライフ・バランスセミナーを開催し、特にこのセミナーでは役場職員と町内事業所の社員を対象にしてワークショップ形式で行うことで意見交換の場となっています。また、平成30年度から女性の活躍推進等に取り組む事業所を認定し、事業所の取り組み内容を周知しています。現在、13事業所を認定いたしました。今後も男女共同参画について、ご理解を深めていただけるよう住民や団体、事業所の皆様との協働により、更なる取り組みを進めてまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

政治の世界は男性女性の別なく働ける世界だと実感しています。女性の活躍は地域を照らす太陽でもあります。明るく柔軟にしなやかに問題を解決する女性の視点が政策に取り込まれることは、生活の満足度をきっと充足させると思います。

意志あるところに道は必ずできます。意欲のある方は、積極的に手を挙げて、男女共生社会の実現を図って頂ければ、これ以上の喜びはありません！

⬅自治体ホームページはこちら

性差によるアンコンシャスバイアスをなくすため自ら古い慣習を打ち破る

18

長野県
諏訪市長

金子 ゆかり

KANEKO Yukari

1958年8月28日 長野県生まれ
1981年3月 慶応義塾大学法学部政治学科　卒業
1981年3月 株式会社服部セイコー（現：セイコーグループ株式会社）入社
1999年4月 長野県議会議員（1回）
2005年3月 早稲田大学大隈記念大学院　公共経営研究科　修了
2007年4月 長野県議会議員（2回）
2011年4月 長野県議会議員（3回）
2015年5月 諏訪市長（1期）
2019年5月 諏訪市長（2期）
2023年5月 諏訪市長（3期）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

長野県議会議員として40歳の初当選から3期にわたり全国各地や長野県下一円の市町村を視察し、地方の自治体の特徴、政策、苦労などを学びました。また、男女共同参画などいくつかの議員提案条例の作成や、地元要望の強い社会資本整備をはじめ、不登校生徒の親御さんや障害を持つ皆さんのご要望などを行政に繋ぐ取り組みなど、様々な経験を積むことができました。

そうした中、前任市長の引退を受けて、思案と相談を重ねた結果、ふるさとに戻って自治体経営の現場に身を置く決断をしました。それは長野県で女性としては初めてとなる挑戦でありましたが、多くの皆様、各種組織や、後援会の方々に背中を押され、ふるさとの諸課題に女性の視点をもって取り組むことに勇気をもらいました。この決断は、県という広いエリアで活動を重ねる中で、地元の課題を客観的に捉える視点や先輩諸氏の参考となる取り組み事例を学んできた経験がなければできなかったかもしれません。そして、男女の性的役割分担意識の色濃く残るといわれる長野県において、職責を果たすうえで、活動や実績以前に性別によって評価が位置付けられること（アンコンシャスバイアス）をなくしていくには、先ず自身の遠慮や謙遜といった意識や、結果に対する評価への不安、心配からも抜け出して一つの実例となることから始めなければならないという使命感が、力強い応援によって生まれました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

大学時代、会社員時代、議員時代を通して「女性ではだめだ、女性には無理だ」という声や、数々のハラスメント発言を受けとめてきた経験があります。勿論その時々で湧いてくる個人的感情はありました。しかし、冷静に思い返せば、同じくらい多くの励ましや期待の声もあり、自身の身の回りに起こる嬉しくない事象も、私たちが目指す男女共同参画社会の姿にはまだ遠いことを、ひとつひとつ確認する作業の過程であると捉えてきました。

21世紀も四半世紀が過ぎましたが、未だ、私たちの地方では無意識的に性的役割分担意識に根差した悪気のない「アンコンシャスバイアス」に接することが多々あります。無意識であることに、この課題の難しさがありますが、その結果、地方において新卒から20代前半の女性の流出が多いという現実にも結び付いていると気づくべきでしょう。苦労というと、そうした発言が、女性だからというバイアスをかけられることです。男女を問わず、その課題に気づき、発言し、一緒に課題解決に取り組まれる方が増えることを期待しています。

Evidence 取り組み実績

行政としての女性活躍の取り組みの1つに、審議会・委員会の女性登用率の向上があります。当市も40%を目標に徐々に迫っているところですが、女性が子どもを産み育てながら持てる能力を社会に還元し、社会も不安なく発展するためには活躍推進の取り組みと同時に家庭における家事・育児の負担感を解消させることが不可欠です。

そこで、まずは市役所内から働きやすい環境整備に取り組んでいます。管理職による「育ボス・温かボス宣言」、フレックスな働き方の推奨、急用でも休みをとりやすい職場環境の醸成などを実践し、ここ2年で、有給休暇の平均取得日数が2.5日増えるなど、成果もみえて来ています。令和7年度当初には「健康経営宣言」もする予定です。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

日本で、女性の参政権が認められたのは戦後のことです。そして、職業選択の自由をはじめ人権擁護など法的な環境は整ってきました。しかし、女性が社会で能力を発揮する場ができたとしても、出産や育児の支援が薄い中で、両立が難しいと訴えている、その声なき声が、少子化という現実として世に問われています。社会を構成し、一生の中で結婚、子育て、社会参加、社会貢献などを実現していくために、家族、職場、地域社会など誰もが協力し合い、役割分担していく必要があります。心地よく、安心な人生をおくれるよう、理想への道は長いように見えますが、弛まず、根気よく積み重ね、ともに発展する豊かな日本社会を築いていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

地域から社会を変えていく

19

東京都
品川区長

森澤 恭子

MORISAWA Kyoko

1978年11月16日生まれ
2002年3月 慶應義塾大学法学部政治学科卒業
2002年4月 日本テレビホールディングス株式会社入社
2006年4月 トレンダーズ株式会社入社
2007年4月 森ビル株式会社入社
2014年1月 株式会社みんなのウェディング入社
2015年4月 株式会社リブ入社
2017年7月 東京都議会議員
2022年12月 品川区長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

夫の留学と転職を契機に、それまで正社員として務めていた会社を退職し、第一子とともにシンガポールに渡航しました。

しばらくして帰国し、子どもが0歳と2歳の時に再就職しようと思いましたが、多くの仕事が残業前提の長時間労働で、柔軟に働ける仕事は少なく、さらに、保育園もなかなかみつからず苦労しました。結局、0歳児を一駅電車に乗った先にある保育園に預けることになりました。私の場合は、そこまでして再び働き始めましたが、こういった状況では働きたくてもあきらめてしまう女性も多いのではないかと感じた次第です。

そういった中で、まだまだ政治や意思決定の場に女性や子育て世代の声が届いていないことを痛感し、東京都議会議員選挙に挑戦。都議会議員を2期5年務める中で、都政はもとより、子育て、福祉、学校、まちづくりなど、地元品川区の様々な課題に関するお困りごとが寄せられることが多く、それであれば、直接的に地域の課題を解決していこうと思いました。そして、なかなか国から変えていくには時間がかかると思い、地域から社会を変えていこうと、首長を目指しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

品川区は、初めてとなる女性区長をあたたかく迎え入れてくれたと感じています。特に、女性の皆さんからの「がんばってほしい」とのエールを強く感じます。

一方で、職員にとっては、突然外部からやってきたトップなので、最初は戸惑いが大きかったのではないかと推察します。私の考え方や目指す方向性を共有することは大事だと考え、様々な機会をとらえて伝え続けてきました。2年間伝え続け、だいぶ浸透してきたのではないかと実感しています。また、職員との距離を縮めたり、現場を理解するために、新入職員からベテラン職員まで誰でも参加できる区長室でのランチミーティングなどを開催し、ざっくばらんにお話をするなど工夫をしています。

各種審議会やイベント講師の男女バランスの偏りなどについては、私が女性だからこそ気づくことも多く、気になったものについてはその都度指摘し、できるだけ改善するようにしています。なお、審議会等においては、どちらかの性が40%以上になるよう目標を定めています。

Evidence 取り組み実績

2024年4月に「品川区ジェンダー平等と性の多様性を尊重し合う社会を実現するための条例」を施行しました。ジェンダー平等を条例名に冠したのは、兵庫県明石市に次ぎ、全国で2例目です。また、基本的な考え方のひとつに「女性のエンパワーメント」を記しました。いわゆる「女性活躍」ではなく、一人ひとりが持つ力を十分に発揮できるように後押ししていくことが重要だと考えています。条例が浸透するよう取り組み、性別にかかわらず誰もが自分らしく生きていける品川区をつくっていきたいと思っています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

リーダーというポジションについて、「私には務まらないのではないか？」と躊躇してしまう女性は多いかもしれません。ただ、実現したい理想がある時には、リーダーになることで、その理想に近づくことができます。そのやりがいは計り知れません。

ひと昔前は、強いリーダーが求められていたかもしれませんが、今は、変化が激しく、先が見通しづらい時代。人々に寄り添い、みんなの力を引き出しながら、臨機応変に対応していく、しなやかでやさしいリーダーシップが求められていると感じます。そこには女性の強みを活かせる部分も多いかと思います。ぜひ挑戦してみてください。

⬅自治体ホームページはこちら

すべての人がそれぞれの人生で輝ける社会に一緒に社会を変えましょう！

20

群馬県
北群馬郡榛東村長

南 千晴

MINAMI Chiharu

1980年7月 群馬県北群馬郡榛東村生まれ
2003年3月 高崎経済大学地域政策学部卒業
2007年4月 榛東村議会議員就任
2016年9月 高崎経済大学大学院博士前期課程修了
2017年4月 榛東村議会議長に就任
2019年4月 群馬県町村議会議長会副会長に就任
2023年3月 榛東村議会議員辞職
2023年5月 榛東村長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

政治の道に足を踏み込んだのは26歳の時。「人の役に立ちたい」「生まれ育ったこの村の力になりたい」と同世代の若者と地域活動に励んでいたとき、仲間から推され榛東村議会議員補欠選挙に挑戦しました。初当選以来5期16年間、大切な議席の一つを預からせていただき、その重責を果たせるよう住民の声を政策や事業に反映するために活動してきました。

議長を経験してからは、ご支援をいただいた方々から村長選挙に出馬してほしいという声を度々いただくようになり、選挙まで数ヶ月と近づくにつれ、その声が大きくなっていきました。

期待を寄せていただいていること、これからの村のことを考えてくださっていることは本当に嬉しく、ありがたいと思う一方で、「私にできるだろうか」「4歳と1歳の子どもがいる今、挑戦すべきなのだろうか」「このまま期待に応えず、これまでの恩に報えない自分で良いのだろうか」と毎日自問自答を繰り返し、本当に悩み、たくさん葛藤しました。

そのときに、背中を押してくれたのは家族でした。思い切って相談したところ「自分の人生なのだから後悔しないように自分で決めれば良い。決めたら応援する。」この言葉を聞いて、決断しました。

今までの議員経験を踏まえて、村の進んでいく方向や課題に対して私が先頭に立って、新たな村づくりに取り組んでいきたいと、素直な気持ちで挑戦することができました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

村長就任時、子どもは1歳と4歳。「仕事と家庭の両立」は私のテーマでもあります。

就任直後は、毎日遅くまで残り、業務を行っていました。就任して少し経ったとき、ある方から、「村長、頑張りすぎだよ。子どもも小さいし、仕事と家庭の両立を実践してロールモデルになってほしい」と言われ、ハッとしました。今思えば、住民の負託に応えるためにと気が張っていたため、睡眠時間が少なくても、いくらでも仕事ができるような気がしていたのでしょう。また、応援してくれるといっても、夫や両親にかなりの負担をかけ、子どもたちと一緒に過ごす時間もほとんどありませんでした。このことをきっかけに、夫と話し合い、お互いの仕事を尊重した上でどちらか一方に偏りすぎないよう夫婦で分担をしていく、それでも無理なときには、両親や他に頼ることを改めて確認し合いました。

村長は昼間だけでなく、夜や土日にも公務があり、毎日が綱渡りです。「お子さんは誰がみているの」「子どもがかわいそう」と多分、私が男性だったら同じようには言われないであろう言葉をかけられることもあります。

私は「家庭生活での家事負担の多くを女性が担う」日本社会ではなく、男性も女性も共に現状に甘んじることなく、だれかの我慢や犠牲ではない、もっと！ すべての人がそれぞれの人生で輝ける社会となれるよう、女性首長としても当事者としてもこの課題と向き合い、乗り越えていきたいと思っています。

Evidence 取り組み実績

就任以来、「赤ちゃんから高齢者まですべての人にやさしい村づくり」に取り組んでいます。

学校給食費と0～2歳児の保育料を全て無償とし、子育て世代が仕事と家庭を両立できるよう、保育所や学童保育所の待機児童ゼロを目指し、施設を増設しました。また、路線バス通学定期券購入費助成制度の創設や周産期母子医療センター等利用時のハイリスク妊産婦へのタクシー券交付、誰もが安心して出かけられるよう移動式のユニバーサルシートとテントを導入しました。さらに認知症診断費用の助成、補聴器購入費の補助制度も実施しています。村では、課長補佐以上の女性管理職の登用を進め、令和6年度は44.4%になりました。

Message

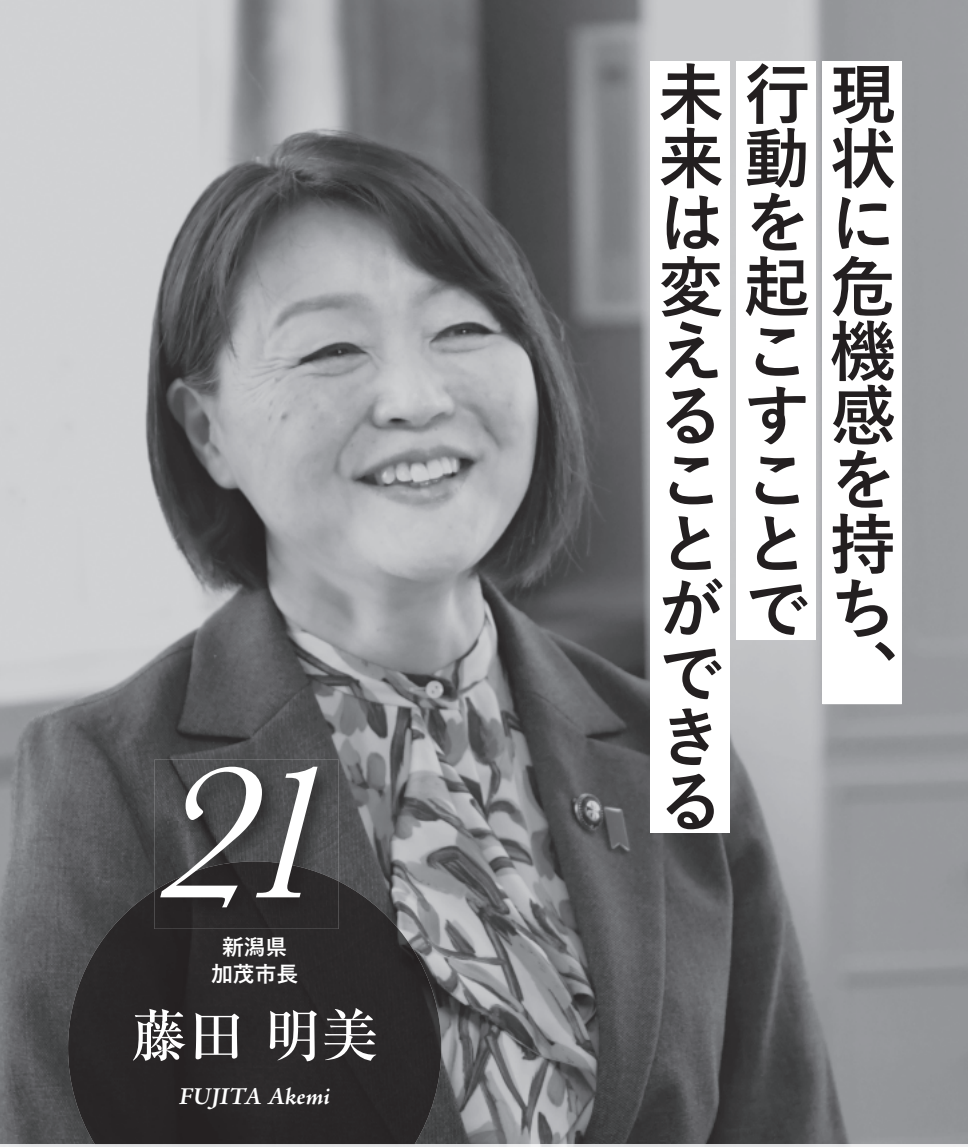
次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

これまで道を切り拓いてきた女性の先輩方が、悩みながら乗り越えられ、少しずつ社会が変わってきています。今では、リーダーには男性も女性もいて当たり前の社会です。

私が榛東村の村長という重責を預からせていただいているのも、住民の理解と協力があってのことです。女性だから男性だからといったことだけでなく、何をしていくのか、どのように進めていくのか。その人の考えや政策も含めて私という人を選んでくださったのだと思っています。

もし、悩んでいるのであれば、ぜひ、勇気を出して挑戦してください。一緒に社会を変えていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら



現状に危機感を持ち、行動を起こすことで未来は変えることができる

21

新潟県
加茂市長

藤田 明美

FUJITA Akemi

1971年1月6日 新潟県生まれ
1989年3月 新潟県立三条高等学校卒業
1993年3月 早稲田大学理工学部数学科卒業
2015年5月 加茂市議会議員就任
2019年2月 加茂市議会議員辞職
2019年5月 加茂市長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

結婚を機に故郷である加茂市に戻り、塾講師と家庭教師の仕事をしてきましたが、その中で、発達障がいや学校での生活に困難を抱えている子どもたちを見てきました。また、私の最初の子どもにも生まれつき障がいがあり、加茂市の障がい福祉に遅れを感じることがありました。市議会議員に立候補したのは、子どもの教育と子育て、障がい者福祉の環境改善を実現したいという思いからでした。

しかし、いざ市議になってみて、議員の立場だけでは変えられないことが多くあることを知りました。そのような中、当時の市長の方針により土日や夏休みなど長期休暇中においての部活動がこれまでどおりできなくなりました。部活動の練習が突然できなくなった子どもたちは、必死に周りの大人たちに練習をさせてほしいと訴えますが、この状況を変えられませんでした。このようなことをくり返していくうちに子どもたちは、大人に何を言っても変わらないと諦めるようになっていったのです。私は子どもたちのことを考えて力を尽くしている大人もいるということを子どもたちに知ってほしいと思いました。このようなことをきっかけとして、現状の不満に対して誰かのせいにするのではなく変えていくには市長になるしかないとの決意を固めました。

市長選の準備を進めるにあたって、現職が相手なので後援会長が見つからないという困難がありましたが、思い切って出馬を表明することで応援してくださる人が増えていきました。また、2017年度の決算で市の財政調整基金残高が約87万円になったとの報道もあり、現状に危機感を持ち「今の市政を変えたい」という市民の皆さんの思いが私の当選という結果となって現れたのだと思っています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

市長となった最初の所信表明で「市民参加型」「人づくり」「連携」を挙げ、市政に取り組むことをお約束しました。しかし、いざ市長になると、市議の時にはわからなかった大変さを身をもって感じました。

まず、財政的に非常に厳しい状況に直面しました。単に財政調整基金が少ないだけでなく、実施しなければいけないことが棚上げされ、手つかずとなっていたこともありました。例えば、老朽化した公共施設のメンテナンスがされずそのままであり、学校の耐震化率も全国で最低レベルという状況でした。

そこで、「行財政健全化推進計画」を策定し、過剰な補助金や無料のサービスの見直しを行いました。市民の皆さんにとって大変な痛みを伴う改革になったと思いますが、特別職と市職員の給与カットを行うなど、皆さんのご理解を得ながら、いいところも悪いところもすべて開示しながら取り組みを進めました。その結果、約87万円だった財政調整基金を、2024年度末には見込みとして約15億7000万円まで増やすことができました。これにより、大雪や地震などの災害に迅速に対応できる体制を整えることができました。

また、27年ぶりに「加茂市総合計画」の策定にも着手しました。これからの加茂市の方針を示す重要な計画です。ワークショップを開くなど、コンサルに頼らず市民の皆さんから策定に参画いただきました。これは加茂市の今後をどうしていくべきか、市民の皆さんに考えていただく良い機会になったと思っています。

市長になって初日に行ったのが、前市長による「土日や長期休みの運動部活動禁止」の運用の保留です。それにより子どもたちが望むような部活動ができるようになりました。

また、2023年に学校の統廃合に向けた説明会を実施しました。具体的には、今5校ある中学校を1校に減らし、小学校は6校から2校に減らします。これは、全国的に見てもかなり大規模な統廃合となりますが、少子化が急速に進んでいる現状があり「もっと早く進めてほしい」という意見もいただきました。反対意見の方にも丁寧にご説明し、ご理解いただきました。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

リーダーは孤独を感じることが多いですが、自分のやりたいことをしっかり表現し、信念を示すことで、共感してくれる人が必ず出てきます。誰かがやってくれると思っているだけでは決して変わりません。変えたいことがあるのなら自ら取り組んでみませんか。

女性の首長はまだ少ない状況にありますが、「女性だから」ということが壁になることは減ってきていると感じます。それはこれまで戦ってきた先人たちの功績です。それを私たちも次の世代に繋げていきますし、これからリーダーを目指す方にも受け継いでいってほしいと思います。これからの時代、女性の視点はより重要になりますので、意思決定の場に多くの女性が参画することを願っています。

⬅自治体ホームページはこちら

一つひとつの物事に丁寧に向き合い次世代へ希望のバトンを繋いでいく

22

東京都
西多摩郡日の出町長

田村 みさ子

TAMURA Misako

1951年10月15日 東京都世田谷区生まれ
1970年3月 カリタス学園女子高等学校卒業
1974年3月 上智大学文学部卒業
1974年4月～1976年6月 三井物産株式会社勤務
1995年9月～2021年3月 日の出町議会議員（7期）
2003年12月～2021年3月 社会福祉法人理事
2021年4月 日の出町長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

今から33年前、町内で進められていたごみ最終処分場建設計画を機に、地域運動に参加したことがきっかけです。この経験を通して、町の未来の姿に対する不安を取り除き、町をよりよくしていきたいという強い思いが芽生えました。町の問題を解決するためには政治を変える必要があると感じ、地域の方たちの応援を受けて町議会議員に無所属で立候補し、初当選を果たしました。

町議会議員7期目を迎えた頃、現職町長が突然亡くなりました。それまで私は町議を26年続けてきましたが、議員としての限界を感じていたこともあり、コロナ禍に加えて財政危機が迫る困難な時期でしたが、私は、前町長の遺志を受け継ぎ、町に貢献する使命に燃えて町長に立候補する覚悟を決めました。限られた時間のなか、政党の応援や大きな組織の支援を受けませんでしたが、町議会議員時代に築いた信頼と人のつながりにより選挙戦を戦い、当選することができました。

地域の問題を解決するためには一人の力では限界があります。町民の声をしっかりと聞き、共に歩んでいく姿勢は町議会議員でも町長でも同じです。特に小規模な自治体では、町民からの要望が直接届きますし、町の動きへの関心が深いです。誠実に歩むことに徹することが次の展望につながると考えています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

就任当初はコロナ禍だったこともあり、非常に多くの業務や課題がありましたが、庁内のことが疎かにならないよう職員の声を聴くことに徹しました。まず、少人数しか座れない町長室の来客用ソファーを撤去し、10人ほどが座れる会議用の椅子とテーブルを設置しました。打ち合わせや相談事への対応から複数部署を横断する会議まで行えるようになったことで、風通しが良くなり、部署を横断するテーマについても、情報共有や連携を取りやすい体制が整ったと感じています。

また、議員時代には知りえなかった人事や組織の課題は、進めていくうちにこれこそ自治体運営の要であると理解し、町長直轄のプロジェクトチームを立ち上げ取り組むこととしました。定例会議で意見交換や改革の素案を検討することで、一歩ずつ前進しています。

さらに、前町長から引き継いだ「行政改革」として、市独自の福祉関連施策の現金給付削減を進めていかなければならない難しい局面において、コロナ禍で様々な制限がある中にあっても、広報、HP、町長による録画配信、窓口対応など、職員が意見を出し合い連携するができたことから、大きな混乱もなく制度改正を乗り切ることができたと思います。

初めて町長を務めるにあたり、前町長が亡くなったこともあり、私には指南役となる存在がいない状況でしたが、議員時代から面識のある職員の皆さんに大いに支えられ、ここまで務めることができています。

Evidence 取り組み実績

福祉においては、子育て支援と高齢者施策を手厚く行い、独自の給付も実施してきましたが、時代のニーズに応じて新しい支援を行うため、東京都の補助金を効果的に活用しています。

例えば、子育て支援策については、給食費無償化やこども家庭センターの設置などを行いました。また、広報誌やウェブサイトは、受け手の視点に立ち、より読みやすくするため大幅に改訂しました。

さらに、審議会や各種計画の策定方法、条例や要綱の点検作業にも着手しています。女性活躍においては、2名の新たな課長職の誕生をはじめ、男女を問わず昇任試験に挑戦する動きが広がっています。

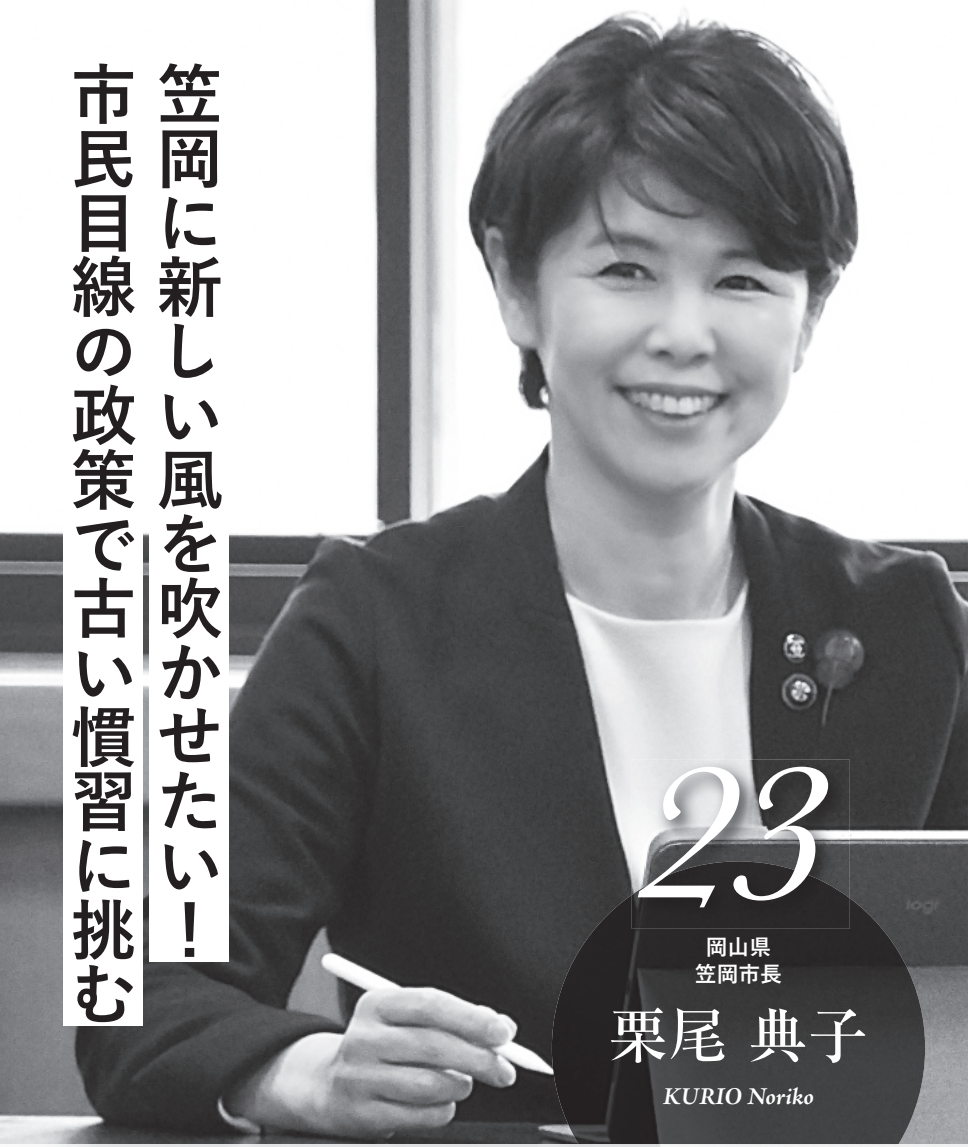
Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

もし立候補のチャンスが訪れたなら、迷わず一歩を踏み出し、勇気と自信を持って前進してください。迷いが生じている時点で、すでにその入口に立っているのです。自分の力を信じて進んでください。多くの職員が支えてくれます。分からないことがあれば積極的に学び、成長することができます。そして、柔軟な思考でさまざまな決断を下してください。失敗を恐れる必要はありません。失敗こそが次への学びとなり、組織と自分自身の力を一層強化する源になります。

地方自治はバトンリレーのようなものだと感じています。私自身も次の走者にバトンをつなぐまで、汗を流して自分の区間を走り抜けていきます。

⬅自治体ホームページはこちら



笠岡に新しい風を吹かせたい！市民目線の政策で古い慣習に挑む

23

岡山県
笠岡市長

栗尾 典子

KURIO Noriko

昭和42年（1967年）生まれ
平成26年4月 県内私立高校、通信制高校、中学非常勤講師（家庭科）
令和2年4月 笠岡市議会議員
令和6年4月 笠岡市長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

実は、市長になりたいと思ったことはありませんでした。というのも、父が10期40年という長年にわたって市議会議員を務め、家族は「被害者の会（笑）」を結成していたからです。選挙は本当に大変です。当選する保証はなく、ときには下げたくない頭を下げなくてはいけません。私も弟も「あんな大変な役目を買うのは無理だ」と言っていました。しかし、いよいよ父が引退するとなると、支援者の方たちから「今後は誰が私たちの意見を市につないでくれるのか」と訴えられました。そこで初めて「父が築いてきた人との信頼関係は財産なのだ」と気づき、それを捨ててしまっていいのかと悩み……家族会議の結果、私が市議会選挙に出ることになりました。幸いにも当選し、市議会議員を4年務めましたが、当時は前市長と議会がギクシャクしていた時期でした。さまざまな予算が通らず、百条委員会が開かれ、激しい議会活動が続きましたが、私にとっては「行政はこうやって動いていくものなのか」と分かり、勉強になりました。

トップダウン型の市政は時代にそぐわない面があり、だんだんと「このままでは何も変わらない」「市民の声を届けられない」という思いが強くなりました。そこで、来期も市議会議員に立候補するよりも、「一か八かで市長選に出て、とにかく市政を変えたい」と思い、立候補しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

市長になったばかりで、苦労ということについてまだ客観的にみることができていません。市長になる前の話になりますが、私はもともと政治家志望ではなく、新卒時は地元岡山県の放送局に就職しています。その後、母の介護のため退職、その母も亡くなり、時同じくして結婚、2人の子どもを育てました。嫁ぎ先の舅が若年性認知症になり子育てと同時に介護もしました。今でいうダブルケアですが、当時は「施設に預けるのは可哀想」という風潮があり、10年間ほぼ在宅で介護し看取りました。その後に離婚し、家庭科の非常勤講師として働きながら、父の跡を継いで市議会議員になりました。

こうした経歴から、今まで女性が性別的な役割の中で担ってきた介護や子育てについて、行政でしっかりサポートしたいと考えています。ただ、有権者からは「離婚しているような女に市民の面倒が見られるのか」と言われたり、年配男性から「手もにぎってくれないのか」と握手を求められる「票ハラスメント」を受けたり、嫌な経験もありました。私が男性候補者だったら、これらのことはなかったと思います。しかし、地方都市の笠岡市にはまだこうした古い価値観が残っているのだと身をもって体験しました。市長選では「笠岡に新しい風を吹かせます」と宣言して当選したので、古い価値観や慣習を一新していきたいと思います。

Evidence 取り組み実績

力を入れて進めているのが臭気対策です。笠岡大干拓地では農畜産業が盛んなため、匂いが問題となっていました。今までは対策を畜産業者に任せていましたが、環境問題として積極的に解決しなければという思いから、庁内に臭気対策チームを設置しました。事業者と共に解決に向け様々な取り組みを進めるためのロードマップができたところです。事業者主導の牛のふん尿を使ったバイオガス発電施設も稼働しはじめ、循環型社会の実現に事業者と共にがんばっています。その他、全市民の交通手段の確保、放課後の児童クラブの充実にも取り組んでいます。まずは市民に「笠岡市に住んで良かった」と思ってもらえるよう、これからも対話、調和、連携を大事にしながら施策を進めていきます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

今は、多様性の時代と言われています。多様性を認める時代だからこそ、いかなる環境でも自分の人生は自分で決めるという権利を、自分が持っているということを自覚すること、そして、自己実現を目指し、そこに向かって努力することが大事です。

男性、女性に限らず、誰しもが「自己決定能力」を持っています。「私の人生は私が決める」「自分で人生を選べるんだ」と強い意志を持って自らの中に落とし込めれば、もっともっと多くの女性が活躍できると思っています。私は市長として、その土台づくりに努めていきたいと思っています。

⬅自治体ホームページはこちら

若い世代の声を大事に拾いあげ
フレッシュな区政に変えていく

24

東京都
豊島区長

高際 みゆき

TAKAGIWA Miyuki

昭和40年7月6日生まれ
昭和63年4月 サントリー株式会社入社
平成7年4月 東京都入庁
令和2年4月 豊島区副区長
令和5年4月 豊島区長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

2023年4月に豊島区長選挙に出馬し当選しましたが、もともと政治家になるつもりはありませんでした。

大学を卒業後、サントリー株式会社に入社し、同期の男性社員に負けないつもりでキャリアを積んでいました。ただ、私は幼い頃からおばあちゃん子で、高齢者福祉に関心がありました。30歳を迎える頃に、このまま現在の仕事を続けるか迷っていたところ、ちょうど東京都庁の経験者採用が始まったため、思い切って転職することにしました。

そして、都庁に25年間勤めたところで、全く予想外に豊島区の副区長に就くことになりました。任期後は都庁に戻る予定でしたが、長年、豊島区長を務められていた方がご病気になり、突然「私の跡を継いで区長選に出てほしい」と言われたのです。行政職を務め上げるつもりだったので、初めは何度もお断りしましたが、最後は腹を決め、区長選に挑戦することにしました。

区長としての仕事は、本当にやりがいがあって、面白いなと思いながら日々の業務に励んでいます。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

豊島区長として初めての女性区長になりますが、女性がトップに立つことは、むしろメリットが多いと感じています。

女性は男性と比べて「生活者目線」があることに加えて、上下関係に囚われずにフラットなコミュニケーションがとれて、自分の意見をはっきりと持ち、異論も言えます。

私が区長になる前まで、特別区の女性区長は23人中3人だけでしたが、今では7人になりました。人口は男女半々ですのでそれでも少ないですが、それまで男性メインだった区長会で、5人以上女性がいるというのは、全体の雰囲気を変える力があると感じています。

区長になってまず初めに着手したのが「職員の意識改革」です。当選した翌日、管理職と係長を集めた訓示で強調したのは、「区民の声を徹底的に聴こう」ということ。これまでなかなか区政に届きにくかった、子ども・若者・女性の声を大事にしたいという想いから、「子どもレター」や、生きづらさを抱える若年女性を支援する「すずらんスマイルプロジェクト」などの取り組みを進めています。

前任の区長は男性で、長く任期を務められた方でした。トップが男性から女性に変わり、世代も若返ったこともあり、女性区民の方から、女性の視点でどんどん区政を変えていってほしいという声をいただくことがよくあります。組織としても風通しが良くなって、いろんな声がトップに届きやすくなっていると感じています。

Evidence 取り組み実績

- 「すずらんスマイルプロジェクト」:「つらい」「居場所がない」など、生きづらさを抱える若年女性を支援につなげるためのプロジェクト。当時副区長だった私をリーダーに、女性管理職10名で開始し、今では若手職員も含め75人で全庁横断的に活動しています。民間支援団体や企業、大学生などとも連携し、自治体初となる生理用品の無償配布や、当事者目線の支援情報の発信を進めています。
- 「子どもレター」: 職員が作成したキャラクター封筒で、子どもが楽しみながら意見を区長に直接届けられるようにしました。これまでに600通以上の手紙が届き、できることはすぐに実現・改善を行っています。手紙は区長の私がサインし、子どもたちに返送されています。

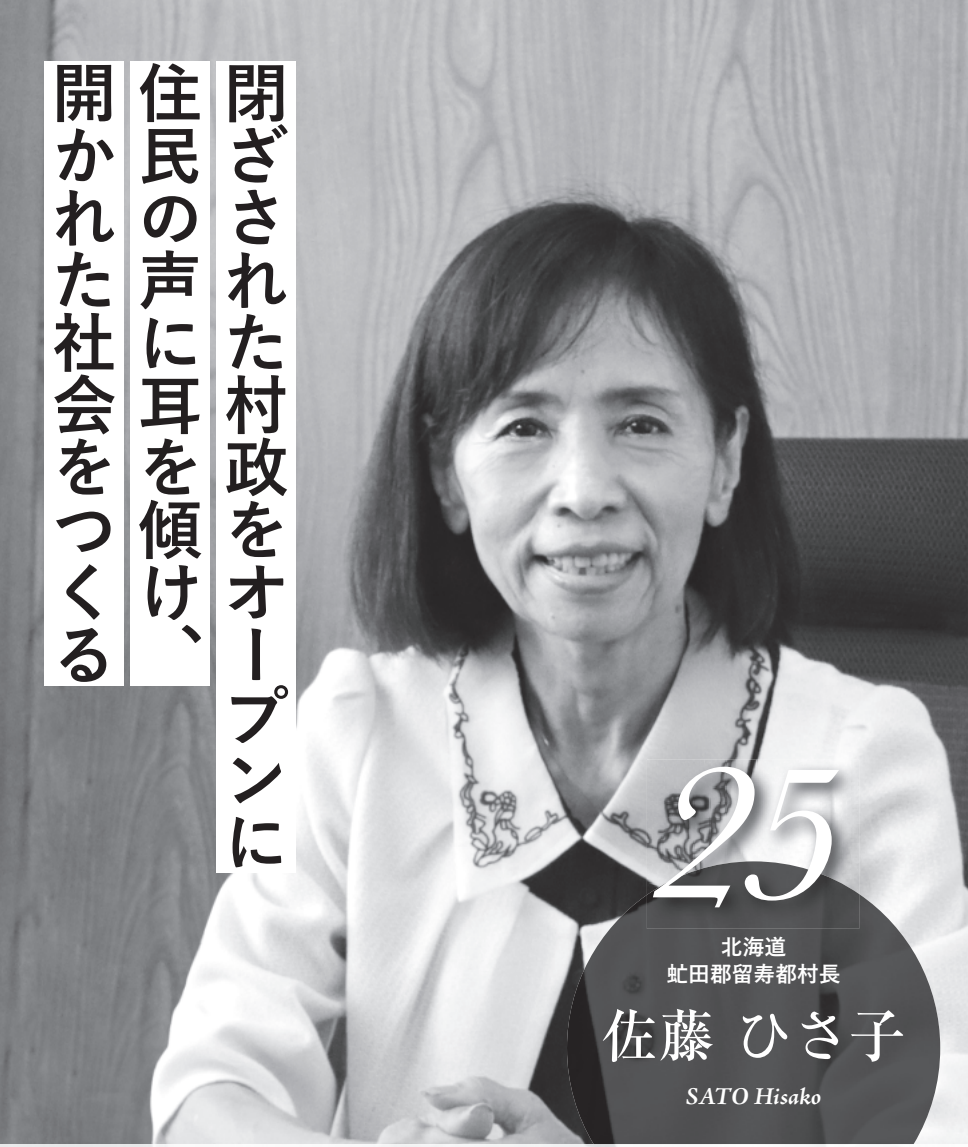
Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

豊島区の女性管理職の割合は23.6%で、全国的には上位に入る高さですが、まだまだ少ない。管理職の半分が女性になれば見えるものが随分と変わってくると思うので、女性管理職の増加を目指しています。そのためにも、若いうちから様々な職場で経験を積んで自信を持って手を挙げることができる環境、そして、出産や子育て、介護等を抱えていても活躍できる環境を整えていきたいと考えています。女性は人から薦められないと管理職に手を挙げない人が多いように思います。豊島区の女性管理職を増やすこと、女性が十分に力を発揮できる職場をつくっていくことで、これからリーダーを目指す全国の女性の皆さんの背中を押すことができたらと願っています。

⬅自治体ホームページはこちら

閉ざされた村政をオープンに住民の声に耳を傾け、開かれた社会をつくる



25

北海道
虻田郡留寿都村長

佐藤 ひさ子

SATO Hisako

1959年1月6日 北海道留寿都村生まれ
1978年3月 留寿都高等学校卒業
1978年4月～2021年3月 留寿都村役場
2019年4月～2021年1月 道南北自運輸有限会社
2019年5月～2021年2月 留寿都村議会議員
2021年4月～ 留寿都村長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は留寿都村役場職員を退職後、村議会議員となりました。そして、行政のありようを考えるようになって初めて、住民が受け取る役所関連の情報がとても少ないことに気づきました。しかも、当時の村のホームページは情報量が少ない上に、閲覧して楽しいものでもなく、住民は行政に興味を持てる状況にはなかったと思います。また、村議会議員となったことで、村の情報が住民にオープンでないこと、村議会でさえも限られた情報だけで審議を行うしかないことを知りました。

そのような状況の中、村有地内に風力発電事業を誘致するという噂が村内で広まり、住民の中から反対運動が起こりました。しかし時すでに遅く、その誘致計画は中止できないところまで進んでいたのです。この件を受け、村民だけでなく事前に協議や報告を受けていなかった議会も紛糾し、行政運営に支障をきたす場面がありました。

村は、重要な案件は村民にオープンにする必要があります。また、情報提供の広報と住民の声を聞く広聴にしっかりと取り組むべきです。

私は、住民の行政に対するわだかまりを解いて共存できる村をつくるべく、立候補を決意し、留寿都村長に就任しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

私は4年前に村長に就任しましたが、その選挙は村を二分するものでした。そのため、選挙後に一部の住民とは「わだかまり」を感じるようになりました。これは、相手候補の支持者だった住民を把握していることや、就任後に接した際の表情や態度から感じ取れるものです。小さな自治体では、こうした状況は珍しくないかもしれません。

選挙は地域社会全体の利益を考えて行われるべきであり、住民同士が協力してより良い地域をつくるための機会でもあります。そのため、選挙の結果が住民同士の関係に影響を与えるのは本来望ましいことではありませんが、現実にはそうなってしまうことがあります。選挙によって生じた「しこり」や「溝」を解消することがリーダーの資質の一つだと思いますが、私はまだそれができていません。

村民とお互いに顔の見える親しい関係を築き、対話による村づくりを進めるためにも、もう少し時間をかけて、「わだかまり」を解消し、住民同士がフランクに通じ合える村づくりを目指したいと思います。

留寿都村は小さな農村ゆえに、女性の役割は後方支援になりがちでした。そこで村では、教育委員や村が定める各種委員に女性を積極的に登用するようにしました。村営住宅入居者選考委員に、商工会女性部から推薦いただいた女性を登用したところ、多角的な視点で議論ができ、今まで以上に公平性が保たれているように感じます。また、毎年1回実施している女性に限定した「村政懇談会」では、子育てや教育、高齢者対策等のソフト面で行政が見落としがちな事案の提言をいただいています。

私は、女性の声が行政に反映され、住みやすさと暮らしやすさに繋がるこのような取り組みを、今後も継続していきたいと考えています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

その地域にふさわしいことは何かを考え、地道に活動を継続していくことが重要です。同じ志を持つ仲間（男女問わず）がいれば、たとえ長い道のりであっても乗り越えていけるでしょう。また、それぞれの取り組みに対し、自分ばかり前に出るのではなく、協力し合いながら進めていくことも大切です。そうすれば、仲間とともに成長していけると私は思います。

⬅自治体ホームページはこちら

「未来志向型の市政運営」へ 市民参加のまちづくりを推進

26

栃木県
那須烏山市長

川俣 純子

KAWAMATA Junko

1960年10月20日 栃木県那須烏山市生まれ
1985年3月 日本歯科大学歯学部卒業
1985年4月 日本歯科大学病院小児歯科教室勤務
1988年 川俣歯科医院勤務
2010年5月 那須烏山市議会議員 1期目当選
2014年5月 那須烏山市議会議員 2期目当選
2017年11月 那須烏山市長 当選

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は歯科医師として働いていた平成19年頃に、ある勉強会に参加したことが政治家を志すきっかけとなりました。もともと市政に興味があったことから、常に市の将来を思い、必要なことは何かと考え、研鑽を重ねていました。そんな私を当時の議員や市民の方達が後押ししてくれました。平成22年に市議会議員選挙に立候補し当選しました。2期7年間の議員活動中、地元市民と多くの対話の機会をいただきました。対話を重ねるほどに、たくさんの気づきをいただきました。私を育てくれた地元のために、覚悟を持って市政に臨む覚悟ができました。活動を続けるほどに、那須烏山市をより住みやすいまちにしていきたい、その舵取りを担わせていただきたい、と想いが募り、私は首長を目指し、平成29年から那須烏山市長に就任しました。

当市は、少子高齢化や厳しい財政状況など多くの課題が山積しております。そのような状況の中、多くの市民は、従来までの「前例踏襲型の市政運営」から一歩踏み出し、10年後・20年後の将来を見据えた「未来志向型の市政運営」への転換を待ち望んでおられます。

市民の期待に応えるため、「まちづくりの主役は市民」との基本に立ち、市民一人ひとりの力と、貴重な地域資源を活かし切る市政運営を念頭に、市民と行政が共に知恵を出し合い、全ての市民が将来にわたり住み続けたいと思う「持続可能なまち」の実現に向け、一丸となって取り組んでまいります。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

私は市長選挙の時に、議員をはじめ多くの市民の方からご支持いただき、県内初となる女性市長となりました。一部男性市民から「女性は応援しない」と言われたことはかすかに記憶に残っておりますが、「女性だから」ということでの苦労はありませんでした。

また、県内初の女性市長になり、プレッシャーはなかったかと聞かれることもありますが、「女性だからどうだ」という固定観念はありませんので、特にプレッシャーを感じることもありません。

一方で、「女性だから」話しやすいということがあるのかもしれませんが、カウンセラーから職員の雰囲気が明るくなったと評価いただいています。また、市民の方々から、職員のあいさつが良くなったとも言われます。私自身、市の行事や地域のイベントで気軽に声をかけていただいております。今後も市民の皆様の声に耳を傾けながら市政運営を担って参りたいと思います。

Evidence 取り組み実績

当市では、「那須烏山市次世代育成支援・女性活躍特定事業主行動計画　NA-KA-MAプラン」を策定し、女性職員の採用割合50％維持や管理職に占める女性職員割合30％の達成について、積極的に取り組んでいるほか、政策・方針の決定の場における女性の参画の拡大に向け、市が率先して各審議会や委員会等における女性委員の選任にも取り組んでいます。

また、市内企業に対して「ワーク・ライフ・バランス等に取り組む市内企業の認定制度」を令和4年度から実施しています。この制度は、働きやすい環境づくり、育児・介護と仕事の両立支援、女性活躍支援、地域活動支援の4分野30項目のうち、15項目以上に該当する企業を市が認定するものです。現在（2025.1月）、市内企業9社を認定しています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

働き方改革の推進などにより、以前と比較すると女性リーダーの数は増えてきています。しかし、海外と比較するとまだまだ少ないのが現状です。身近に活躍する女性リーダーがいないと、自分がリーダーとなる将来像も描きにくいものです。ぜひ、次世代の女性リーダーには、女性リーダーを目指している方や働く女性たちのロールモデルとなっていただき、女性活躍をさらに推進していただきたいと思います。

働くことを希望する女性一人ひとりがその個性と能力を十分に発揮できる社会の実現に向けて、一緒に頑張っていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

大好きな酒田のまちを「日本一」女性が働きやすいまちに

27

山形県
酒田市長

矢口 明子

YAGUCHI Akiko

1966年12月14日生まれ
1990年3月 慶應義塾大学経済学部卒業
1990年4月 北海道東北開発公庫勤務
1991年4月 神奈川県庁入庁
1999年2月 ニュージーランド・ヴィクトリア大学行政大学院修了
2013年4月 東北公益文科大学教授
2016年2月12日 酒田市副市長就任
2023年4月 東北公益文科大学教授
2023年9月6日 酒田市長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

大学卒業後の20代は首都圏で地方公務員として働いていましたが、行政のあり方に疑問を感じ29歳で退職、ニュージーランドの行政大学院に入学しました。

修了後、山形県酒田市の新設大学に教員として採用されたことがきっかけで酒田市に移住しました。首都圏で満員電車にゆられる暮らしをしていたので酒田市の美しい自然と澄んだ空気に感動したことを今でも覚えています。首都圏にいた時から地方都市にあこがれていた私は、酒田を大好きであることにかけては誰にも負けない気持ちがあります。

約15年間行政学を教えていたところ、2015年に新たに当選した酒田市長から声をかけられ、約7年間副市長を務めました。当該市長が退任の意向を固めた際、誰が次の市長候補になるかが話題になりました。酒田市では市長選挙の度に保守系の候補者が2人出て経済界を二分しており、市内経済が疲弊してきた経緯がありました。今回こそはそれを避けたいとする経済界や政治家の意向もあり、副市長を約7年間務めた私が推されました。経済界や政治家の方々が政治的立場を超えて酒田のためにまとまろうとしている時に、私も私の役割を果たすべきだと考え、立候補を決意しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

女性首長として苦労したことは、これまで特にありません。選挙の時も、「女性が選挙に出るなんて」という声はかけられず、むしろ「これからは女性の方がよい」と言われることが多く、時代は変わったと感じました。

当選後も、女性首長には政治家も市民も厳しい言葉をかけづらいようです。また、「女性市長になって市役所の対応が改善された」と完全なアンコンシャス・バイアスで語られることもあり、今のところ女性首長で得をしていることの方が多く感じます。もちろんそれは前ページで述べたような経緯で無投票で選ばれたという事実も大きいと思います。市長就任から1年半余りが過ぎ、今後は厳しく首長としての実績が問われてくると思います。

仕事を進めるにあたって女性として苦労したことはありませんが、仕事と家庭の両立に悩むことは、同年代の男性には少ない、既婚女性に偏った悩みではないかと感じています。家庭との両立に悩まされることは、既婚女性の首長の苦労する部分だと思います。

Evidence 取り組み実績

副市長時代の2017年10月1日に「日本一女性が働きやすいまち」を目指す宣言を行い、①職場の改革（＝経営者の意識改革）、②家庭との両立支援（＝保育・介護等制度の充実と家庭内の意識改革）、③女性のチャレンジ支援（＝女性自身が自信を持つ）、を進めてきました。その結果、市内に本社のあるえるぼし認定企業の数は9社（2025年1月現在）となり、同規模（人口10万人程度）の自治体では全国トップクラスです。

「日本一女性が働きやすいまち」とは、女性が仕事と家庭の両立をこれまで以上に「頑張る」ことではなく、女性が性別にとらわれず自然体で活躍できるよう企業経営者と家庭の意識改革を進めることである、ということを理解してもらうのが難しいです。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

リーダーというと、ぐいぐい引っ張る性格の人でないとできないイメージがあるかもしれませんが、決してそうではないと感じています。どのような性格の持ち主でもリーダーになることはできます。重要なのは、自分の強みを生かしたリーダーになることだと思います。実際、私には自分を偽って強いリーダーを演じることなどできませんし、自分の強みを生かして仕事をしていくことしかできません。

私が最も参考にした本は、ギンカ・トーゲル著『女性が管理職になったら読む本』（日本経済新聞出版社、2016年）、ジル・チャン著『静かな人の戦略書』（ダイヤモンド社、2022年）です。自分にリーダーシップがないと感じている女性はぜひ読んでみてください。

⬅自治体ホームページはこちら

市民が主役「共創のまちづくり」を実現し、子どもたちに誇れる座間市を残す

28

神奈川県
座間市長

佐藤 弥斗

SATO Mito

1970年2月1日 東京生まれ
法政大学文学部中退
座間市議会議員（4期（15年10ヵ月在職））
座間市長（1期）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

政治に関心を持ち始めたのは、結婚して3人の子どもを産み育てていた1998年。住んでいる地域に火力発電所の建設が計画され、地域住民の方と反対運動を行い、最終的に白紙撤回を勝ち取った経験からです。

その後、4人目の子どもを産み、夫が市議会議員にならせていただいたのですが、2期目の選挙直前に末期ガンと宣告されたことから、夫の意志を引き継ぎ、代わりに立候補することを決意しました。

それから4期にわたり市議会議員として、夫と共に目指した「皆のまちは皆で創る。市民が主役」という理念の実現のために活動してきました。例えば、市民の多様なニーズに応えるために市民活動団体を立ち上げ、行政職員と一緒に取り組める様に橋渡しを行ってきました。

こういった活動を続ける中で、市民と共に創るまちづくりを全市的に広げ、企業の社会貢献活動も含めて市政に生かして「共創のまちづくり」を実現したい、子どもたちに誇れる座間市を残していきたいとの思いが募るようになりました。

また、子育てや議員活動をする中で、発達障がいや不登校の増加、ひとり親家庭の増加、子どもの貧困といった課題にも直面し、子どもが社会に出た時に、生きていける力を身に着ける義務教育に変えていかなくてはならないことを痛感しました。

「共創のまちづくり」の実現、座間市から義務教育を変えていきたい、子どもたちが誇れる座間市を残していきたいという強い思いから、市長選挙に出馬することを決意しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

子育て中だったので、家事・育児と議員活動との両立には苦労しましたが、子ども達には私自身の生き方を見せていくという気持ちで日々全力で過ごしてきました。その姿を見て育ったためか、今では、4人の子ども達はそれぞれが進学、就職、結婚、子どもを授かったりと、一人ひとりが自身の人生を力強く歩んでいます。

また、首長になってからは「これはきっと女性だからこういった扱いを受けているんだろうな。私が男性だったらこういった扱いは受けないのだろうな。」と思うことはいくつかあります。しかし、いつか理解を得られると信じて、どんなに嫌な思いをしても全て前向きに捉えて、明るく爽やかに受け答えをしていくことを心掛けています。

最近ですと、ここ2年で孫が5人生まれているので、夜に孫の子守りをしに子どもの家に通ったり、同居している夫の父母が介護を必要とする年齢になっているので、それらの時間を工面するのが一苦労です。その時々によって苦労は様々ありますが、今回も前向きに子ども達や夫の妹などと協力しながら、乗り越えています。

Evidence 取り組み実績

・力を入れている取り組み：保育所等の待機児童対策、子育て支援策の拡充、学校の施設整備の推進、地域経済の活性化、DX推進、情報発信の拡充、共創のまちづくり
・実績：小児医療費18歳までの無償化、児童発達支援センター開設、保育園おむつのサブスクリプションサービス開始、パートナーシップ制度実施、ふるさと納税返礼品事業開始、プレミアム商品券事業2回実施、物価高騰対策として水道料金20％減免、市ＬＩＮＥ公式アカウントの開設で80種類以上の手続きと10万人以上の友達登録、ゼロカーボンシティ宣言、オール・リソース宣言、ＤＸ推進計画策定、第5次座間市総合計画（ざま未来プラン）策定、二次救急医療機関のコメディカル体制の強化

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

もしあなたが何かを変えていかなくてはならない、新たに取り組みを進めていかなくてはならないと使命を感じており、それが社会のためになる事でしたら、その夢を言葉に出して行動し続けてください。きっと同じ志を持つ方々が集まり、変えていく、進めていく道が必ず開けてきます。そのことを信じ続け、行動する中で起きる困難や大きな障壁は、全て自身を成長させるために起きていると前向きに捉え、乗り越えていく精神が大切だと思います。大きな社会変革を遂げた先人達も様々な困難を乗り越えて、その夢を実現させています。それを心において、頑張っている自分を誉め、自分を励まし、共に乗り越えていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

色々迷わずにまずは行動で「市民参加のまちづくり」を目指す

29

群馬県
前橋市長

小川 晶

OGAWA Akira

1982年 千葉県匝瑳市生まれ
2006年3月 中央大学法学部を卒業し、前橋地方裁判所で司法修習
2007年 弁護士として前橋市内の法律事務所に勤務
2011年4月 群馬県議会議員に初当選し、4期就任
2024年2月 前橋市長に就任（女性初）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

子どもの頃の夢は教師でしたが、中学3年生の時に神戸連続児童殺傷事件を見て、学校の中だけでは救えない子どもがいると感じ、弁護士を目指しました。そのため弁護士になってからも、教育や子どもに関する問題に関心を持って取り組んできました。

政治家を目指す転機となったのは子どもの貧困問題です。この問題に取り組む中で、行政にもっとできることがあるのではないかと考えるようになり、弁護士会を通じて群馬県に給付型奨学金制度やソーシャルワーカーの設置を提案しましたが、外部からの働きかけでは限界があることがわかりました。そんな折、議会から働きかける方法を知り、県議会議員に立候補しました。

県議会議員として4期13年務めましたが、一議員として提案することはできても、大きな方針を決定して動かすことは難しいと感じていました。また、群馬県全体のことに取り組むため、自分が住んでいる前橋市に関わることが少ないことにもどかしさも感じていました。そんな思いを抱いていた時期と、前橋市長選の時期が重なったことは運命だったのかもしれません。前橋市民の皆さんが市政を変えたいという気持ちが高まっているタイミングでもあり、市長選にチャレンジしたいと思いました。

周囲からは反対されましたが「やらないで後悔するより、チャレンジしたい」という自分の性格と、前橋市の皆さんに報いたいという強い気持ちがあったため、立候補を決意しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

初めて選挙を経験した県議選では、選挙の知識がほとんどなく、県外出身で友人が少ないこともあり大変苦労しました。選挙期間前の準備が重要だということも、立候補を表明してから知りました。

県議を経験した後、市長選に臨みました。一般的に現職有利と言われる中、現職市長との一騎打ちだったので、出馬の意思を打ち明けたときには周囲に止められました。「絶対に勝てないからやめた方がいい」とまで言われました。しかし、私には「まちづくりをこうしていきたい」という確固たるビジョンがあったので、出馬を取り下げようとは思いませんでした。ありがたいことに、多くの市民が一緒に変えようと言ってくださったので、決意は揺らぎませんでした。

市長になった当初は、2600人余の職員がいる市役所で若い女性市長として受け入れてもらえるか心配でしたが、職員の皆さんは前向きに受け入れてくれました。また、女性が市長になったことで、地域で活躍する女性たちが発言しやすい環境になったと思いますし、若い世代の方が気軽に話しかけてくれるので、市長になって良かったと実感しています。

実際に市長になって、職責の重さを最も感じるのは危機管理の分野です。大雨注意報が発表されると、土砂災害や河川氾濫が起きるのではないかと、緊張感が高まります。危機管理は最重要項目で、職員と協力し合える体制が取れていることについては、市民の皆さんに広く伝えていきたいです。

Evidence 取り組み実績

市民目線の市政運営を実現するため、2024年6月から定期的にタウンミーティングを開催しています。テーマや参加対象者を変えながら参加者を募り開催していますが、市民の皆さんと直接意見交換できるタウンミーティングは、前橋市の未来について考える意味からも貴重な場となっています。

前橋市は今、官民連携のまちづくりとデジタル化の取り組みで注目されています。

その1つがマイナンバーカードとスマートフォンを使った前橋市初の情報連携の仕組み（めぶくID）です。めぶくIDは前橋市以外の自治体でも利用が始まっており、前橋市での普及を進めることで全国展開も見据えています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

世の中は潜在的ではありますが、女性リーダーの活躍を求めています。

〝ガラスの天井〟や〝見えない壁〟があると言われることが多く、躊躇することもあるかもしれません。しかし、チャレンジしてみると応援してくれる人がたくさんいますし、目指していたポジションに就いてみると、意外となんとかなるものです。

不安や心配もあるかもしれませんが、深く考えすぎず挑戦してみてください。企業などで管理職に昇進する際も同様だと思います。私もほとんど知識がないままチャレンジしましたが、なんとかなっています。

⬅自治体ホームページはこちら

生き生きと暮らしていける地域づくりを推進

30

高知県
吾川郡いの町長

池田 牧子

IKEDA Makiko

1958年5月5日 高知県いの町（旧伊野町）生まれ
1977年3月 土佐高等学校卒業
1981年3月 武庫川女子大学卒業
1993年4月 伊野町役場採用
2003年4月 総務課長補佐兼財政係長
2010年4月 特別養護老人ホーム偕楽荘所長
2012年3月 退職
2016年10月31日～ いの町長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私はいの町職員として働いていましたが、係長となった頃、前々町長（平成10年~14年）から、私を含め数名の中堅の職員に対して、改正男女雇用機会均等法や職員の能力開発に係る取り組み等を提案、実行するよう命ぜられました。職員能力開発委員会と称し、担当の職務をこなしながらも、各々時間をやりくりして前向きに活動していました。委員会では、手作りの接遇マニュアルを職員全員に配布したり、役場に総合案内の窓口をつくり職員が交代で町民案内をしました。特に総合窓口は、職員が他の課の仕事を学ぶ機会になりますし、接遇向上にも繋がります。実際に、住民の方からも接遇が良くなったといわれるようになりました。その他にも様々な研修を企画して、職員同士で能力を高め合っていました。

しかし、町長が変わると、考え方の違いからこれらの取り組みが中止となりました。また、これまで職員が考え、施策を提案してきたことも聞き入れてもらえず、閉塞感や戸惑いから職員のモチベーションは低下していきました。特に、委員会で力を入れていた女性活躍に関しては、取り組みをやめたことにより、進まず、周りの市町村から取り残されていると感じていました。

このままでは、いの町の政策が遅れを取ってしまうという思いを持っていたところ、役場職員の先輩方、元町議会議員の方々から町長選に出馬してほしいという話があり、決意した次第です。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

女性ということだけではないと思いますが、就任した当時は、前町長派の議員が多数であり、副町長の人事案件も否決される始末でした。特に、同じ女性から酷い態度を取られたり、言葉を浴びせられた時には、とてもショックでした。

また、就任前に、「池田が町長になったら要望活動などに来ない」など、真実でないことを国の機関や関係市町村職員に流され、就任後の要望活動時、冷たい態度を取られたこともありました。支援してくださった方などが、それらを否定し、私自身も誠実な対応、意欲ある要望活動などを見せることで、誤解していたと謝罪もしていただきました。

私の就任当時は、町長に限定しますが、女性町長は全国に7名しかいませんでした。そんな中、「全国女性町長サミット」の案内が来て、先輩女性町長からいろいろなお話が聞けるいい機会だと思い、喜んで参加しました。皆様からは、様々なご苦労があったことを伺いました。例えば、女性町長となったため、いろいろな組織の男性理事が、一斉に辞められたこと。町長の出す議案は全部否決すると言われたことなど。しかし、そんなことに負けることなく町長を続けてこられた先輩女性町長の皆様の話を聞き、私だけの悩みではないと気付くことができました。頑張ってこられた先輩方がいらっしゃることに勇気をいただき、今があります。

住み慣れたところで生き生きと生活を全うできる地域づくりを進めています。地域と行政が協力し、ゼロカーボンシティ宣言や農福連携事業、産後ケア事業などを実施しております。

また、就任以来子育て支援には注力しており、ファミリーサポートセンター、子育て包括支援センター等の設置や病後児保育、高校生までの医療費無料化、奨学金返還支援事業等も実施しています。令和7年度には、子ども家庭センターの開設により、一層母子保健・児童福祉の機能連携を深め、切れ目なく対応していきます。

さらに、立地適正化計画を策定し、官民連携まちなか再生事業、オーバーツーリズム対策、流域治水プロジェクト2.0などを推進しています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

私が町長に就任してからも、女性首長の数はスローではありますが、増加しています。

男女の役割なんて、社会が都合良くつくったものです。心に偏りを持たず、あるべき組織の姿やなりたい自分を示した時、同意し、応援してくれる仲間が必ずいます。

⬅自治体ホームページはこちら

性別によらず意欲ある人が活躍できる社会を目指す

31

愛知県
長久手市長

佐藤 有美

SATO Yumi

1978年1月24日 愛知県名古屋市出身
2000年3月 南山大学文学部卒業
2000年4月 損害保険会社勤務
2005年3月 愛知万博日本館勤務
2005年10月 保険代理店勤務
2011年5月 長久手町議会議員（2012年市制施行）
2015年5月 長久手市議会議員（2期目）
2019年5月 長久手市議会議員（3期目）
2023年5月 長久手市議会議員（4期目）
2023年9月 長久手市長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は、市長になる前に市議会議員を4期務めましたが、議員になったきっかけは、一人の女性議員との出会いです。現在大学4年生の息子が小学1年生のときに文部科学省の補助金で始まった「放課後子ども教室」を利用していた時のことです。他の保護者とともに改善してほしいことを市役所（当時は町役場）に伝える活動を通して、一人の女性議員と出会いました。私たちの要望をその女性議員が議会で取り上げた際に議会を傍聴し、日々の暮らしに密着した課題を取り上げる議員の仕事は面白いと興味を持ちました。その方が「一人の住民として声を上げてもなかなか変わらないことが、議会で取り上げてなぜ必要なのかを説明すれば、住民にとって本当に必要なことは変わっていく」との言葉をかけてくれ、議員選挙にチャレンジすることを決意しました。

議員として年4回の議会で発言したことで、実現できた施策もたくさんあります。私が議員になるまでは小さい子どもを持つ議員がほとんどおらず、問題が取り上げられていなかったこともあり、特に1期目のときは私が取り上げた子育て施策は次々と実現していきました。しかし、変化の早いこの時代にスピード感を持って自分の訴えてきた施策を実現していくためには、予算編成ができる市長の立場になる必要があると考え、市長選挙にチャレンジすることを決めました。また、長年議員として市政に関わってきた経験を活かし、市の課題、問題点を解決することで、まちをさらに良くしたいと考えました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

首長として苦労したエピソードはいくつか挙げることができますが、女性首長だから苦労したというエピソードは特に思い浮かびません。私は愛知県初の女性首長ですが、県下の首長の皆さんは私をひとりの首長として受け入れ、性別の差を感じたことはありませんでした。

私は議員を4期務めてから市長になっていますが、私が議員2期目から4期目のときは、市議会に占める女性議員の割合が約4割というなかで過ごしてきたので、議員だった頃も女性だから仕事がやりにくいと感じたことはありませんでした。現在、市議会議長も女性、長久手市を含む愛知7区の衆議院議員も女性となっており、有権者が候補者を性別で選んでいないことは、長久手市で女性の政治参画が進んでいる理由だと思います。全国的に見れば、このような環境はめずらしいのかもしれません。

私が議員になった当初2歳だった娘は高校生になりました。振り返れば、仕事と子育ての両立は大変なときもありましたが、市政は市民の日々の暮らしそのものを取り上げるので、私が苦労したことも、良いと感じたことも、市長として暮らしやすいまちをつくるために活かしていけるのだと思います。

Evidence 取り組み実績

市民からの要望が多く、私の公約にも掲げていた「18歳までの子ども医療費無償化」や「帯状疱疹ワクチン接種費用の助成」を実現しました。また、子育て世代が多く住むまちであることから、仕事と子育てが両立できるよう「保育園、放課後児童クラブの待機児童ゼロ」も実現しました。そして、子どもたちが過ごす教育環境の改善のため「学校の非常勤講師の時給引き上げ」を行いました。

現在は、「長久手市こども条例」の制定に向けた取り組みに力を入れています。公募で集まったこども会議のこども会議委員を中心にした意見交換を通じて、令和8年度の条例制定に向けて取り組んでいます。高齢者の移動手段としてのデマンド型交通の実証実験も行っています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

私は、性別関係なく意欲のある人が活躍できる社会を目指しています。私が愛知県初の女性首長に就任してから約1年半の間に愛知県下にさらに2人の女性市長が誕生しました。愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の東海4県では、96市のうち女性市長は5人とまだまだ少数派です。世の中の半分は女性ですから、今後は市長や組織のリーダーにもっと女性が増えるべきだと考えています。

現在、私を含めて女性が社会の第一線で活躍ができるのは、先人の方々の積み上げた努力があってこそです。さらに良い形で次世代へ繋げるよう、まずは私が愛知県初の女性首長として市長の役割をしっかりと果たし、社会の認識を変えていきます。

⬅自治体ホームページはこちら

町民の皆様に支えられ、自分で定めた道を切り拓く

32

山形県
飽海郡遊佐町長

松永 裕美

MATSUNAGA Yumi

1966年7月 遊佐町生まれ
1987年3月 青山学院女子短期大学国文学科卒業
1987年4月 日本通運株式会社東京国際輸送支店入社
1988年7月 松下電器産業株式会社入社（1993年12月退社）
2000年9月 阿部京染店経営
2015年6月 遊佐町議会議員就任（2024年2月辞職）
2024年3月 遊佐町長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

大きなターニングポイントとなったのが48歳の時、町議会議員選挙への出馬でした。2人の子どもが大学生と高校生の頃です。当時は、「出たい人より出したい人」と、地方議員の素養も後ろ立ても全くない私のもとに毎日、出馬を薦める町民の方が次々に訪ねて下さいました。町を住みやすくするお手伝いができるのならば…と決意したのが選挙告示前、1ヶ月をきっている時でした。選挙カーやポスターの手配、選挙事務所の設営からボランティアスタッフのスケジュール管理等、一日24時間では足りない日々を乗り越え、「意思ある所に道は通じる」という言葉の通り、ようやく一議席を得た時のあの素晴らしい感動は忘れることができません。そこには、町民の皆様との素敵なストーリーが数えきれないほどありましたが、大事な娘の大学受験の年に出馬を決めた故に「ママは、いつも自分優先で私の事なんてどうせどうでもいいんでしょ！！」と子どもに泣かれた辛い過去もあります。

議員3期目を迎えた時に、不幸にも先代の町長が急逝され、思いがけないタイミングでしたが、58歳で首長選挙に挑戦しました。町議選の時には悲しい思いをさせた娘もその間、大学を卒業し社会人となり、絶大なる応援者の一人として私を支えてくれました。人生の大きな決断を最後に決めるのは自分であり、選んだ先の道を歩くのも自分です。悩んだ結果が今をつくりあげていると日々、前向きにこの道を町民の皆様のために、まっすぐ前を見て進んでいこうと思っております。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

遊佐町は、標高2236メートルの秀峰・出羽富士ともよばれ登山家の皆様や町民の方々に愛され続けている鳥海山の麓町でそれまで、約70年もの長きにわたり大きな災害とは無縁な穏やかで安心に暮らせる町でありました。しかし、令和6年7月25日の大雨災害で自然の脅威を目の当たりにし現在は、痛めつけられた田畑や道路の復旧、床上床下浸水被害にあったご家庭へのサポートに、町をあげて全力で取り組んでいます。

災害当時、遊佐町は線状降水帯が町中を覆い緊急避難を発令した後、逃げ遅れてしまった保育園児を園から安全地帯に救出する必要がありました。その時は、対策本部にいた私達も現場にいた消防団の方々も無我夢中で「とにかく全町民の安全確保を！」を合言葉に全員で任務にあたりました。役場への問い合わせやSOSの電話もひっきりなしに鳴り続ける中、職員も消防団員の皆さんもお互いを信頼し合い、自分に与えられた「今できる事」を諦めずにまっとうしました。その結果、保育園児全員を無事に避難させることができました。

この災害の貴重な経験から、日頃の訓練の重要性や相互コミュニケーションの大切さもつくづく実感いたしました。人間一人の力は自然災害の前では無力かもしれませんが地方公共団体・遊佐町の底力を大雨災害で発揮できたことを誇りに思い、それを力に変えていきたいと考えております。

Evidence 取り組み実績

遊佐町においても山形県においても「初の女性町長」としての先入観は良くも悪くも任期中はついてまわります。ならば他の自治体とはどう違う取り組みをしていけるのかを常に視野に入れています。

子育て支援の分野では、月に一度の産後ケア訪問のオムツ個配見守り制度、高校受験時対策の町営無料塾の継続、さらに小中学生の給食費半年分無償化を実現しました。また町民の幸せと安心した暮らしを守るために、まずは役場職員同士が常に連携しスムーズにやり取りできる環境が必要です。そのきっかけとなるよう、朝の10時と午後の3時に「ティーブレイクタイム」を設けるなど、あたたかく居心地の良い職場環境づくりを目指しております。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

「自分」を大事にして、できたら慈しんであげてください。誰しも、決して願いや望みがすんなり叶ったことばかりではなく、うまくいかないことや人間関係で悩むことも多いと思います。そんなとき自分で自分を責めてばかりでは前に進めません。小さなことでも、自分を褒めてあげてください。褒めるという字は「衣」と書く部位があり、自分や人には見えなくとも「自信」を纏うような衣(ころも)を言葉で着せてあげて欲しいと思います。そして良く眠ることもお勧めします。

どんな苦境やピンチに立たされても、1つ良い点やささやかな希望を見つけて、よくやってきた自分を褒めて、ぐっすり眠りにつけば新しい別の朝が必ずやってきます。

⬅自治体ホームページはこちら

多角的な視点や考え方で可能性は大きく広がる

33

和歌山県
日高郡美浜町長

籔内 美和子

YABUUCHI Miwako

1962年8月29日 和歌山県生まれ
1981年3月 県立御坊商工高等学校商業科 卒業
1982年1月 美浜町役場 勤務
2012年4月 中央公民館長兼図書館長
2014年4月 住民課長
2018年4月 健康推進課長
2018年12月 美浜町役場 退職
2019年2月 美浜町長 当選

Turning Point 首長を目指したきっかけ

首長を目指したきっかけを語るとき、難病の娘が出産したことを思い出します。初孫が誕生した喜びとともに、妊婦の方々が抱える課題に直面し、改めて考えさせられました。妊娠中の健康管理や育児への不安、仕事と家庭の両立。これらの問題に対し、女性自身がより安心して向き合える環境をつくることが大切だと痛感しました。

また、長年役場職員として社会活動や地域貢献に携わる中で、多様性を生かせる仕組みが不足していることが問題だと感じたのです。政策決定の場において女性の視点がもっと反映されれば、地域住民の多様なニーズに応えられるきめ細やかな施策が可能になると考えるようになり、その実現に向け首長になる決意をしました。

女性として、妻として、母として、そして首長としての視点を持ちながら、地域の未来をより良いものにするため、住民一人ひとりに寄り添った施策を打ち出し取り組んでいます。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

長年役場職員として働いてきましたが、女性というだけで敬遠されることが多々ありました。町長を目指した時も、女性に何が出来る、今の事業が止まるのではないかとの批判や心配の声も頂きました。しかし、同時に、職員時代に接した多くの町民が「あの時お世話になった」と応援してくれました。一職員として従事してきただけで特別なことはしていませんが、私自身を見て評価し支えてくれる方がいる有難さが心に沁み、女性だからこそ出来るまちづくりをしたいとの思いを強くしたものです。

実際に町のトップになってみると、県下唯一の女性首長として男性首長の皆様が優しく受け入れ、気遣い支えてくれました。また、批判的だった方達にも言葉を重ね寄り添う努力を続けた結果、気付けば女性に何ができるといった声もなくなり、誠実に向き合い言葉を尽くせば性別など関係ない、男性であろうと女性であろうと自身の行動次第なのだと改めて思いました。

ただ、仕事を離れれば、私も主婦であり、家事や介護が待っています。重責を担う立場になり公務が優先となると、出来ない家事に対してのストレスがたまり、理想の家庭が遠のくばかり。自身の志の為に家族への負担が増してしまう罪悪感。ままならない情けなさに心が疲弊しても、介護は待ったなしです。

しかし近頃は、出来ないことに対しては諦める努力をすることも必要だと考えるようにしています。

Evidence 取り組み実績

「強く 優しく 美しい まち みはま」をスローガンとしてまちづくりに取り組んでおります。特に、自身の経験等を活かし寄り添っていきたい取り組みとして、子育て支援の強化があります。

美浜町で安心して、子どもを生み育てられるよう、赤ちゃん誕生祝い金の創設、新生児聴覚検査への助成、子育て世代包括支援センター開設、産後ケア事業の拡充、医療費無料対象を高校卒業までに拡大、幼児・児童・生徒の給食費無償化等、様々な事業を行っております。

私自身も、お子様誕生時に自筆のお祝いメッセージを送ったり、乳幼児健診や子育て支援の現場に赴きお子さんのお世話をしたり、親御様から直接お話を聞き、いま何が必要なのかを日々学んでいます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

社会でリーダーとして活躍するには、自らの努力はもちろんのこと、家族の理解や協力が不可欠です。家庭が安らぎと支えの場であるからこそ、外で存分に力を発揮できるのです。家族と率直に話し合い、あなたの夢や目標を共有してください。時には迷いや不安が生じることもあるでしょう。その時こそ、家族の支えや励ましが大きな力となります。

また、多角的な視点や多様な考え方を大切にすることで、女性リーダーとしての可能性が大きく広がると思います。是非、自分らしく歩み続けてください。その一歩一歩が、次世代を切り開く大きな力になると信じています。

⬅自治体ホームページはこちら

フットワーク軽く現場に出向き
笑顔が続くまちづくりを進める

34

宮城県
黒川郡大衡村長

小川 ひろみ

OGAWA Hiromi

昭和38年7月27日　宮城県黒川郡大衡村大瓜生まれ
昭和59年3月　仙台白百合短期大学卒業
平成9年10月～平成21年10月　大衡村教育委員（第一～第四期）
平成24年6月～平成27年4月 大衡村議会議員（第一～第二期）
平成27年4月 大衡村議会副議長（第一期）
平成31年4月 大衡村議会議員（第三期）
令和5年4月　大衡村長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

長年にわたり懸案となっている少子高齢化に加え、近年ではコロナ禍や物価高といった課題にも直面し、私たちの暮らしや地域社会は変化を余儀なくされています。そういう時だからこそ、変えるべきところは変えていく姿勢と寄り添った支援が自治体に求められていると思っております。

その理想に近づくため、豊かな大衡村（おおひらむら）を未来につないでいくために、「子育て・教育」「産業振興」「保健・福祉」「住宅」「インフラ整備」など、それぞれの分野で具体的な施策を一歩ずつ進めていき、誰もが笑顔で生き生きと暮らし、夢をかなえられるまちづくりを実現したいと思い、村長を目指すことにしました。

私は村議としての11年間、一歩を踏み出すためのヒントは常に現場にあると信じ、各所に足を運び続けてきました。村長になり、村民の皆さんの日々の暮らしから生まれた声は、まちづくりを考える上でとても重要だと改めて感じております。これからも、フットワーク軽く現場に出向き、皆さんの声に耳を傾け、何をすべきか一緒に考えたいと思っています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

村長選挙にあたり、年配の方々に「女、子どもに何ができる！」、「できるわけがない！」という言葉を投げつけられたことがありました。私の場合、このことが逆に闘志を燃えあがらせ、「やってやる！」という強い気持ちを持つきっかけになった事を思い出します。

就任して2年になりますが、苦労や大変さといったことを感じたことはありません。現実的には「苦労を感じている暇すらない！」というのが正直なところかもしれません（笑）。

これからは、これまで先人の方々が力を合わせて築いてきた、素晴らしいものを残しつつ、10年後も20年後も住民の皆様が笑顔で元気に暮らしていけるように、様々な課題に立ち向かい、チャレンジしてまいります。

Evidence 取り組み実績

就任以来、子育て支援や教育に力を入れ、住民の皆様に寄り添った支援の充実に努めています。特に、パパやママが安心して子育てと仕事を両立できる環境づくりを大切にし、若者の定住促進や子どもの出生、高齢者が元気にいきいきと活躍できるまちづくりを目指しています。

本村には、高校や電車がないという現実がありますが、将来にわたり誰もが笑顔で元気に暮らせる環境を整え、女性としての視点を活かし、住民の皆様のお声を大切にしながら共に歩んでまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

女性としての様々な立場や視点に立って、男性社会だけでは見いだせない、生まれてこない考え方を地域や行政等に反映させることはとても重要です。また、グローバル社会の中で、違う意見や考え方を持ち、違う視点で見ることで、将来を見通すことができると考えます。

黙っていても何も分かってもらえないし、言わなきゃ何も伝わりません！ 周囲の支援や協力を得ながら、女性のリーダーが増えることを願っております。地域を、そして日本を元気にしていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

女性たちの可能性の扉を開く勇気と力になりたい

35

大阪府
大東市長

逢坂 伸子

OHSAKA Nobuko

1967年12月19日 大阪府生まれ
1989年3月 理学療法士免許取得
1990年9月 大東市福祉事務所 理学療法課 入庁
2014年4月 大東市保健医療部 高齢支援課 課長
2017年4月 大東市 地方創生局 兼 保健医療部 高齢介護室 課長参事
2019年大阪公立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科 博士後期課程 修了
2024年4月 大東市長選当選
2024年5月 大東市長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

大東市の職員として34年間、理学療法士というリハビリテーションの専門職の立場で、地域リハビリテーション活動に従事してきました。行政の立場で行う地域リハビリテーションは、人の治療というよりも、障害児・者や寝たきりの高齢者であっても暮らしやすい環境を整える活動でした。障害当事者への理解者が身近に存在していたり、バリアフリーの建物や歩道が整備されていると、たとえ重度の障害があっても地域活動への参加につながりやすくなります。そして、そういった環境が整うと、障害の有無にかかわらず、どんな人にも暮らしやすいまちとなると考えています。

この地域リハビリテーションの理念に基づき、福祉や健康分野だけでなく、もっと多面的に、誰もが暮らしやすい、暮らし続けたくなるよう、大東市をより強く、より魅力的なまちにしたいと考え、首長を目指しました。

障害児・者や高齢者の一人一人のできないことをできるように、また、できていることをもっとできるように、ご本人が気づいていない能力を見抜き、引き出してきたリハビリテーションの専門職だからこそ、できるまちづくりがあるのではないか、大東市の力を引き出し、大東市のまち全体をもっと生き生きと元気にしたい、市民がこの大東市を誇りに感じ、「ええとこやねん」と人に言えるまちにしていく所存です。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

大東市は市制69年、私が6人目の市長となりますが、歴代初の女性市長です。市役所はまだまだ男性職員が圧倒的に多く、教育分野を含む部長級職員13人中、女性はたった1人という組織です。行事の際など、様々な市長としての作法や環境が男性仕様となっていたため、戸惑うことも多かったです。

任期開始当初は、女性でも市長が務まることを早く認めてもらわなければという気持ちが強く、少し肩に力が入りすぎていたと思います。その態度に反感を持たれてしまうこともありました。しかし、どんな市長でも、1年目は市長自身も職員も慣れるのに時間はかかるものだと自分に言い聞かせ、焦らず、自分らしくあろうと思えるようになった今は、お互いに尊重しながら、いい距離間が保てるようになってきたと思います。

市長になって1年目、市内の行事にはできる限り出席しているため、分刻みのハードスケジュールの毎日です。自宅の掃除や片付けをする時間がなかなか取れず、恥ずかしながら書類が山積しがちです。

今年は2年目に入りますので、そろそろ自分のペースをつくっていこうと思っています。

Evidence 取り組み実績

昭和40年代に急激に人口が増えた大東市は、今、公共施設やインフラの老朽化による再整備の時代に突入しています。しかし、公共施設の整備には多額の予算が必要となります。そこで、本市では、この再整備を公民連携手法を用いることで、財政負担を軽減するとともに、民間のノウハウを活用して、行政だけでは成しえない魅力的なまちづくりを進めています。大東市には、魅力を引き出しきれていない公共施設等がまだまだたくさんあります。これからも、公民連携により、市民の皆様に住み続けたいと思っていただけるよう、まちの魅力アップを進めていきたいと考えています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

リーダーとなって頑張る女性には、とかく「女だてらに」という言葉がつきまといます。それは、リーダーは男性が担うものという既成概念からの言葉なのでしょう。事実、諸外国に比べ、日本では女性リーダーが大変少ない状況にあります。こういった社会の中で、私たち女性がやりたいと思った時に、周囲の目を気にして、「女性だから」と自分で自分の可能性の扉を閉めてきてしまったのではないでしょうか。

この社会は、誰かが切り拓かねば変わりません。私が市長になることで、女性たちの可能性の扉を開く勇気と力になりたいと思っています。一緒にこの社会を切り開いていきましょう。

←自治体ホームページはこちら

女性のつながりを強みに、「だれもが幸せなまち」を目指す

36

埼玉県
草加市長

山川 百合子

YAMAKAWA Yuriko

1969年 埼玉県草加市生まれ
1996年7月 英国ハル大学大学院社会科学部
東南アジア研究　修士課程修了
2003年4月～2017年9月 埼玉県議会議員
2017年10月～2021年10月 衆議院議員
2022年10月29日 草加市長　就任　1期目

Turning Point 首長を目指したきっかけ

草加市長就任の前は、埼玉県議会議員を4期、衆議院議員を1期務めてまいりました。国会議員は非常にやりがいのある仕事でございましたが、とにかく忙しく、私が生まれ、育てていただいたまち・草加で過ごす時間がなかなか取れなくなりました。そういった国会中心の忙しい毎日が繰り返される中で、まちの方々と触れ合う機会がめっきり減り、少し距離を感じるようになっておりました。

そのような中、選挙で落選した上、同志として政治を共に担い、支え続けてくれた大切な伴侶を亡くしました。「この先一人でやっていけるのか」という気持ちと同時に「本当にこれでいいのか」という考えが芽生える中、この草加でこのまちの人たちと一緒に生きていきたいと思うようになりました。

また、私が若い頃に海外のNGOで働いていたときのことですが、その地域のために様々な提言をしても、「しょせん日本へ帰るんでしょ」「外からきて色々言われても、そう簡単には変われるものではない」といった指摘を受けることがありました。

やはり、そのまちのことは、そのまちにいないとわからない。

そうした考えのもと、育てていただいたこのまち・草加で生きていく、ここに私の人生があるとの気持ちが強くなり、草加市長を目指すことを決めました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

私の母も地域で活動し、政治の道を志した人でした。その母の背中を見て育った私は、女性として政治家となることの障壁も含め、当然の覚悟はございました。

県政に、そして国政に打って出ていくとき、多くの女性政治家の先輩方に立ちはだかってきた困難な面はあったかもしれませんが、幸い私の周りには女性であることにとらわれず、私自身を応援してくださった方が多く、女性ならではの苦労はあまり感じることはありませんでした。

むしろ、市長選においては、歴代市長が全員男性であったことから、女性市長の誕生を望む声が上がる中、多くの方が私を応援してくださったものと考えております。

市長就任後は、女性だからという訳ではございませんが、令和5年度から事務方の要となる副市長に県の女性職員を迎え、二人三脚で市政運営を進めています。

また、本市にキャンパスを持つ獨協大学でも令和6年4月に前沢浩子氏が同校初となる女性の学長として就任しました。学長と私が連携を深める中、これまでの教育機関と行政の関係のみならず、地域の事業者も含めた産官学による協力体制を築き、まちづくりを進めているところです。

この「びじょんネット」のように女性同士のつながりを生かし、女性であることをハンデやデメリットとしてではなく、むしろ強みと捉え、前向きに市政運営を進めていくことが大事だと考えております。

Evidence 取り組み実績

草加市では、「だれもが幸せなまち」の実現を目指し、様々な施策に取り組んでまいりました。

「こどもまんなか そうか」の推進や「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」のダブル選定など、これまでの取り組みが少しずつ花開き、評価されてきたと実感しております。

こうした施策の実施と並行し、ふるさと納税やネーミングライツ事業などの「稼ぐ力」の強化に積極的に取り組んだ結果、令和6年のふるさと納税額は、約14億8846万円（令和6年12月末時点）と、前年同月比約3.26倍となっています。今後も、職員と力を合わせ、全国から選ばれるまちとして本市のブランド力を一層高めてまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

私は、県議会議員、国会議員時代を通じ、日本の不妊治療の実態について議論を重ねてまいりました。国会議員時代には、党派を超えた女性議員との活動により不妊治療が保険適用となりましたが、これは携わった女性議員の皆さんの努力と協力により結実したものと考えています。

女性としての目線は、男性が中心の組織では、これまで問題にしていなかったことに切り込む力があると考えています。また、男女を問わず人との「つながり」は、様々な相乗効果を生み出します。主張が違っても、対話を重ねる中で必ず何か結果が生まれます。どのような場面においても、臆することなく飛び出していくことを期待しています。

⬅自治体ホームページはこちら

女性の持つ個性や能力を育て地域の活力につなげていく

37

宮城県
仙台市長

郡 和子

KOHRI Kazuko

1957年3月31日 仙台市出身
1979年3月 東北学院大学経済学部卒業
1979年4月 東北放送株式会社入社
2005年4月 同 報道制作局部長
2005年9月 衆議院議員選挙で初当選（以降、4期連続当選）
2011年9月 内閣府大臣政務官、東日本大震災復興対策担当大臣政務官・宮城現地対策本部長
2012年2月 内閣府大臣政務官兼復興大臣政務官
2017年8月 仙台市長（現在2期目）

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は、市長になる前、地元の放送局に入社し、その後、衆議院議員を4期務めました。報道制作を通じて多くの現場に臨む中で、問題を抱え自分の力では苦境から抜け出せない人々がいらっしゃることを知りました。個人の努力では乗り越えられない社会的制度や慣習があるのだとしたら、それを変えるのは政治の力しかないと思い、一大決心をして政治家になりました。

国会議員は地元の支えがあってこそ続けられたと思っており、地元のことにも常に思いを馳せながら、職責を果たすべく努めてまいりました。一方で、国会議員は包括的な視点で地方を捉えることが必要な立場であり、個別の地域の状況とは少なからずギャップがあると感じておりました。

特に、東日本大震災で復興大臣政務官として復興に取り組む中で、その思いは強くなり、より住民との距離が近い立場から、地域の実情に即した政治を行い、これまで支えてくれたふるさと仙台への恩返しをしたいという考えに至りました。そして、震災後、自らも被災していながらも前向きに取り組む多くの市民の方の姿を目の当たりにし、仙台の市民力に深い感銘を受けたことも、首長を目指したきっかけの一つです。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

仙台市長という職責を果たしていくうえで、女性だから何か特別に苦労したということはありませんが、日本における女性リーダーの育成には、まだ取り組むべき課題が多いと思っています。

本市では、2023年にG7仙台科学技術大臣会合を開催しましたが、出席された閣僚のほとんどが女性でした。また、ニューヨークで行われた国連ハイレベル会合に私が出席した際には、政治家だけでなくNPOなども含めて、女性のリーダーがとても多いという世界の状況を目の当たりにいたしました。

市内の企業、団体に目を向けますと、本市の取り組みもありまして、一線で働く女性のリーダーや従業員の方が増えており、大変心強く思っております。また、仙台市の市長部局においては、女性職員の管理職への登用を2025年に25パーセント以上とする目標を掲げておりましたが、この目標を1年前倒して達成することができました。

女性の持つ個性や能力を育て、多様な人材から生まれる多彩な発想を生かすことは、組織の成長のために無くてはならない重要な要素です。今後も、女性たちの意欲や能力が生かせる場をさらに広げ、地域の活力につなげていきたいと考えております。

Evidence 取り組み実績

本市では「ちがい」から生まれる多様な価値観や視点を力に変え、誰もが安心して住み続け活躍できるダイバーシティーのまちを目指しており、女性の活躍推進は重要な施策の一つです。

仙台・宮城・東北の企業等における女性の活躍推進を目的とした人材育成事業「企業の未来プロジェクト」は2024年度で10年目を迎え、受講者は延べ250名を超えました。受講後は、所属する企業で女性リーダーとしてのロールモデルとなるだけでなく、受講者同士が業種を超えてネットワークを形成し活動の場を広げており、こうした皆様のご活躍を心強く感じているところです。さらなる女性の活躍推進を目指し、引き続き、力を注いでまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

社会情勢が目まぐるしく変わる昨今、性別や国籍、障害の有無などにかかわらず、多様な人材が活躍できる環境をつくることは、組織の持続的な発展に必要不可欠な取り組みであると考えます。

組織でリーダーとしての役割を持つ際、ご自身にそれが担えるかと不安に思うこともあるかもしれませんが、一人ひとりの個性が多様であるように、リーダーのあり方もさまざまであり、こうあらねばならないという形はないと思います。ぜひ、ご自身だからこそできるリーダーシップを発揮され、ますます活躍の場を広げられますよう、心から応援し、ご期待申し上げます。誰もが自分らしく生きることができる社会の実現に向け、ともに歩んでまいりましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

宮城県 仙台市長　郡 和子

子育て世代を全力で支援
明和町を安心して暮らせる町に

38

三重県
多気郡明和町長

下村 由美子

SHIMOMURA Yumiko

1960年11月4日生まれ
1983年 明和町役場採用
2019年 明和町副町長就任
2024年 明和町町長就任

ひとことPR 未来の明和町にご期待ください。

Turning Point 首長を目指したきっかけ

町長を目指すきっかけとなったのは、昨年の前町長の急逝です。当時、私は副町長を務めておりましたが、孫が3人おり、子育てのサポートや今後の人生の選択肢について考え始めました。そのように考えていた時に、「これまでの政策を引き継いでほしい」というお声を地域の方からいただき、改めて自分の役割について深く考えるようになりました。

孫の子育てのサポートや親の介護に専念するという選択肢もありましたが、一方で地域への恩返しをしたいという気持ち、そして前町長がまいた種を引き継ぎ、花開かせたいという思いが日に日に強くなっていきました。町長選挙の期限が迫る中で悩みながらも、地域の声に応えたいと考え、最終的に町長選への出馬を決意しました。

2年前に掲げた「持続可能なまちづくり」や「住みたい、住み続けたい、豊かなこころを育む　歴史・文化のまち　明和」を目指し、努力を惜しまず取り組んでまいります。また、明和町の良さを町外の方々にも知っていただき、訪ねてもらい、そして、気にいっていただけたら住んでもらいたいと考えています。住民の皆様や新たに明和町で暮らす方々が満足できるまちを目指していきたいと思います。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

2024年の3月に町長に就任し、激動の1年を過ごしました。

私生活においても、父の死去など大きな変化に直面した1年でした。

就任後の最初の大きな仕事として、愛子内親王殿下がまちにある「いつきのみや歴史体験館」をご訪問される際の対応がありました。首長としてまだ経験の浅い中、どのように振る舞い、対応すべきか悩むことも多かったですが、内親王殿下や関係者の温かいご配慮や職員のサポートのおかげで無事に役割を果たすことができました。

また、時代の変化に伴って多様化・複雑化する行政需要に対応していくため庁内の組織機構を変更しました。明和町はドラマや映画で注目を集める機会も多くなりましたが、愛子内親王殿下の訪問を契機に町の歴史や文化が再評価され、全国からの関心が高まる1年となりました。こうした経験を通じて、予想外の出来事に柔軟に対応する力をつけることができました。

これからも地域の皆様の声を丁寧にお伺いし、関係者の助言を参考にしながら、私なりの判断を重ねていくことで、明和町の未来をより良いものにしていきたいと考えています。

Evidence 取り組み実績

2024年にスタートした「子育てDX実証プロジェクト」を本格化させていきます。このプロジェクトは、子育て関連の行政手続きを「行かなくてよい」・「待たなくてよい」・「書かなくてよい」に変えることを目指しており、住民の利便性の向上や役場庁内の業務効率化にも寄与する内容です。

3校の小学校と1校の小学校の一部を統合して、同じ敷地内には、こども園や放課後児童クラブも設置予定で、令和8年度からの児童等の受け入れ準備を進めています。また、4月には松阪地区教育支援センター「さくら教室」を開設し、学校へ行きづらい児童生徒に学びの場や居場所を提供します。これからも子育て世代を支援し、安心して暮らせるまちづくりに全力を尽くしてまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

昨年は愛子内親王殿下が斎宮歴史博物館などを訪問されたことや、NHKの大河ドラマ「光る君へ」が話題となり、女性に焦点をあてた出来事が続きました。明和町は斎王ゆかりの地として、活躍する女性たちへの親近感がある地域です。

女性リーダーとして活動する中で、時に批判に直面することもあるかもしれません。しかし、自分の信念を貫くことは大切です。

挑戦を続けることで、未来の誰かに希望を与えることができるはずです。どうか自信を持って行動してください。応援しています。

⬅自治体ホームページはこちら

成功だけでなく失敗した経験も地元の未来のために活かしていく

39

徳島県
三好市長

高井 美穂

TAKAI Miho

1971年11月30日 徳島県三好市生まれ
1990年3月 徳島県立脇町高等学校　卒業
1994年3月 早稲田大学第一文学部文学科　卒業
1994年4月 (株)ダイエー入社　社長室秘書部配属
2003年11月 衆議院選挙初当選から2012年まで衆議院議員を3期務める。この間、文部科学大臣政務官、文部科学副大臣などを歴任
2015年4月 徳島県議会議員当選、2期途中で辞任
2021年7月 三好市長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は28歳まで、東京で普通の会社員として働いていました。しかし、その先の人生を考える中で、「もっと生きやすい社会になればいいな」そして「現状に不満があるなら自分で変えるように努力する必要があるのではないか」と思うようになりました。その後、政治家になった知人からの勧めもあり、国会議員の候補者公募に応募し、徳島で政治の道へ進むことを決意しました。

国会議員3期、県議会議員2期と落選や当選を繰り返しながら約25年間の政界での経験を通じて最終的にたどり着いたのは、自分が生まれ育った三好市でした。それまで、一人の議員として予算審議や条例提案などに取り組んできましたが、地元の方々から三好市長への打診をいただいたことをきっかけに、「自分の失敗も成功も含めた政治での経験が、地元のために活かせるならば頑張ってみたい」そして、「提案だけでなく実施に責任を持てる立場である行政の長として、自分が生まれ育った三好市を変えていきたい」と決意し、立候補を決めました。

2021年7月の市長選挙に当選し、三好市長に就任しました。徳島県内では町村政だけでなく市政も含めて、女性市長は初めてとなります。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

昔は政治家になる女性の数が少なかったので目立つことも多く、メリットもあったと思います。

しかし、初めて議員となった30代の頃は、どこへ行っても経験を積んだ男性陣が多い会合ばかりで、場違いに感じて落ち着かず、冷ややかな視線を感じることもありました。今振り返ってみると、若い時は分からないことばかりで焦りがあったのだと思います。そのせいか、自信も余裕もなく、うかつな発言をしてしまうこともありました。

また、子どもが小さい時は、家族や親族、行政の助けも借り、仕事と政治活動に加え、PTAや消防団など、できることは何でも引き受け、日々手一杯ながらも体力と気力だけで何とかやってきたように思います。

そうした経験を積みながら年を取るにつれ、力の抜き方もわかるようになり、今では心身ともに楽になってきました。市長に就任した時は49歳でしたが、今は53歳で、更年期障害に悩まされています。肩こりや腰痛などがありますが、週1の筋トレとヨガをすることで体調を整えています。よく動いて、よく笑って、よく寝ることが私の健康の秘訣です。世の中には簡単に解決する問題はほとんどありませんが、これからも何とかなると信じ、自分を信じ、人を信じ、粘り強く続けていきたいと思います。

Evidence 取り組み実績

三好市の中心部池田にまちづくりの拠点となる新庁舎と県市合築施設ミライケ（2、3階が県立高校寮、1階に会議室、イベント、自習、図書の閲覧などができる地域利便性施設）が完成しました。これまでも、人材育成に力を入れてきましたが、新たに三好林業アカデミー、広域通信制高校みのり学園、三好ジオ暮らし方カレッジを開校し、デジタル人材育成事業もスタートさせます。このミライケにデジタル技術を学ぶ機器を導入し、大学や民間の力を借りて専門家の養成や習熟度に応じた各種講座の開催、人材派遣などを行います。持続可能なまちであり続けるために、学びを支援し、人に投資をして、人が人を呼び込む好循環を生み出していきたいと思います。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

政治の世界は給与も待遇も男女平等。立候補も被選挙権年齢に達した日本国民なら誰でもできます。選挙は人を学ぶのに最適の修養の場であり、政治は「堅い岩盤にじわじわ穴をくり抜いていく」作業です。実は、政治に必要なのはリーダーシップよりもフォロワーシップだと私は思っています。特別な才能がなくても、周囲に知恵と力を借りる能力があれば物事は前に進みます。「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」、人の和を信じて、自分ができる社会貢献に踏み出してみませんか？ただし、あくまでも自分を大切に、自分のためにやることが他人のためにもなる人生を送れたらいいと思います。一歩踏み出せば別の世界が見えるかも!?

⬅自治体ホームページはこちら

自分流のリーダーシップで三宅島の未来をつくっていく

40

東京都
三宅島三宅村長

山高 亜紀子

YAMATAKA Akiko

平成6年3月 東放学園専門学校卒業
平成6年7月～令和6年1月 三宅村役場
令和6年2月～ 三宅村長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私の生まれは茨城県ですが、母が三宅島出身ということもあり、専門学校卒業後、三宅島に移住しました。移住して30年、三宅村役場職員として勤めてまいりました。その間、平成12年の噴火災害やそれに伴う4年5ヶ月に及ぶ島外での避難生活などを経験し、思い悩むこともありましたが、様々なことを乗り越えることができたのは、今まで関わってくださった三宅島の方々のおかげです。

大きなターニングポイントとなったのは、三宅村役場の企画財政課長を拝命し、村の基本計画である「第6次三宅村総合計画」を策定した時でした。リーダーとなり、この計画を具現化することで、諸先輩方が築き上げてきた三宅島を、より豊かな島として次世代に繋いでいきたいと思い始めました。そして人生100年時代、残り半分の人生をどう生きるか考えたとき、私を育ててくれたこの島のために生きたいという気持ちが強くなっていきました。

令和5年2月、前村長が任期満了となりました。村政を受け継ぎ、さらに先輩方にご指導をいただきながら、若い世代の皆さんも一緒に、村民の皆さん全員とこの島の未来をつくっていきたいと思い、村長選挙に立候補しました。

村民の皆さんが「誇りをもって、未来に希望をもって、幸福に生きられるような」村づくりを目指しています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

三宅村役場職員を経て村長に就任し約1年になりますが、はじめは周囲からの視線の変化に戸惑い、私自身も今まで接してきた人たちへの対応をどのようにしていけばよいのか、村長としての立ち振る舞い方が分からず、戸惑う毎日でした。

長年、自分が描いていたリーダー像は強く、チームを牽引していく人でした。自分自身が部下という立場であった時、上司とは常に先頭を行く存在だったからです。

私は理想のリーダーを目指し、奮闘してはみるものの正解がわからなくなり、思い悩む日々を過ごしていました。

しかし、誰かの真似をしても本物を超えることはできず、自分を見失うばかり。理想を追うことに疲れ果ててしまったそんな時、「いつも疲れているように見えます。課長時代はいつも笑顔だったのに。」とひとりの職員に言われました。私はハッとし、「自分は誰になろうとしているんだ。自分流のリーダーシップで良いのではないか」ということに気がつき、「リーダーシップの理想像」を捨てました。

それからは、「誠実であること」「責任を持つこと」「正直でいること」「勇気を持つこと」など、リーダーとしては当たり前に兼ね備えていなければならないことかもしれませんが、その「当たり前」と感謝の気持ちを毎日忘れることなく、自分なりのリーダーとして職務にあたっています。

Evidence 取り組み実績

三宅村では、移住して村民と一緒に「三宅島」を盛り上げてくれる仲間を増やしていきたいと考えています。その施策のひとつとして、三宅島に最大6泊していただき、島ぐらしを体験できる事業を展開しています。滞在期間中は、島内の事業所で希望する仕事を体験していただいたり、実際に移住した方との懇談会への参加、将来住む可能性のある住宅の見学などを行っていただいています。

すでに実施回数は20回を超え、参加者約70人中23人（約３人に１人）の方が三宅島へ移住しています。今後も引き続き仲間を増やすべく、着実に取り組んでまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

部下の働く意欲と成長を持続させるためには、上司への信頼感は欠かせないものだと考えます。私はリーダーとして、「自分軸」を持ち、ブレない判断をしていくことが大事だと思っています。ただし、その自分軸を自己実現の欲求を満たす道具にしてはなりません。公益性や公平性が確保されているか、適切な相互理解が図られているか、など自分自身の厳しい検証が必要です。常に「誠実であること」「責任を持つこと」「正直でいること」「勇気を持つこと」など自らにルールを課し、検証しながら正解を模索していけば、良い結果をもたらすことができる。私はそう思っています。

⬅自治体ホームページはこちら

何事にも誠実に、まっすぐに取り組む

41

千葉県
鎌ケ谷市長

芝田 裕美

SHIBATA Hiromi

1961年12月1日 千葉県鎌ケ谷市生まれ
1982年 音響技術専門学院卒業
1983年 株式会社セントラルファイナンス（～1985年）
2003年 鎌ケ谷市議会議員（1期目）
2007年 鎌ケ谷市議会議員（2期目）
2011年 鎌ケ谷市議会議員（3期目）
2015年 鎌ケ谷市議会議員（4期目）
2019年 鎌ケ谷市議会議員（5期目）
2021年 鎌ケ谷市長　就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

鎌ケ谷市長になる以前は、鎌ケ谷市議会議員を務めていました。市議会議員になる前は、専業主婦として子育てをしていましたが、2人の子どもが中高生になったころ、市内を走る私鉄（現在の東武アーバンパークライン）の高架化が行われました。

まちが変わっていく様子に関心を持っていく中で、生まれ育った鎌ケ谷のまちづくりや教育についても考えるようになりました。そして、ひとり親で子育てする方たちと知り合ったことで、そのような方たちのため、「まちづくりに関わりながら福祉や教育の問題に取り組みたい」との想いから鎌ケ谷市議会議員選挙への立候補を決めました。幸いにも市民の皆様の信を得て、平成15（2003）年に初当選しました。以来5期18年にわたり務めさせていただきましたが、令和3（2021）年に、前鎌ケ谷市長が辞職することになった際、「政治家として、また自分を育ててくれた鎌ケ谷のまちをさらに良くしたい」という私自身の想いがあったこと、また、市民の方や同僚の議員、周りの方に推していただいたことから、鎌ケ谷市長選挙への立候補を決意し、初当選を果たすことができました。

市議会議員であっても市長であっても心掛けていることは、常に誠実であることです。信頼を得るのは大変ですが、失うのは一瞬なので、何事にもまっすぐに取り組んでいます。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

鎌ケ谷市議会議員時代に本市初の女性議長となり、その後、本市初の女性市長となったことで「女性初」という経歴がよくクローズアップされます。しかし、私自身はこの言葉を意識したことはありません。

市議会議員時代も、現在の市長という立場においても一貫しているのは、「大好きな生まれ育った鎌ケ谷のために」という一点です。

ただ、市民の皆様からは「子育て支援」に関するご要望などが多く寄せられており、これは、女性市長ということが大きく影響しているのではないかと思っています。

この「鎌ケ谷市のために」という考えや想いは、一緒に働く職員の皆さんとも共有しています。特に、市長就任の際に直面した新型コロナウイルス感染症への対応においては、ワクチン接種、経済支援など、市民の皆様の命と暮らしを守るという強い決意のもと、一つ一つの困難な場面を乗り越えてきました。

本市は現在、有機フッ素化合物（PFAS）への対応が新たな課題となっていますが、これまでの経験をもとに、私が先頭に立ちながらも、職員や市民の皆様と一緒に乗り越えていくという意識を念頭に置いて臨んでいます。

Evidence 取り組み実績

平成27年度から10年連続待機児童ゼロの達成、子育て世帯の経済的負担軽減に加え、近年は新たな児童センターや市制記念公園内の水遊び場もオープンし、子育て環境の充実につなげてきました。

また、本市の女性管理職割合は、平成28年度から8年連続で千葉県内37市中1位、令和5年度には県内54市町村中1位を達成しています。

このほか、市の中心部にある新鎌ケ谷駅の利便性の高さや、東京外かく環状道路と成田空港を結ぶ道路「北千葉道路」の整備を見通しながら、充実した立地を活かした企業誘致、賑わいや雇用の創出など、今を大切に、未来に希望を持てるまちづくりに全力で取り組んでいます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

これから女性としてリーダーになる、あるいは目指される方も様々な困難に直面することもあると思いますが、周囲の方々の存在や支えがあることを忘れず、自分の抱いた想いと共に邁進していってほしいと思います。

本市の男女共同参画計画は「誰もが平等に尊重され、自分らしさを発揮し活躍できるまち鎌ケ谷」を目指し、誰もが自らの意思により、あらゆる分野に参画できる環境づくりを目標の一つとしています。やるべきことは山積していますが、私自身、女性だからということを意識はせず、一人の人間として職員と手を携え、市民の皆様のご理解を得ながら課題の解決に当たりたいと強く想っています。

⬅自治体ホームページはこちら

移り住んだまちを救うため
新しいチャレンジを重ねていく

42

神奈川県
中郡二宮町長

村田 邦子

MURATA Kuniko

1957年5月1日 神奈川県横浜市生まれ
1980年 専修大学文学部卒業　ジャパンライン（株）（海運会社）勤務
1998年～2006年 二宮町議会議員
2007年～2010年 神奈川県議会議員
2014年～現在

Turning Point 首長を目指したきっかけ

35年前、私はサラリーマンの夫と双子の息子たちと共に、東京都日野市から二宮町に移住してきました。当時、海の見える場所に住みたいという思いから、湘南の海沿いの物件を探し、紹介されたのが二宮町だったのです。初めて聞く町名に戸惑いながらも、二宮町での生活が始まりました。

海あり山あり緑ありの自然の豊かさに加え、他者を受け入れる懐深い町民性や、地域で支え合う温かい文化がある二宮町の魅力に、子育てし、生活する中で、どんどんと惹かれていきました。そして「大好きな二宮町のために何かできないか」と強く思うようになり、その思いから、町議会議員を2期8年の間務め、町のために尽力しました。その後、県議会議員としても1期4年を務め、さらに多くの経験を積むことができました。

これまでの歴代の町長は二宮生まれか二宮育ちであり、女性町長はいませんでしたが、今までの私の経験を活かし、町の魅力を未来を担う子どもたちに受け継いでいくため、そしてこの町の未来をより良くするために全力を尽くす覚悟で、町長選挙にチャレンジする決意を固めました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

当時、多くの市町村が少子・高齢化の波に飲まれそうになっていました。二宮町にも「消滅可能性都市」というセンセーショナルな烙印が押されたころ、私は町長に就任しました。

それから10年間、町民の皆さんと共に移住定住政策を進めてまいりました。特に移住相談会では、職員だけでなく先輩移住者を招いて、良いところも悪いところも全て包み隠さず、生の声を届けてきました。この間、コロナ禍でもオンラインで行うなど、相談会は毎月開催し続けてきました。また、官民共同での空き家対策のほか、子育て・教育政策にも力を注いできました。その結果、高齢化による人口の自然減はありましたが、転出者より転入者が多い状況が続き、現在、二宮町は消滅可能性都市から外れることができました。

しかし、若い世代を近隣の自治体間で奪い合う状況を続けていても、やがて立ち行かなくなることは目に見えています。また、子育てや教育費の無償化などの給付型政策による自治体間の競争も限界に近づきつつあります。今、二宮町では家でも学校や職場でもなく、自由に交流し、ほっと一息つける多世代の第３の居場所「サードプレイス」が、町民有志の力で次々と生まれています。今後、町行政、地域とどのように連携し、個人の多様な可能性が実現できるか、一層危機感が増す今、まさに官民の覚悟が問われています。子どもをまんなかに「千年続く循環するまちづくり」への歩みを進めていきます。

Evidence 取り組み実績

子どもをまんなかに「千年続く循環するまちづくり」を掲げ、小児医療費や中学校給食費の無償化、小中一貫教育の推進など、子どもたちが安心して成長できる環境整備に力を入れています。

また「消滅可能性都市」から外すため移住定住政策を推進するほか、耐震基準が不十分な町役場庁舎の新庁舎建設を進め、庁舎整備基金の計画的な積み立てにも成功しました。

世代や立場を超えて行う「にのみや気候市民会議」は、「最年少が11歳(大体が13歳)」、「全国的にも町レベルで開催している自治体は少ない」と専門家の方々から評価をいただいています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

時代は今、多様な意見を踏まえた参加型協働のまちづくりが求められています。そして、その意思決定の過程においては、女性、男性を問わず多様な視点が必要となります。一方的に意見を述べるのではなく、互いが真摯に向き合い、自ら何ができるのかを考えることが大切です。

より良いまちづくりを進めるためには、男性も女性も、老いも若きも、その人らしく輝けるように、互いに力を合わせて未来をつくっていかなければなりません。そこには、未来の女性リーダーを目指す、皆さんの力が必要です。共に努力し、素晴らしい未来を築いていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

誰もが夢や希望を描ける社会をつくると決意

43

愛知県
碧南市長

小池 友妃子

KOIKE Yukiko

1969年9月14日生まれ 愛知県碧南市出身
1992年3月 日本大学文理学部社会学科卒業
1992年4月 同和火災海上保険株式会社(現あいおいニッセイ同和損害保険株式会社)入社
2016年5月 碧南市議会議員（1期目）
2020年5月 碧南市議会議員（2期目）
2024年4月 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社退社
2024年4月 碧南市長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私が政治家を志した14年前、働きながら子育てをするには、まだその環境が整っていませんでした。また、当時から、子どもを一人育てるには3000万円程かかると言われており、「今のままでは将来に夢や希望が描けなくなる人が増えるのでは？」という危機感を感じていました。そのような中で、少子高齢化社会において、経済や子育て、教育について希望を持ち、心豊かな生活を営むためには、実際に問題に直面して困っている自分自身がリーダーとなるべきだと思い、政治家になろうと決めました。

その後、病気や出産などにより、一時は政治家を目指すことを諦めかけましたが、友人や知人のサポートもあり、これまでの経験を活かして人々の幸せに貢献できる人になりたいと再び思うようになり、まずは市議会議員として活動することから始めました。市議会議員を2期8年務め、障害を持たれている方、外国にルーツのある方、高齢者、母子、父子等、様々な立場、境遇の方々に寄り添い、対話を重ねる中で、ちょっとしたことでもまちづくりに関わり、居場所をつくっていくことで、人は自己肯定感が上がるということ、また、そのことの大切さを知りました。

そして、大人が夢や希望を持って活き活きと活動できる社会にしていく事が、子どもたちにとっても自由に夢や希望を持って生きられる社会になると考え、一人ひとりが自分の夢や希望を描ける社会をここ碧南から創ると決め、市長を目指すことを決心しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

「子どもとの時間をどう確保するか？」ということには、日々、苦労しています。運動会や発表会等の行事にもなかなか行くことができませんし、日々の生活の中でも一緒にいる時間はかなり減りました。

仕事から帰ると、子どもが一人リビングで寝ている時もあります。起こして風呂に行かせ、寝かせる。翌早朝、自分が仕事のために起きるのに合わせて子どもも起こし、宿題をみるなど、バタバタしていますが、短時間でもできるだけ子どもとの時間を大切にするように心がけています。

子どもが病気になった時もとても困りました。両親は既に他界し、頼ることができません。病院に連れていきたくても私はなかなか連れていけないので、夫にもかなりサポートしてもらっています。家事をする時間もなかなか取れなくなりましたが、今では「できる人ができることをする」という家族のあり方に変わりました。おかげで、それぞれが少しずつできることが増え、自立し始めています。また、ご近所の皆さんや友人等にも本当に助けていただいています。

仕事では、市民との距離感が近くなったことで、様々なご要望やご意見をいただく機会が増えました。その中には、自己中心的な要望やハラスメントのような対応に苦慮するものもありますが、副市長をはじめ市職員の皆さんの協力を得ながら、一つひとつ解決に努めています。

（子育て）高校生世代までの医療費の完全無償化、小規模保育事業所整備支援等。（教育）オーガニック給食の導入拡大、夏休みの居場所づくりとして子ども学習室を開催、異常気象対策として学校体育館の基礎調査設計を計画等。（経済産業）新エネルギー関係企業の誘致推進、就労継続支援B型事業所の施設整備補助等。（防災減災）公共施設のAEDを屋外へ移設し誰もがいつでも利用可能に、フェーズフリーの概念を様々なところに導入、災害用避難所便袋を想定避難者数分確保等。（地域交通）市内循環バスの市内大型商業施設9か所への停留所増設、碧南中央駅駅前広場の一部を送迎時の駐車場へ改修等。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

人生は山あり谷ありですが、何事も諦めなければいつかきっと夢は叶います。私は、人の幸せに貢献し続ける人でありたいと思い、今もなお自分にできる活動を続けています。

貴女はどんなリーダーになりたいですか？

私は、リーダーとして、「誰もが夢や希望を描ける社会」をつくると決めました。そのために、自分自身が常に笑顔で、どんな困難にも諦めず、できることから地道に続けていく努力をしています。周りの人は、貴女自身のあり方に心動かされ、共感し、支援者となってくれるのだと思います。これまでのすべての人や物に感謝し、自分の進むべき道を自分の速度で前に進んでいってください。

応援しています！

⬅自治体ホームページはこちら

女性が活躍できる社会を実現して日本をリードしていく港区をつくりあげる

44

東京都
港区長

清家 愛

SEIKE Ai

1974年12月25日 東京都港区生まれ
1998年3月 青山学院大学国際政治経済学部卒業
1998年4月 株式会社産経新聞社入社 記者職（7年）
2011年5月 港区議会議員（4期13年）
2024年6月 港区長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

全国紙新聞記者として働いていましたが、仕事と子育てが両立できない日本社会の壁にぶつかり、出産後に育児支援政策に現場のママの声を届けるため、「港区ママの会」を立ち上げました。また、港区議会議員として、子育て支援や教育問題を中心に4期13年、現場の声を区政に届け続け、活動してきました。超少子高齢化、人手不足、国際競争力の低下と今、日本は厳しい時代を迎えています。社会課題が山積する中で、新しいビジョンを持って未来を築いていく必要がある。港区からこそ、日本をリードし、新しい時代を切り拓いていく必要があると考え、港区長を目指しました。

また、港区で生まれ育ち、港区で子育てをする者として、区議会議員としても区民の目線で政策実現を目指してきました。たくさんの区民の陳情を受け、「小さな声も必ず形に」を信条に、一つひとつ解決に向けて尽力してきましたが、こうした区民の目線、主婦の目線、生活者の目線がより反映される区政運営を目指したいという強い思いがあります。港区は、世界中から多くの人が集まるまちです。この強みを生かし、区民の皆様と一緒に明日の港区をつくりあげていきます。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

私は現在子育て中であり、娘や家族に負担をかけてしまう点で苦労しています。区長として参加する土日のイベントが多く、休日に共に過ごせないこと、娘の朝のお弁当をつくれなくなったこと、夕飯を共にできなくなったこと、など。しかし、区長は、27万人の区民の命と生活を守る重責を担う仕事であり、区民のために自分の時間を全て使うべきだと思っています。

一方で、これからの時代、女性も首長や管理職などの責任ある仕事に就くのは当然であり、その仕事のあり方も見直し、家庭や私生活を大切にする、視野の広いリーダーというものが求められていくと思います。その過渡期にいる者として、新しいリーダー像を示していくために、区長の仕事をはじめ、組織の仕事を見直していく必要があると考えていますが、まだ格闘中です。

Evidence 取り組み実績

「世界一幸せな子育て・教育都市」「誰ひとり取り残さない健康・福祉・共生都市」「確実に命を守るリアル防災都市」「アート・環境・経済　持続可能な先進都市」「DX・区役所改革　頼れる便利なオープン区役所」を5つの重点施策として、取り組んでいます。
特に、昨年以来、自然災害の脅威が高まる中で、マンション住民9割という港区の特性に合った「都市型防災モデル」の構築に向けて全力を尽くしています。

また、外国籍の方も多く、多様性溢れるまちなので、性別、年齢、国籍、障害の有無などにかかわらず、一人ひとりの「権利」が守られ、共生できるまちを目指して、取り組んでいます。

多くの企業や大学、大使館などが集まり、自然豊かで、歴史的な価値あるものも多くあり、人情溢れるコミュニティがある港区の高いポテンシャルを生かして、日本をリードしていく港区をつくりあげていきます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

女性が活躍できる社会をつくっていくこと、そのためにも意思決定の場に女性リーダーがいること。それが、確実に、これからの日本をつくっていくために必要なことだと思っています。

ロールモデルが少ない中ではありますが、私自身、前を歩き、道を切り拓いてくれている人たちの背中を見て、勇気づけられています。私も次に続く人たちの背中を後押しできるように、「期待を失望に終わらせない」という信念のもと、前を向いて進んでいく覚悟です。協力し、支えあいながら、ともに頑張っていきましょう。

⬅自治体ホームページはこちら

町民の小さな声も大切に
貴重な意見を町政へ反映

45

福岡県
鞍手郡小竹町長

井上 頼子

INOUE Yoriko

1963年9月30日生まれ
1988年3月 福岡教育大学卒業
1997年1月 公立小学校非常勤講師
2006年4月 小竹町社会福祉協議会
2012年4月 特定非営利活動法人学童保育協会
2023年1月 小竹町長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

この町に嫁いで30数年、教員をしていた夫は部活指導で家にいることが少ない中、今は34、32、30歳になる3人の男児を育ててきました。知らない町での子育てでしたが、地域での子ども会活動、PTA活動、少年野球の皆さん、まちづくりでご一緒させていただいた楽しい仲間、義理の両親や姉夫婦に支えられて何とか子育てを終えることができました。

この間、小学校や学童保育所に勤務しました。また、学童保育の質の向上のためのNPO法人に立ち上げから携わり、全国の同じような課題意識のある法人と協働するなど、社会的な使命を担うことができました。町内でも子育て支援に関わる法人をつくり、仲間とともに活動を楽しんできました。そのような中で、私は町の行政改革推進委員として活動した際に、人口減少等による厳しい課題が町にあることを知りました。人口減少の流れを一自治体で止めることは難しくても、今住んでいる住民が、少しでも「幸せを実感」できるまちにしていくことは、次世代への責任だと思うようになりました。そこで、今までの経験をもとに、仲間の力を結集して、小さい町ならではの顔の見える関係性を大事にする政治を行うことでつながりと温もりの中で幸せを実感できる町づくりに取り組もうと町長を目指しました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

九州の中でも、特に厳しい環境に置かれている旧産炭地にある小竹町において、近隣でも初めての女性首長ということで、かなりな重圧が有ることは否めませんでした。その理由は、「女に何ができるのか？」という女性に対する偏見や固定概念と、私が失敗したら「女だからできないのではないか？」と見られ、政治の世界を目指す次の世代の女性たちの道を狭めてしまうのではないかという思いからでした。その根底には、私自身が、男性と同じように首長を務めることができるのかという迷いを持っていたからだと思います。

このような思いで悶々としていた就任1年目の2023年の女性首長によるびじょんネットワーク会議で、坂東眞理子先生のご講話を聴かせていただく機会がありました。その中で坂東先生が「コロナパンデミックに象徴するような今までに無い未知なる時代を担うリーダーに必要な力は、常にアンテナを張り、専門家の力を借り、周囲を巻き込む力で課題を解決する女性に親和性のある力である。」と仰ったことが胸に突き刺さりました。「そうだ！そうだ！まだ、頑張れる。」とこの信念を胸に残りの任期を精一杯私らしい首長として務めようと励みにしています。

Evidence 取り組み実績

町民の小さな声を町政へ反映させるため、町民の声を聴く「行政への手紙」という取り組みを始めました。大きな声の極（ごく）少数派の意見で動くような町ではなくて、小さな声も大切にしたいと思っています。

町内に生れてきてくれる子どもたちをまちぐるみで育てるという施策、そのメッセージを伝えるような工夫をしています。また、役場職員と町民の距離が近い小さな町ならではの強みを活かし、アウトリーチを大切にし、フットワーク軽く職員が動くことをモットーにしています。「困ったときには、役場に頼ろう！」と思ってもらえる関係を大切にしていきたいと考えています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

人生は一度きり！！ やりたいことは、悔いのないようにやるべきであるし、やりたいことが時代のニーズに沿っていれば、自ずとその道は拓けると実感しています。いろんな方が集まって、多様な価値観で地域社会のことを考え行動することは、多くの方の幸せ実現につながると思います。常にみんなの幸せを私利私欲なく考えて行動に移せるのは、どちらかというと女性（母性）に馴染みのある習性のように感じています。自らが自らに科せた「女性だから…」という固定観念をこの際捨てて、未知なる課題の解決を楽しんでいけることを願っています。

⬅自治体ホームページはこちら

子どもたちの未来のために あらゆる分野で 女性の活躍を推進する

46

三重県
鈴鹿市長

末松 則子

SUEMATSU Noriko

1970年11月14日生まれ
1991年3月 名古屋造形芸術短期大学卒業
2003年4月 三重県議会議員
2011年4月 鈴鹿市長
2013年5月 内閣府男女共同参画会議監視専門調査会委員
2016年3月 内閣府男女共同参画会議重点方針専門調査会委員
2019年9月 国土審議会委員
2023年4月 こども家庭審議会臨時委員

Turning Point 首長を目指したきっかけ

父が県議会議員で、政治は身近な環境でしたが、当時は政治家になるつもりは全くありませんでした。それでも子育てをしながら働く中で、親の介護で職場を離れざるをえなくなるという声や、働く母親から「職場では女性の声がなかなか通らない」といった声をきいているうちに「女性だからこそできることがあるはず、こうした状況を変えたい」と思い、県議会議員になりました。しかし県議2期目後半から、県議会の立場で言っていることと鈴鹿市で起きていることにギャップがあると感じるようになり、議員という立場で政策は提案できるけど、執行は市長の責任という違いを感じ「首長にならないと現実は変えられない」と思いました。家族の反対もあり、多くの人にも子育てが終わってからでもいいのではないかという意見もいただきましたが、それでもやりたいんだと周りに理解を求め、市長になる決意をしました。

出馬した時は中学校の完全給食など子育て世帯の要望に応える政策を進めていきたいと考えていました。それは私自身が母親として働きながら子育てをしてきた経験が大きく影響しています。お弁当を毎朝つくることは、愛情があるし、決して嫌なことではないけれども、仕事を抱えていれば、やはり大変だし、栄養の面やみんな一緒のものを食べることの意味もある。そのようなことからも子どもたちが楽しく快適に学べる環境を整えたいという強い気持ちがあったので首長になる決意をしたことに不安を感じることはありませんでした。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

子育てとの両立という点では、平日がほぼ拘束される市長の立場では、進路面談など学校行事に予定を合わせるのが大変でした。それでも予定の調整をお願いしていくうちに少しずつ理解をしてもらえるようになりました。子どもに関わることは親や家族などにしかできないと考えています。

市長になって驚いたのは、部長会議で私以外が全員男性だったことです。政策を議論する場に女性としての視点が必要と感じたため、各部の主幹課長に複数の女性職員を任命し、女性が意見を発言できるようにしました。また、女性が活躍できる場面が増えるように環境整備を整えたいと思い、男女共同参画のまちづくりにも力を入れてきました。製造業に代表される鈴鹿市内の事業所に女性管理職が少ないことを踏まえ、私が代表となりSUZUKA女性活躍推進連携会議を平成27年12月に立ち上げました。あらゆる分野における女性の参画を促進し女性の能力を発揮できる仕組みづくりに民学官が一体となって取り組んでいます。内閣府の男女共同参画会議専門調査会等の委員を務めたこともあり、地方の現場を知る首長として国の取り組みがより良い方向性になるように国の施策にも意見を発信してきました。同時に、委員を通じて得た知見を市政に活かしていくような取り組みもしています。市長に出馬した際には「女に何ができる」との批判を浴びることもありましたが、徐々に「女性市長でよかった」という声も聞くようになってきました。

Evidence 取り組み実績

就任したのは東日本大震災が起きた平成23年でした。まずは避難ビルの指定や防災公園の整備などを進めるとともに中学校の完全給食を実現させました。

令和2年に新築した保育所では市内の公立保育所で初めて病後児保育と一時預かり保育を実施しています。また、市内公立小中学校への1人1台パソコンの整備を行いました。コロナ禍を経験し、新しい生活様式に対応した教育の実施につなげています。そして、子どもたちが快適に学べるよう全ての公立小中学校の普通教室と特別教室にエアコンを設置し、屋内運動場へのエアコン設置も進めています。

さらには、全ての満5歳児を対象に集団適応健診事業の実施や、窓口負担をなくすため子ども医療費助成を行っています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

未来を切り拓く女性リーダーの皆さんへ。今、時代は目まぐるしく変化しています。その変化の中では、時代に合ったものを取り入れて効果的に発信していく情報発信力がとても重要です。皆さんはきっと自分だけでなく周囲の人々の可能性を引き出す能力があります。時にはぶつかることもあると思います。しかし、それを恐れることなく自分を信じて、夢を語り、行動に移してください。未来をつくる仲間を大切にし、多様性を受け入れ、力を合わせることで私たちの社会はより強くなります。きっと同じ道を歩む人々にも勇気と希望を与えることになるでしょう。決して歩みを止めることなく進んで頑張ってください。応援しています！

⬅自治体ホームページはこちら

リーダーになり人生が充実
常に笑顔で前進あるのみ！

47

沖縄県
中頭郡中城村長

比嘉 麻乃

HIGA Asano

1974年5月22日 沖縄県那覇市出身
1993年3月 沖縄県立コザ高等学校 卒業
1993年4月 株式会社琉球バス
2016年6月 中城村議会議員
2024年7月 中城村長

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は高校卒業後に中学生の頃から夢見ていた観光バスガイドになりました。バスガイドをしながら選挙の車上運動員（ウグイス嬢）も約20年間務めました。そのご縁もあってか、当時の中城村長である浜田京介氏のお声がけいただき、42歳で中城村議会議員に初当選しました。当時の私は中城村の出身ではなく村内に親戚や同級生が数人しかいない状況での立候補だったため、数回お断りしましたが、浜田村長の子育て支援施策に感銘を受け「私もこの村長と子育て支援に取り組みたい」という思いから立候補を決意しました。

議員当選後私は15歳と6歳の娘の子育て真っ最中でしたが、家族や地域の皆さまのおかげで議員活動を続けることができました。村議会議員を8年務めた、令和6年3月の定例会が閉会した頃、当時の村長から「今期で村長を勇退する。後継として後を引き継いでほしい」と正式に申し出をいただきました。以前から「僕の後継はあなたと決めている」と聞いていたので、驚きはそれほどありませんでした。

今回の選挙では、1908年の村制施行以来初の女性村長誕生を掲げ、多くの村民の皆さんのお力添えをいただき初当選することができました。選挙期間中は、相手候補陣営との闘いだと実感することもあり、心が折れそうな時もありましたが、後援会の皆さんや支持してくれた議員のサポートが何よりも励みになりました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

女性首長として苦労した事はありませんが、副村長や職員の意見を伺いながら常に「この決断は村民のためになっているのか」「やらない理由を考えるのではなく、できる方法を考える」など様々な視点から考え、成功した時のイメージを持つようにしています。今後、乗り越えなければならない事に遭遇する事もあると思いますが、職員の意見を聞きながら丁寧な判断と、時にはスピーディーに決断してまいります。

我が家は夫婦共働きで、家族全員が協力し合って生活をしています。家事や子育ての母親業は村長になっても変わりませんし、変えたくないと思っております。私には2人の娘がおりますが、特に中学生の次女は私の村長としての仕事に興味があるようで、毎日のように「村長は楽しい？　今日はどんな仕事をしたの？」と聞いてきます。時には、中学生の視点での意見や要望を受けることもあります。村長として母親として家族の協力と応援が何よりも活力になります。忙しいからこそ、娘との時間と会話を大切にしております。

また、職員も家族の一員だと考え、コミュニケーションを大切にし、働きやすい職場環境を目指しております。これは行政運営でも心掛けており、常に対話を重視して村民の声に耳を傾け、寄り添っていきたいと思っております。

Evidence 取り組み実績

村長就任して間もないので、まだ実績はございませんが、村議会議員を8年務めていた時は母親目線で行政へ多くの事を提案し実現してきました。例えば、18歳までの医療費の無料化や子ども達の帰宅を呼びかける村内放送、スクールバスの増便、「こども課」の新設、新型コロナウイルス感染症拡大緊急経済対策の「特別定額給付金」対象者に胎児を含む提案、受験を控えている中学3年生への塾受講料の半額補助があります。その他、歯周病疾患の無料検診の実施や自治会がご負担していた村内街路灯の電気料金を行政負担にし、自治会活性化に繋げることができました。課題解決のための提案に耳を傾け取り組んでいただいた前村長や職員のように対話を大切にしながら村政を進めていきます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

よく女性の皆さまから、仕事と家庭の両立は大変ではないですか？ と心配されますが、村長だから特別に大変なことはありません。働く女性の大変さはみんな同じだと思います。どんな仕事も周りの環境や家族の協力、何よりも本人のやる気次第で見え方は変わると思います。

私の場合、リーダーになり人生がさらに楽しくなりました。女性リーダーだからこそ優しい言葉をかけてくださる方が多いこともそうですが、副村長や職員といった周囲の人にめぐまれた良い環境で仕事ができているからです。

良い環境をつくるのも自分次第、私は常に笑顔を絶やさない事を心掛けています。笑う門には福来る！前進あるのみ！です。

⬅自治体ホームページはこちら

様々な課題に対して危機感をもち真摯に一つひとつ解決する

48

鳥取県
東伯郡琴浦町長

福本 まり子

FUKUMOTO Mariko

1952年11月13日 鳥取県東伯郡琴浦町生まれ
1971年3月 県立米子南商業高等学校卒業
1978年4月 旧東伯町役場入庁
2013年3月 琴浦町役場農林水産課参事で退職
2014年4月 琴浦町シルバー人材センター事務局長に就任
2018年1月 琴浦町議会議員に初当選
2022年2月 琴浦町長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私は、首長を目指していたというわけではありませんが、琴浦町議会議員として活動していた時、コロナ禍でさらに少子高齢化に拍車がかかり、過疎地域に指定されたりと、様々な問題への対応が急務となっていました。そんな中、当時の町政に対して、このままで良いのかという思いが募ってきました。誰かが変えていかなければと思い、意を決して町長選挙に挑みました。今思えば、後援会も、選挙運動をする時間もない中での選挙でしたが、多くの方が、この現状を何とかしたいという思いからの当選だったと思います。

人生の節目で幾度か心突き動かされることがありましたが、一番心に残っているのは、当時私が40代の頃、自治会役員を決める時のことです。約70世帯ある自治会でトップの区長を選出する際、会議が夜遅くまで続いても決まらず、沈黙が続きました。そんな中、ある長老が急に口を開き、「まり子さんや、近頃は男女共同参画っていうけども、そろそろお前さんも区長をしてもいいでないか」と言いました。まだまだ地域で男女共同参画の言葉すら浸透していない頃でしたので、驚きました。私は、みんなの協力なしにはできないことを伝え、区長をするからには責任感をもってやると表明しました。それから少しずつ男女共同参画の改革に取り組み、町内の各自治会で自治会長のみならず、役員等において女性が多く選ばれることに繋がったと思っています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

首長になって1期目、来年は選挙の洗礼を受けるわけですが、女性だから特に苦労したことというのは正直思い当たりません。やらなければならないことをただ、進めるだけです。

コロナ禍で地域のコミュニティが希薄になっていたことがあり、大人のみならず、子どもの居場所となりうるところを多く確保し、各地域での活動に支援を行っています。

また、人口減少を避けることはできないながらも、移住やイベント等を通しての交流環境に力を入れており、「住みたい田舎ベストランキング」（人口1万人～3万人）においても高い評価をいただいています。今後は、キャリアを積んだ女性が田舎でも能力が発揮できる環境を整備し、起業する人に対して支援を行っていきます。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

真摯に目の前のことに向き合うことで、周りがあなたを認め、評価してくれると思います。

自身が行動を起こすことで町民が〝変わる〟シンボルに

49

岐阜県
羽島郡岐南町長

後藤 友紀

GOTO Yuki

1977年2月2日 岐南町生まれ
1995年3月 岐阜県立羽島北高等学校卒業
1997年3月 朝日大学歯科衛生士専門学校卒業
2016年12月 岐南町議会議員（1期）
2017年9月 岐南町議会議員（2期）
2021年9月 岐南町議会議員（3期）
2024年4月 岐南町長 就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

私が、町長を目指したきっかけは、女性の立場から日常生活の中で感じた数々の理不尽な出来事でした。女性としての立場から見た社会の不平等や、働く環境における性別による不公平など、これらの問題を解決するためには、私自身が行動を起こす必要があると強く感じました。特に、若い世代の女性たちが同じような経験をしないようにするためには、制度や環境を整えることが重要だと考えます。

岐南町で起こったハラスメント事案は、世間に衝撃を与え、「まち」のイメージは失墜しました。

そこで、私は、町内外に広がった負のイメージを変え、失った信頼を取り戻したいと考えました。

女性である私が町長になることで、町民が“変わる”ことを選んだシンボルになります。そのことが全国に広がった「マイナス」を「プラス」に変える大きなインパクトとなり、岐南町が変貌したことを知ってもらう最初の一歩としたかったからです。

私は、この想いを決して忘れることなく、町長としての使命と責任を果たすために、日々努力を続けています。これからの若い世代の皆さんのために、より良い社会を築くことが、私の使命であり、責任だと感じています。

引き続き、女性がもっと自由に、そして平等に活躍できる社会を実現するために、全力を尽くす覚悟です。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

私は、日々、仕事と家庭の両立に取り組んでいます。町長としての責任を果たしながら、母親としての役割も大切にしています。この両立は、決して簡単なことではありませんが、私にとって非常に重要なことです。

最も印象に残っているのは、選挙告示日と子どもの入学式の日が重なったときのことです。告示日には、やる事が多く、選挙期間において最も忙しい1日です。出馬を検討する上で、どちらを選択すれば良いか悩みに悩みました。仕事と家庭どちらも大切にしたいという思いから、非常に難しい決断を迫られました。しかし、仕事と家庭の両立ができる社会をつくるのは「あなただ」と背中を押してくださった方々の応援や協力により、告示日の活動を進めるとともに、入学式にも参加することができました。

この経験を通じて、私は、仕事と家庭の両立がいかに重要であるかを再認識しました。働く親が安心して子育てと仕事を両立できる環境づくりを推進し、地域社会全体で支え合う仕組みを構築していきたいと考えています。家族や地域の皆さんの支えがあったからこそ、これからも挑戦し続けることができると感じています。

私の目標は、仕事と家庭の両立ができる社会を実現することであり、この目標に向かって町民の皆さんと共に歩み続けてまいります。皆さんと手を携え、誰もが安心して暮らせる社会を築いていきます。

Policy 政策方針

私は、子育て真っ最中です。町長に就任する前は議員として、特に「子ども・子育て」を中心に「放課後の子どもの居場所の充実」や「子育て世代の経済的負担の軽減」に向けた政策を訴え、時には「まち」の方針や問題点をただしてきました。町長へ立場が変わった今、広い視野の自治体運営が求められます。

岐南町を「住み続けられるまち」にしたいという想いは、今も昔も変わっていません。むしろ気持ちはもっと強くなっています。

まちづくりの主役は「町民」です。政策実現に向けては、その過程において、だれの目から見ても明らかな根拠を示し、対話を重ねながら結論を出してまいります。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

自分自身の成長のため、大切な人のために、ぜひ挑戦してほしいと思います。政治は、暮らしと直結しています。女性は、家庭や暮らしのプロフェッショナルです。

だからこそ、女性が政治に参加することが求められています。あなたの持つ想いと力が、社会をより良く変えるためには必要です。挑戦することで、新たな視野や可能性が広がります。信念を持って行動し、新しい道を切り拓いてください。挑戦の一歩一歩が、あなたの成長の糧となり、社会にも大きな影響を与えることでしょう。その勇気と情熱が、未来を創る原動力となります。迷わず行けよ、行けばわかるさ。

⬅自治体ホームページはこちら

現場に足を運び意見を交わす「双方向主義」を実践

50

東京都
北区長

やまだ 加奈子

YAMADA Kanako

昭和46年 東京都北区生まれ
平成19年 北区議会議員を4期（第68代北区議会議長）
令和2年 都議会議員を2期
令和5年4月 北区長就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

当選はかないませんでしたが、私の父は区議会議員の選挙に出ていました。父には障がいがあるのですが、障がい者であっても普通に社会で暮らしていける環境を作りたいという思いを持って活動していました。誰かのために何かをする父の姿は、私に影響を与えていたと思います。そして、父が立候補を断念した時に、自分がその思いを受け継いで生まれ育った大好きな北区を良くしていきたいと思いました。

まずは区議会議員に当選させていただき、行政について多くのことを経験しました。区政運営においては東京都との連携がすごく重要で、単独で何かをすることの難しさを実感しました。

その後、都議会議員となり、災害対策などの危機管理について改めて考えていた時にコロナ禍に見舞われました。コロナ禍は特異な環境を生み出し、社会の仕組みなどをすごいスピードで変えていきました。その現実を目にし、今のままでは北区が取り残されてしまうという危機感が大きく膨らみました。

また、まちづくりの中で100年に一度という4つの主要駅の再開発のタイミングで、今こそ区の長期的な方向性を示すことができる絶好のチャンスだと、立候補を決意しました。

区議、都議の時には、住民の皆さんに近寄りがたいイメージを持たれないよう、身近な存在になることをテーマに掲げていました。それは区長になった今でも変わらず、「顔の見える区長」「直接話せる区長」を目指して活動を続けています。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

苦労したことは多々ありますが、女性首長であることに対して前向きに捉えていますし、むしろこの2年は、女性首長でよかったと思うことの方が多かったように思います。女性区長ということで、北区を知っていただくきっかけの一つにもなっていると感じます。

区長になってから乗り越えてきたことを挙げると、家庭と仕事の両立です。区長は、議員とは違った時間的な忙しさがあります。拘束時間が長く、災害など緊急時のことを考慮すると、24時間公務のことが頭をよぎります。それに加え、家事や育児もこなさなければならず大変でした。とにかく時間の捻出や調整には工夫が必要でした。その状況に最初は戸惑い、家族に苦労をかけた部分がありましたが、周囲に理解、協力してもらえて救われた思いがしました。また、職員の皆さんのサポートがあってこその区長ですので感謝しかありません。

区長の責務としては、災害への緊張感やプレッシャーが一番大きいかもしれません。強い雨が続いたりすると災害が起きるのではないかと気になってしまいます。私は区内で災害が生じた時にできるだけ現場へ行くようにしているのですが、遠方へ出かけている時に大きな火災が発生してトンボ返りをしたこともありました。

Evidence 取り組み実績

公約に掲げた「7つの主要政策」に分けた「150の政策」の実施に向け取り組みを開始しました。①まず区民サービス向上の根幹となる行財政改革として、役所の縦割りをなくす「しごと連携担当室」や行政手続きの利便性や職員の働き方改革に向けた「デジタル推進担当部」、意欲の高い職員によるプロジェクトチームなど設置、外部人材の積極登用や歳入確保強化に向け遊休地の利活用促進、基金の柔軟な活用、職員の健康経営等を開始しました。②防災対策では、災害に関するシステムの大規模な改修やアプリの導入、防災備蓄品の充実や地域防災力向上の徹底した取り組みに着手しました。③子ども施策では「北区子どもの権利と幸せに関する条例」を施行し、オール北区で子どもを守り育てる体制づくりや「子どもなんでも相談窓口」区内21か所の設置、不登校対策の強化、体験型学習の充実なども行っています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

自分が「やりたい」「興味がある」ことに素直に向き合い、まず一歩、踏み出すことが1番大切だと考えます。 やれるか、やれないか、人からどう思われるか、子どもや親、金銭的なこと、将来のことなど色々、考え始めてしまうと動けなくなります。どうしたらできるか、ワクワクするかの感覚で、自分の想いや考えを一人でも多くの人に伝え、相談することで知恵や応援が集まってくると経験から実感しています。人や社会は思っている以上に優しいです。

常に「なりたい自分像と将来像」をイメージしながら「何をしたいのか」「何のために活動するのか」思いながら進み、立ち止まったり引き返したりしても、動き続けて下さい。応援しています。

⬅自治体ホームページはこちら

女性や子どもの権利を守るため 自分が置かれたこのまちで 使命を果たす

51

兵庫県
宝塚市長

山﨑 晴恵

YAMASAKI Harue

1970年1月29日 岡山県岡山市生まれ
1993年4月 損害保険会社勤務
2001年1月 産業カウンセラーとして独立開業
2007年3月 京都大学大学院法学研究科 修了
2009年11月 国会議員秘書
2013年3月 神戸大学大学院法学研究科 修了
2015年1月 明石市役所弁護士職員
2016年10月 法律事務所勤務
2018年3月 法律事務所開設
2021年4月 宝塚市長当選（1期目） 現在に至る

Turning Point 首長を目指したきっかけ

首長を目指したきっかけは、前市長から声をかけられたことでした。それまで、私は宝塚大劇場の横に法律事務所を構えて、女性や子どもの権利を専門とする宝塚市内唯一の女性弁護士として活動していました。女性や子どもといった社会的弱者と言われる人々の紛争や困難な課題を解決する過程で、行政の支援の重要さを感じていました。特に、DV被害者の支援では、緊急避難や支援措置、自立支援等、行政支援があるからこそ、被害者は安心できる場所で新たな人生のスタートを切ることができます。

行政のセーフティーネット機能を強化することができれば、救われる人が増えるのではないかと思い、話をお受けしました。

私自身の人生のスタンスとして、「置かれた場所で咲きなさい」という言葉を座右の銘にしています。これは求められたところへ行き、その場所で自分の全ての力をもって、その任務を成し遂げるというものです。私は宝塚市のため、自分の全てをかける思いで、選挙に臨みました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

政治の世界が男性社会だと感じることは、多々あります。首長同士のちょっとした雑談の中でも、女性首長に対する平等でない意見が示されたりします。要望に行くときは、女性が最初に部屋に入った方が和むと言われたり、持ち回りのはずの役目が女性に集中することもあります。現在、女性首長は全体の約4％しかいないため、こうした状況が生じるのかもしれません。女性首長が50％近くになれば、認識も変わると思います。

私は宝塚市のため、自分の持つあらゆる力を全て注ぐと決めていたので、女性首長として求められた役割には、異議を唱えず応じてきました。ただ、自分の意見と市民のためにどうするべきかという判断が食い違ったときは、やはり苦しさを感じることがありました。

現在は、全国市長会の中で、女性市長による子ども・子育て施策に関する意見交換会が開催されるなど、女性ならではの視点を活かしていく大きな動きが始まっています。これからは、女性首長であることが、よりよい施策へ繋がっていくと期待しています。

Evidence 取り組み実績

私が市長に就任して一番に積極的に進めた施策は、企業・学校・団体等との包括連携協定です。地域課題は様々であり、行政だけでは解決困難なものが多々あります。そこで企業のノウハウ、学校の学術研究、団体の経験等を集結して、地域課題を解決に導く仲間を増やしました。現在24の企業大学団体が、宝塚市を支える仲間となってくれています。2023年からは、これらの仲間を横に繋いで連携を図る「宝塚大会議」を開催しています。行政のみならず企業同士の連携による地域課題の解決を目指し、まさに協働の取り組みを推進しています。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

あなたが進もうとする道は順風満帆ではなく、様々な困難にぶつかるでしょう。しかし、同時に様々な笑顔にも出会うことができるでしょう。

「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」という名言がありますが、本当は「花の命は短くて、苦しきことのみ多かれど　風も吹くなり　雲も光るなり」という続きがあります。人生には苦しいことが多いけれども、風が吹き、雲が光るように、希望や幸せを見つけることができるのです。

あなたが守るべき人々の希望となり、幸せを実現できると信じて、前に進んでください。

⬅自治体ホームページはこちら

支えてくれる人たちの思いに
熱い情熱と冷静な行動でこたえる

52

大分県
日田市長

椋野 美智子

MUKUNO Michiko

1956年 大分県日田市生まれ
1978年 東京大学法学部を卒業
1978年 厚生省（現・厚生労働省）に入省
2006年 大分大学教授に就任
2019年 大分大学副学長に就任
2023年8月 日田市長　就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ

生まれは日田市ですが、大学から東京に出て、厚生労働省で28年間、仕事をしました。中央省庁の仕事は面白いけれど、もどかしい面もあります。どんなに制度を作っても実施するのは自治体、その首長の考え一つで医療や福祉の水準には大きな差が出ます。

両親の老後をみるために、50歳の時に厚生労働省を退職して、郷里に戻り、大学教授として教育研究をする一方で、地域に入り、課題を調査し、その解決に住民の方々と共に取り組みました。その時もやはり市長の考え方一つで取り組みの成否が大きく左右されることを見て、首長とりわけ基礎自治体である市町村長がどんなに国民の、市民の生活にとって重要かを痛感しました。

そんななか、生まれ故郷日田市で、市の将来を憂う方たちに懇請され、その思いに応えて、故郷のために今までの知識と経験とネットワークを総動員して恩返しをしようと、立候補を決めました。市民と一緒にまちづくり活動をしていた別府市が、市長が交替したことで飛躍的に発展していることを目の当たりにしていたことも、決意を後押ししました。

Episode

女性首長として苦労された事、乗り越えたエピソード

女性だからということで苦労を感じたことはありません。

むしろ、女性市長ということで、たくさんの女性たちが期待をしてくれていると感じています。そして男性の方々も、男性とは違う視点での市政を、やはり期待をしてくださってます。その期待に違わないよう、女性がもっと発言し、もっと活躍できるまち、女性だけでなく誰もが自分らしく生きられる、多様性を受け入れる、寛容なまちをつくっていきたいと思っています。

Evidence 取り組み実績

若い世代に選んでもらえるように、①子育て支援の徹底強化（保育料、学校給食費、高校生までの医療費の3つの無償化、放課後児童クラブの充実、今後はこども総合局（仮）の設置も予定）、②仕事の選択肢を増やすための取り組み（国内外からの企業誘致、農林業等の地場産業の振興）、③観光の強化による日田の魅力の世界への発信（「進撃の巨人の聖地化」、台湾や都市圏でのトップセールス、企業訪問など）。今後は、女性に選ばれ、女性の活躍しやすいまちにするために、ハラスメント（セクハラ、パワハラ、カスハラ等）対策に力を入れます。そのほか、④運転免許返納後の高齢者の移動支援、⑤合併後の旧町村地域の振興（市長直属のプロジェクトチーム設置）など。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

虫の目、鳥の目、魚の目をモットーに、現場に視点を置き、全体を俯瞰し、時代の流れを見据えて決断することを大切にしています。

私にできないことはたくさんありますが、女性だからではありません。何でもできる人なんていませんから、自分の得意なことは活かして、できないことはできる人に任せればいいのです。一番大切なリーダーの素養は、支えてくれている人たちへの愛情と大切に思う熱い心、そして冷静な判断力だと思っています。

たくさんの先輩女性たちのおかげで、今の時代、女性だからできないことなどありません。ガラスの天井ももうすぐきっと破れます。

挑戦は必ず力になります。どうぞ挑戦してください。

⬅自治体ホームページはこちら

びじょんネットワークのあゆみ

6年間の軌跡

女性首長による
びじょんネットワークのあゆみ

女性首長によるびじょんネットワークとは

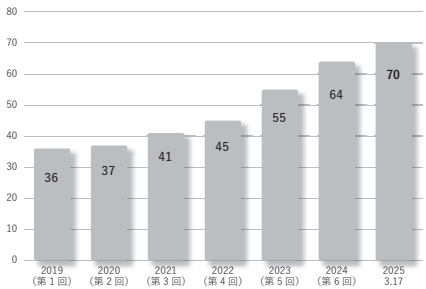
日本全体で女性の活躍を後押しし、女性が輝く社会の実現を目指していくため、2019年に小池東京都知事と吉村山形県知事が共同座長となり始まりました。設立の趣旨にご賛同いただいた全国の女性首長が参画しており、現在、すべての現職女性首長が参画しています。

毎年開催している会議では、女性首長が経済界の最前線で活躍する全国の女性経営者や駐日女性大使を交えて、女性の視点を取り入れた組織運営や地域活性化策などについて意見・情報交換を行います。

2020年からは、参画自治体の地域経済活性化・魅力PRを目的とし、各自治体にあるお店にご参加頂くオンラインショップを、2022年からは、東京都内でのポップアップショップを期間限定で開催しています。

びじょんネットを通じて、女性の活躍推進についての共通認識を形成し、誰もが輝く社会の実現を目指していきます。

＜びじょんネット参画首長数の推移＞



第1回
テーマ：持続可能な社会におけるこれからの生き方・働き方
令和元年（2019年）11月16日（土）
場所：東商グランドホール

第2回
テーマ：ウィズコロナ時代の女性活躍推進
令和2年（2020年）11月21日（土）
※オンライン開催

第3回
テーマ：国際社会における女性活躍
令和3年（2021年）10月23日（土）
※オンライン開催

第4回
テーマ：女性のエンパワーメントの推進
令和4年（2022年）11月20日（日）
東京商工会議所／オンライン　（ハイブリッド開催）

in 栃木
テーマ：女性活躍と地域イノベーションの未来
令和5年（2023年）6月25日（日）
日光金谷ホテル／オンライン　（ハイブリッド開催）

第5回
テーマ：女性活躍を推進するテクノロジーとジェンダー平等
令和5年（2023年）10月7日（土）
東京商工会議所／オンライン　（ハイブリッド開催）

第6回
テーマ：女性活躍推進のための投資とインクルーシブな社会の実現に向けて
令和6年（2024年）10月12日（土）
東京商工会議所／オンライン　（ハイブリッド開催）

＜第6回びじょんネット開催時の集合写真＞

女性首長によるびじょんネットワーク　第１回

令和元年（2019 年）11 月 16 日（土）場所：東商グランドホール

全国の女性首長が一堂に会する初めての機会であり、第一回目は、参画しているすべての女性首長にご参加いただく特別な会議となりました。会場に直接お越しいただく方もいれば、ビデオ参加で出席される方もいらっしゃいましたが、各自治体の取り組みや成果を共有することで、互いに学び合い、貴重なネットワーク構築の場となりました。

■参加首長による成果・取組発表

参加首長が3つのテーマについて、取り組み・成果等を紹介しました。

テーマ①：女性活躍推進において重点的・優先的に取り組んでいること

テーマ②：自身のキャリア形成

テーマ③：女性活躍のポイント

■基調講演

テーマ：激変する経済環境をチャンスに変えるには
～女性リーダーが出来ること～

登壇者：G＆S Global Advisors Inc. 代表取締役社長
橘・フクシマ・咲江氏

多様性を活かし、プラスアルファの新しい価値を創造できる組織・個人であり続けること、そのために「外柔内剛」の姿勢であることが、これからのリーダーの重要条件であると力説されました。

■女性経営者等によるパネルディスカッション

テーマ：持続可能な社会におけるこれからの生き方・働き方

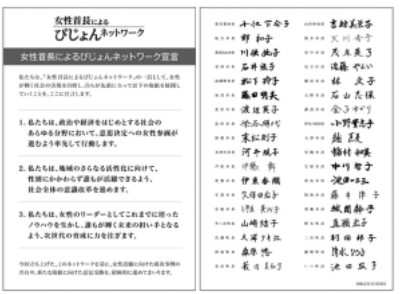
持続可能な社会に必要なキーワードや企業での事例、Ｇ２０での首脳宣言を事例とした国際的な政策形成における女性のエンパワーメントの重要性についてご発言がありました。また、多様化に向けた取り組みとして、研修での意識改革や人材の登用、女性活躍に対する思いなどについて意見交換を行いました。

■ビデオメッセージ

会議に来場できなかった女性首長が、女性活躍推進に向けた各自治体における取り組みおよび成果等に関するメッセージを紹介しました。

■ネットワーキング

参加者同士の交流を深めるとともに、現在活躍されている女性経営者や専門家の方々によるメンタリングも開催しました。


女性首長による
ぴじょんネットワーク

女性首長によるぴじょんネットワーク宣言

私たちは、「女性首長による ぴじょんネットワーク」の一員として、女性が輝く社会の実現を目指し、自らが先頭に立って以下の取組を展開していくことを、ここに宣言します。

1. 私たちは、政治や経済をはじめとする社会のあらゆる分野において、意思決定への女性参画が進むよう率先して行動します。

2. 私たちは、地域のさまざまな活性化に向けて、性別にかかわらず誰もが活躍できるよう、社会全体の意識改革を進めます。

3. 私たちは、女性のリーダーとしてこれまでに培ったノウハウを生かし、誰もが輝く未来の担い手となるよう、次世代の育成に力を注ぎます。

今回さらに付け、この本ネットワークを通じ、女性活躍に向けた政治参画の共有や、新たな取組に向けた意見交換を、切磋琢磨に進めてまいります。

全国36名の
女性首長による宣言文
（令和元年11月16日時点）

女性首長によるびじょんネットワーク　第２回

令和２年（2020年）11月21日（土）※オンライン開催

新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン開催となりましたが、全国から登壇者や参加者が参加しました。

また、女性活躍推進の気運醸成と参画自治体PRのため、特産品を集めた期間限定のECサイトを開設しました。

■基調講演

テーマ：起業ストーリーとAIの未来について

登壇者：株式会社シナモン代表取締役社長CEO 平野未来氏

プログラミングとの出会いやITを活用した新サービスの開発、海外での起業などの体験を語りました。AIは働き方改革・労働人口不足といった社会課題の解消に有効であり、コスト削減という見方ではなく「成長戦略」として捉える重要性を強調しました。また、人間とAIが共生する世の中を作っていきたいという思いなどが語られました。

■パネルディスカッション

テーマ：ウィズコロナ時代の女性活躍推進

コロナ対応の女性経営者のエピソードの紹介や女性の視点を活かした飲食業界支援や少子化対策、子育て支援、リカレント教育の重要性について意見交換をしました。

■女性首長と経営者による分科会

テーマ①：女性TOPだからこそできた変革事例

日本の女性活躍推進の課題や改革事例、女性人材の育成・活用、今後の展望や女性TOPとして取り組みたいことについて議論しました。

テーマ②：ICTを上手に採り入れる

ICTの現状や導入課題、自治体での導入事例とその影響・課題、女性活躍推進への活用、支援施策の展望について議論しました。

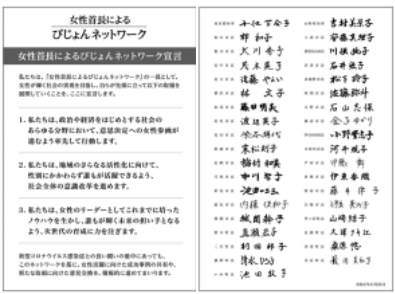
テーマ③：組織全体のウェルネスは経営に何をもたらすのか

健康経営の現状と課題や組織・社会への影響、自治体のウェルネス向上の取り組みと効果、今後の推進について議論しました。

※健康経営：従業員等の健康管理を経営視点で戦略的に実践すること。

テーマ④：地方発ビジネスの成功を学ぶ~女性ならではの発想転換~

女性の発想による成功例、地方での事業展開、女性起業支援や地方ビジネス活性化の取り組み、地方特性を活かしたビジネス展開の重要視点について議論しました。


女性首長による
ぴじょんネットワーク

女性首長によるぴじょんネットワーク宣言

私たちは、「女性首長によるぴじょんネットワーク」の一員として、女性が輝く社会の実現を目指し、自らが先頭に立って以下の取組を展開していくことを、ここに宣言します。

1. 私たちは、政治や経済をはじめとする社会のあらゆる分野において、意思決定への女性参画が進むよう率先して行動します。

2. 私たちは、地域のさらなる活性化に向けて、性別にかかわらず誰もが活躍できるよう、社会全体の意識改革を進めます。

3. 私たちは、女性のリーダーとしてこれまでに培ったノウハウを生かし、誰もが輝く未来の担い手となるよう、次世代の育成に力を注ぎます。

新型コロナウイルス感染症との長い闘いの最中にあっても、このネットワークを基に、女性活躍に向けた成功事例の共有や、新たな取組に向けた意見交換を、情報的に進めてまいります。

全国37名の
女性首長による宣言文
（令和２年11月21日時点）

女性首長によるびじょんネットワーク　第３回

令和３年（2021年）10月23日（土）※オンライン開催

より多様な視点を取り入れた会議とするため、女性首長、女性経営者に加え、新たに駐日女性大使が参加しました。

期間限定でのＥＣサイトの開設も継続しました。

■応援メッセージ

登壇者：駐日サモア独立国特命全権大使 ファアラヴァアウ・ペリナ・ジャックリーン・シラ・ツアラウレレイ氏

ダイバーシティとインクルージョンの推進が必要であり、変化を求め続ける必要があると強調しました。

■基調講演

テーマ：国際社会における女性活躍

登壇者：駐日レソト王国特命全権大使 パレサ・モセツェ氏

国際社会での女性のエンパワーメントは、マイノリティや社会的弱者への包括性と多様性の推進が必要だと述べました。

登壇者：駐日メキシコ合衆国特命全権大使 メルバ・プリーア氏

メキシコのジェンダー平等を形式的・実質的に分析し、若い世代の機会提供の重要性を強調しました。

登壇者：駐日ノルウェー王国特命全権大使 インガ・ニーハマル氏

ジェンダー平等は社会全体の責任であり、英雄的な資質を求めないことが重要だと訴えました。

■パネルディスカッション

テーマ：女性リーダーの醍醐味

傾聴と共感、男女の協調、家庭と仕事の両立、リーダーの模範の重要性について議論しました。

■女性首長と駐日女性大使による分科会

テーマ①：意思決定プロセスの女性比率を高める必要性

自治体の女性管理職比率の実情、女性管理職登用の実例とその変化、女性活躍推進の取り組みについて議論しました。

テーマ②：多様性を高めて、革新につなげる

地域のダイバーシティ課題、暮らしやすい地域づくりの事例と効果、多様性推進の今後について議論しました。

テーマ③：次世代によるプロジェクト推進

若手女性や若手人材育成の課題、各自治体の取り組み事例とその効果について議論しました。

テーマ④：持続可能な社会を目指して

持続可能な社会・地域づくりの課題、自治体の取り組み事例、女性の社会進出の課題について議論しました。

女性首長による
ぴじょんネットワーク

女性首長によるぴじょんネットワーク宣言

私たちは、「女性首長によるぴじょんネットワーク」の一員として、自治体が輝く社会の実現を目指し、自らが先頭に立って以下の取組を実践していくことを、ここに宣言します。

1. 私たちは、政治や経済をはじめとする社会のあらゆる分野において、意思決定への女性参画が進むよう率先して行動します。

2. 私たちは、地域のさらなる活性化に向けて、性別にかかわらず誰もが活躍できるよう、社会全体の意識改革を進めます。

3. 私たちは、女性のリーダーとしてこれまでに培ったノウハウを生かし、誰もが輝く未来の担い手となるよう、次世代の育成に力を注ぎます。

「国際社会における女性首脳」をテーマに開催した今回のぴじょんネットワークで得られた成功事例の共有や、新たな取組に向けた意見交換を、積極的に進めてまいります。

全国 41 名の
女性首長による宣言文
（令和 3 年 10 月 23 日時点）

女性首長によるびじょんネットワーク　第４回

令和４年（2022年）11月20日（日）東京商工会議所 ／オンライン（ハイブリッド開催）

女性首長、女性経営者、駐日女性大使が参加し、会場とオンラインのハイブリッド開催。YouTubeでライブ配信しました。

ＥＣサイトに加え、東京都庁と東京丸の内でマルシェを開催しました。

■応援メッセージ

登壇者：参議院議員内閣総理大臣補佐官（女性活躍担当）森まさこ氏

女性の経済的自立や働く環境整備は国と地域の連携が必要で、この会議は男女共同参画を広げる貴重な機会だと語りました。

登壇者：ドイツ連邦共和国ベルリン市長 フランツィスカ・ギファイ氏

東京とベルリンの協力関係と日本とドイツの共通価値を強調し、男女平等と女性の自己決定力の支援が必要だと述べました。

■基調講演

テーマ：起業ストーリーとAIの未来について

登壇者：駐日メキシコ合衆国特命全権大使 メルバ・プリーア氏

メキシコの男女平等の取り組みの説明や、女性のエンパワーメントとリーダーの支援・育成の必要性を強調しました。

登壇者：ザッカーバーグ・メディア創立者兼CEO/Facebook元マーケティングディレクター ランディ・ザッカーバーグ 氏

「PICK THREE」という考え方を紹介、女性が仕事と家庭を

両立する方法を提案し、女性アーティストと起業家がビジネス界で力を発揮することを願っていると話しました。

■女性首長と駐日女性大使、女性経営者による分科会

テーマ①：サステナブルな社会と女性のリーダーシップ

女性リーダーの役割、持続可能な社会での女性の貢献、環境整備、権限付与について議論しました。

テーマ②：地場産業や地域の活性化における女性活躍推進

地域課題解決と地域経済を牽引する次世代女性人材の育成・エンパワーメントについて議論しました。

テーマ③：女性が牽引する、次世代を見据えた未来戦略

女性の共感・創造・対話力を活かした国際関係の安定、地域経営の活性化、次世代女性人材の確保について議論しました。

テーマ④：女性の活躍が『この国のかたち』を変える

女性の政治参加の効果と、政治・行政分野での活躍による次代の日本社会づくりについて議論しました。

テーマ⑤：SDGsの推進と女性のエンパワーメント

暴力や貧困から女性を守る取り組みや女性への教育、経済的支援の施策や社会のコミットメント拡大について議論しました。

女性首長による
びじょんネットワーク

女性首長によるびじょんネットワーク宣言

私たちは、「女性首長によるびじょんネットワーク」の一員として、台形が輝く社会の実現を目指し、自らが先頭に立って以下の取組を展開していくことを、ここに宣言します。

1. 私たちは、政治や経済をはじめとする社会のあらゆる分野において、意思決定への女性参画が進むよう率先して行動します。

2. 私たちは、地域のさらなる活性化に向けて、性別にかかわらず誰もが活躍できるよう、社会全体の意識改革を進めます。

3. 私たちは、女性のリーダーとしてこれまでに培ったノウハウを生かし、誰もが輝く未来の担い手となるよう、次世代の育成に力を注ぎます。

「女性のエンパワーメントの強化」をテーマに開催した今回のびじょんネットワークで築けた活動基盤の活用や、新たな取組に向けた意見交換を、積極的に進めてまいります。

全国45名の
女性首長による宣言文
（令和4年11月20日時点）

女性首長によるびじょんネットワーク　in 栃木

令和５年（2023 年）６月 25 日（日）日光金谷ホテル ／オンライン（ハイブリッド開催）

G7栃木県・日光男女共同参画・女性活躍担当大臣会合に合わせて、「女性活躍と地域イノベーションの未来」をテーマとして、会議を実施しました。栃木県内の女性首長と東京都内の女性首長が参加、YouTubeでライブ配信をしました。

■各国からのビデオメッセージ

フランス：男女平等・共同参画担当大臣 イザベル・ローム氏

イギリス：英国保健・公的介護省政務官 女性担当大臣付 政務次官
マリア・コールフィールド氏

アメリカ：米国務省グローバル女性問題担当
カトリーナ・フォトバット氏

在日米国商工会議所：在日米国商工会議所会頭
オム・プラカシュ氏

各国の女性活躍の取り組みを紹介し、さらなる推進を呼びかけました。また、協力と努力の重要性を強調しました。

■基調講演

登壇者：株式会社資生堂取締役常務／チーフＤ＆Ｉオフィサー
鈴木ゆかり氏

資生堂の女性リーダー育成ネクストリーダーシップセッションfor　womenを紹介し、「こうあるべき」という固定概念のリーダー像をほぐし、自分らしいリーダーシップを発揮してもらう取

り組みによる成果をお話しいただきました。

また、女性の社会進出には企業、法整備、行政の努力と社会全体の意識改革が必要と訴えました。

■トークセッション

小池知事や吉村知事を含む女性首長５名、女性経営者３名、モデレータ１名、合計９名の登壇者全員で３つのテーマについて議論しました。

テーマ①：地域イノベーションと女性のリーダーシップ
テーマ②：デジタル社会の人材育成と女性活躍支援
テーマ③：持続可能な地域社会と女性の働き方

■都内女性区市町長からのエール

東京都内の女性区市町長７名から、トークセッションの感想や自治体での女性活躍推進の取り組みについてお話いただき、事例共有しました。

女性首長によるびじょんネットワーク　第５回

令和５年（2023年）10月７日（土）東京商工会議所 ／オンライン（ハイブリッド開催）

女性首長、女性経営者、駐日女性大使が参加し、会場とオンラインのハイブリッド開催。YouTubeでライブ配信しました。

ＥＣサイト、JR東京駅会場でマルシェを開催しました。

■応援メッセージ

登壇者：オーストリア連邦首相府 欧州連合・憲法担当大臣
カロリーネ・エットシュタードラ氏（エリザベート・ベルタニューリ駐日オーストリア共和国大使代読）

欧州委員会初の女性委員長が誕生したが、欧州理事会では27ヶ国中3ヶ国しか女性がおらず、次世代女性リーダーを増やすため社会全体の継続的な努力が必要と話しました。

■基調講演

登壇者：駐日ヨルダン・ハシェミット王国大使 リーナ・アンナーブ氏

ヨルダンでは女性の政治関心が高まり、科学・工学の修士・博士の60％が女性だが、キャリアには繋がっておらず、女性の権利とジェンダー平等には世界全体の努力が必要だと話しました。

登壇者：昭和女子大学 総長 坂東眞理子氏

様々な課題解決には、新しい視点を持ったチェンジメーカーとなるリーダーが必要で、まず女性自身が変わることが重要。「シンパシー」「シェア」「サポート」の3Sが必要で女性首長が次世代に良いお手本を示すことを期待するとエールを送りました。

■パネルディスカッション

テーマ：女性活躍を推進するテクノロジーとジェンダー平等

国連女性の地位委員会で女性のデジタルスキル向上が主要議題となり、デジタル技術を活用した女性活躍を議論しました。

■分科会

テーマ①：DXの推進が女性の働き方を変える

DXを通じて女性の働き方をイノベートし、潜在能力を最大限にできる取り組みについて議論しました。

テーマ②：女性が輝くためのライフ・ワーク・バランス

男性の育児休暇取得率向上や女性の能力を活かす社会問題の解決策について議論しました。

テーマ③：多様な性と生を尊重する社会の実現について

性的マイノリティ差別の現状と性の多様性をさらに社会に広める方策について議論しました。

テーマ④：女性の尊厳と誇りを守る社会をめざして

全ての女性の生き方や身体について自己決定権が保障され尊厳が守られる社会に向けた取り組みについて議論しました。

女性首長による
びじょんネットワーク

女性首長によるびじょんネットワーク宣言

私たちは、「女性首長によるびじょんネットワーク」が一員として、女性が輝く社会の実現を目指し、自らが実践に立って以下の取組を展開していくことを、ここに宣言します。

1. 私たちは、政治や経済をはじめとする社会のあらゆる分野において、意思決定への女性参画が進むよう率先して行動します。

2. 私たちは、地域のさまざまな活性化に向けて、性別にかかわらず誰もが活躍できるよう、社会全体の意識改革を進めます。

3. 私たちは、女性のリーダーとしてこれまでに培ったノウハウを生かし、誰もが輝く未来の担い手となるよう、次世代の育成に力を注ぎます。

「女性活躍を推進するテクノロジーとジェンダー平等」をテーマに開催した今回のびじょんネットワークで得られた成果等を共有や、新たな取組に向けた意見交換も、積極的に進めてまいります。

全国55名の
女性首長による宣言文
（令和5年10月7日時点）

女性首長によるびじょんネットワーク　第６回

令和６年（2024年）10月12日（土）東京商工会議所／オンライン（ハイブリッド開催）

女性首長、女性経営者、駐日女性大使が参加し、会場とオンラインのハイブリッド開催。YouTubeでライブ配信しました。

ＥＣサイト、東京丸の内でマルシェを開催しました。

■応援メッセージ

登壇者：内閣府特命担当大臣 三原じゅん子氏

こども政策、若者政策、女性活躍、男女共同参画、孤独･孤立対策などの重要施策を皆様としっかり連携して推進していく。リーダーによって、政策は進めることができる。一歩ずつ前に進めていきましょうと力強く語られました。

登壇者：東京都副知事 松本明子氏

持続可能な社会の実現には、全ての人が意欲と能力を発揮できる環境が必要。強いトップの信念とやる気で、皆様と女性活躍を推進し、未来を切り開いていきたいと語られました。

■基調講演

登壇者：元日本銀行理事／株式会社豊田自動織機取締役 清水季子氏

日本は教育機関・企業・女性個人を繋ぐエコシステムが弱いが、15歳時点での理工系リテラシーが世界トップとの調査結果も。小中学生へ理数系の原体験の提供、ネットワーク強化、企業や自治体と連携する仕組みが必要。また、女性への理数分野のバイアス克服も重要だと話しました。

■パネルディスカッション

テーマ：女性リーダーシップの挑戦と可能性

女性のリーダーシップの発揮と社会変革に向けた行動について議論しました。

■分科会

テーマ①：女性への投資が地方にイノベーションを起こす

地方のジェンダー課題と女性の能力を発揮させる地方の取り組み・イノベーションについて議論しました。

テーマ②：フェムテックが変える、働く女性が輝く組織の未来

女性特有の健康課題をテクノロジーの力で解決するフェムテックや女性の健康課題と組織の未来を議論しました。

テーマ③：女性が一歩踏み出すための「学び」の可能性

教育と女性の経済自立・エンパワメントは連動しており、女性が一歩踏み出すための学びについて議論しました。

テーマ④：ジェンダーバイアスを打ち破り、誰もがワーク・ライフを充実できる社会へ

男女の役割を固定的に考えるジェンダーバイアスを打破する方法、充実したワーク・ライフについて議論しました。

女性首長による
びじょんネットワーク

女性首長によるびじょんネットワーク宣言

私たちは、「女性首長による びじょんネットワーク」の一員として、女性が輝く社会の実現を目指し、次の宣言に沿って具不の取組を展開していくことを、ここに宣言します。

1. 私たちは、政治や経済を始めとする社会のあらゆる分野において、意思決定への女性参画が進むよう率先して行動します。

2. 私たちは、地域のさらなる活性化に向けて、性別にかかわらず誰もが活躍できるよう、社会全体の意識改革を進めます。

3. 私たちは、女性のリーダーとしてこれまでに培ったノウハウを生かし、誰もが輝く未来の担い手となるよう、次世代の育成に力を注ぎます。

「女性活躍推進のための政策とインクルーシブな社会の実現に向けて」をテーマに開催した今回のびじょんネットワークで得られた成功事例の共有や、あたらな取組に向けた意見交換を、関係的に進めてまいります。

令和6年10月12日

全国 64 名の
女性首長による宣言文
（令和 6 年 10 月 12 日時点）

寄稿

活躍する女性リーダーたちからのメッセージ

駐日メキシコ大使 (2019年6月より)

メルバ・プリーア　*MELBA Pría*

現職以前は、駐インドメキシコ大使（2015〜2019年）、駐インドネシア大使（2007〜2015年）を務め、アジアにおけるメキシコの外交戦略強化に従事した。
メキシコ国内の公的機関で、貧困、アイデンティティ、寛容、社会的弱者や先住民への支援などの政治や開発に関するテーマを中心に取り組んできた。外務省では国内外の市民社会との関係強化に貢献した。ジェンダー平等、多様性、インクルージョンを重視し、次世代を担うリーダー育成に努め、これらの価値観を育んでいる。
メキシコシティ生まれ。社会学における学士号、公共政策および国際研究に関する修士号を取得、さらに国家安全保障と戦略研究で大学院課程を修了。多様性や公共政策に関する著書も多数執筆。

女性の参画が社会を変える―メキシコと日本の挑戦

私はこれまで、女性たちが政策立案の中心に関われるよう尽力してきました。私はひとりの公務員として、女性のエンパワーメントを推進することが重要だと考えており、その第一歩として政治における女性の代表を増やすことが不可欠だと考えています。女性が意思決定の場で発言権を持つことは極めて重要ですが、その実現を阻む障壁は、法律や慣習、固定観念など、社会のさまざまな分野に存在しています。
メキシコでは、クオータ制の導入により2018年以降、連邦議会で男女同数の議席が確保されるようになりました。これは、女性議員と男性議員が意見の違いを乗り越え、共通の目標に向かって努力した成果です。そして昨年10月、メキシコは史上初の女性大統領を迎えました。

一方、日本ではジェンダー平等の課題が依然として多く、2024年の「ジェンダーギャップ・レポート」では146カ国中118位にランクされています。しかし、少しずつではありますが、女性の政治参画やリーダーとしての活躍が増えています。さらなる改革が求められることは明らかです。

小池知事と吉村知事が推進する「女性首長によるびじょんネットワーク」は、女性首長を支援し、社会全体のジェンダー平等を促進する取り組みです。両知事のリーダーシップと実績は、日本全国の若い女性に勇気を与えているでしょう。このような活動が、日本社会の意識を大きく変えていく可能性を秘めています。

日本とメキシコには、何千年もの歴史、豊かな食文化、家族を大切にする価値観、さらには女神を起源とする神話など、多くの共通点があります。どちらの国も家父長的な文化を持ちながら、社会の変化を通じて、より平等な未来を築くことができると信じています。育児休暇の改善や、ビジネス、スポーツ、芸術における女性の活躍など、前向きな変化が見られています。アファーマティブアクション（積極的改善措置）も、その変化を加速させるかもしれません。

社会は常に進化しています。女性に適切な機会が与えられれば、社会全体の発展に大きく貢献できると確信しています。

元日本銀行 理事
株式会社豊田自動織機 取締役
株式会社EmEco 代表取締役社長

清水 季子 *SHIMIZU Tokiko*

2020年5月から2024年5月まで日本銀行理事を務め、国際関係統括を担当。G7やG20等の国際会議に日本銀行代表として参加。1987年に日本銀行に入行後、主に金融市場とプルーデンス政策の分野で経験を積み、欧州統括役 や高松支店長・名古屋支店長も務めた。2024年6月より、株式会社豊田自動織機の取締役。2024年8月より、人的資本強化を目的に自ら設立した株式会社EmEcoの代表取締役社長。
1987年に東京大学工学部卒業。1994年に米スタンフォード大学国際政治学修士号取得。

持続可能な社会に必要な力

生命化学の世界では「持続可能性が高いものとは変わり続けるもの」と考えられています。私達の身体の細胞も3ヶ月程で全て入れ替わるといいます。そうした新陳代謝によって人間は80年近くも生き続けられるのです。持続可能な社会とは変わり続けられる社会であり、そのために必要な条件が「多様性を高める」ことなのです。

日銀理事として参加した多くの国際会議で、参加者の半数は女性でした。既に世界は多様化しています。そんな世界が日本を尊敬する点が2つあります。人の力とモノをつくりあげる力です。この2つが日本の成長の源泉といえます。最後の1ミリまでお客様のニーズに応える姿、例えば、駅に到着した新幹線があっという間に綺麗になって時間通りに出発する様子に海外の人達は感心します。

戦争、AI、気候変動など今地球は大きな変化に直面しています。この激動に対応するには、全ての人が才能を発揮できる社会をつくる必要があります。15歳時点で日本の女子は世界トップの理数系リテラシーを誇りますが、エンジニアに占める女性比率は1割程。消えた理数系得意女子を探す旅を、昨年8月に会社を起業して始めたところです。仲間達との旅が楽しみです。

voice 3

株式会社Mentor For 代表取締役CEO

池原 真佐子 *IKEHARA Masako*

早稲田大学、同大学院卒業後、新卒でPR会社に。転職を経てNPO、コンサルティング会社で人材開発に携わる。在職中にINSEADで修士号取得し、2014年に起業。妊娠するも、臨月でパートナーが海外赴任。ワンオペ育児を機に事業転換し、2018年に女性リーダー育成を目的とした社外メンターマッチング事業を立ち上げる。2年半のワンオペ育児を経て家族の都合でドイツに移住。2年間、日本と行き来しながら新規事業を育てる。

現在は日本で事業拡大中。全国でDE&Iや女性活躍の講演活動にも注力。第23回JapanVentureAwardsJVA審査委員会特別賞、第4回東京都女性経営者アワード、第21回女性起業家大賞、EYWinningWomen2022、第8回DBJ女性新ビジネスプランコンペティションファイナリスト等、受賞歴多数。

自分らしく生きていくために

女性のキャリアは、結婚や出産、家庭の事情など、人生の様々な選択が絡み合いますし、私も多くの壁にぶつかってきました。その中で「どう生きたいか」「何を大切にしたいか」を自分で決めることが、最も重要だと考えています。

しかし、一人で悩み、迷うことも多いでしょう。だからこそ、メンターやロールモデルの存在が大切です。私自身、仕事や育児との両立で試行錯誤を繰り返す中で、先を歩くメンターの言葉や姿勢に救われ、次の一歩を踏み出せました。身近に相談できるロールモデル・パーツモデル的なメンターを持つことで、「私にもできる」と思える瞬間が増えるはずです。

そのような思いから私が始めたMentor Forでは、そんな女性たちが次のステップへ踏み出せるよう、経験豊富なメンターとマッチングする仕組みを提供しています。自分らしいキャリアを築くために、迷ったときこそ誰かの力を借りることも大切です。

今、社会は確実に変わっています。女性が自分らしく活躍できる時代をつくるために、一歩を踏み出してみませんか？自分の可能性を信じ、人生を主体的に選択する女性が増えることを願っています。

東京商工会議所　会頭

小林 健　　KOBAYASHI Ken

東京都生まれ。1971年東京大学法学部を卒業後、三菱商事に入社。
造船・海運事業に20年以上従事したほか、ロンドン支店勤務、シンガポール支店長なども経験し国際情勢にも通暁。2010年同社社長、16年会長を経て、22年から相談役。22年11 月に東商会頭・日商会頭に就任。
趣味は落語を聴くこと、特技はバドミントン。大学の国公立学生選手権ではシングルス2連覇を果たした。

むすびに

本書『未来を創る女性首長たち～未来のリーダーへ贈るメッセージ～』をお読みいただき、誠にありがとうございます。本書は、現在行政の第一線で活躍されている女性首長の皆様による貴重な経験談やメッセージをまとめた一冊です。こうして皆様にお届けできることは、女性活躍の「輪」を広げる取り組みである「Women in Action」（WA）を推進するうえで、大きな意義を持つと考えております。各地でリーダーとして奮闘される皆様が示された力強い歩みとメッセージは、次世代の女性リーダーにとって大きな励みとなることでしょう。

私自身、東京商工会議所会頭として、女性の活躍が社会や経済の発展に不可欠であると強く認識しております。2024年12月には、東京商工会議所・日本商工会議所において「多様な人材の活躍施策に関する重点要望」を決議し、「女性のキャリア支援の強化」や「女性の就労拡大を阻害する税・社会保障制度の抜本的見直し」を重点項目として盛り込みました。本要望の実現に向け、行政と連携しながら着実に取り組んでまいります。

本書がより多くの方々に届き、女性活躍の輪が一層広がること、そして女性リーダーが増え、社会全体がより豊かになることを心より願っております。

未来を創る女性首長たち

未来のリーダーへ贈るメッセージ

発行日：2025年3月28日
発行元：女性首長によるびじょんネットワーク
実行委員会
（事務局　富田、室屋、北）

編集長	室屋 優美
制作ディレクター	岩本 孝史　藤原 美保子
装丁デザイン	島峰 藍　片岡 美亜
エディトリアル	高瀬 俊
本文DTP	糟谷 一穂　鳥越 浩太郎
フォトグラファー	安井 祈
印刷ディレクター	増田 成人
印刷・製本	大日本印刷株式会社

女性首長によるびじょんネットワーク
URL：https://vision-network.tokyo

※法律上の例外を除き、本書を無断で複写・複製することを禁じます。
Printed in JAPAN